



神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだった

みなさん新年あけましておめでとうございます。神の母聖マリアの守るべき大祝日です。日本の多くの人が新年をどこか祈りの場所に詣でて出発しています。わたしたちは真っ先に教会に来て、新しい年が祝福に満ちた年であるように祈ります。特に、神の母聖マリアの取次ぎを願いたいと思います。

わたしが出した年賀状には、「桃栗三年浜串六年。本年もよろしくお願いいたします」と書きました。小教区の皆さんにはこのミサであいさつしますので特にはお出しませんが、もう6年も経過したのだなあと思います。司祭は6年経つと何が起こっても不思議ではありませんので、置かれた場所で咲くように精いっぱい努力したいと思います。

2015年わたしが思い出すのは3月17日の「信徒発見150周年」に向けて積み重ねてきた教区シノドスが「父の家に帰ろう、そして出かけよう」という提言案にまとめられ、公布されるという恵みがありました。そして12月8日には「いつくしみの特別聖年」も開かれるという年でした。また小教区でもみなさまのたくさんの支えによって、何とか務めてまいりました。2016年、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

ところでミサの説教は、時に難しいと思うことがあります。いちばん難しいのは、同じテーマで違う説教を用意することです。神の母聖マリアの大祝日を始め、主の降誕、御復活などは同じテーマです。たいていの福音朗読は、マタイ・マルコ・ルカの共観福音書を順に使用するので全く同じテーマにはなりません。

神の母聖マリアの大祝日は違います。テーマが同じですから、わたしは23年同じテーマと向き合って違う説教を考えているわけです。これはなかなか大変なことです。一字一句違えずに同じことを話しても気付かれないかもしれません。それでいいじゃないですかと思うかもしれませんが、同じ話を毎年話してくださいとみなさんが言われたらきっと辛いと覚えることでしょう。わたしも同じことです。そういう苦労を味わいながらの元旦の説教であります。

神の母聖マリアの大祝日にあたり、まず羊飼いたちの思いに分け入りたいと思います。羊飼いたちが見聞きしたこと、それは主の降誕夜半の福音朗読にある通りです。「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」(2・12)今日の福音朗読にも同じことが書かれています。

もしかしたら、羊飼いたちは天使の言っていることを文字通りには受け取っていなかったかもしれません。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」

(2・11) このメッセージは良いとしても、あとに続く言葉に羊飼いたちは顔を見合せたのではないのでしょうか。「救い主」が、「主メシア」と呼ばれる方が、布にくるまって飼葉桶の中に寝ているだろうか。半信

半疑でいたとしても不思議ではありません。

羊飼いたちは「急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」(2・16) 羊飼いたちは、すべて天使の話したとおりの光景を見ました。羊飼いたちが半信半疑でいたとすれば、目の前の光景は最初の疑念を吹き飛ばすのに十分だったでしょう。見事に、貧しくみすぼらしい光景。救い主が、主メシアが、布にくるまって飼葉桶に寝ていたのです。

ではなぜ羊飼いたちは、「見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」(2・20) のでしょうか。そこにはマリアとヨセフが大きく関係していると思います。

マリアとヨセフが、わが子を喜んで抱いていた。たとえ布切れにくるんで飼葉桶に寝かせなければならなかったとしても、そこに神の計画を汲み取ろうとし、使命に忠実に従い、約束された救い主を迎えることができ、本当に喜んでいる。この姿が、羊飼いたちにとってすべてを納得させる決め手になったのではないのでしょうか。

羊飼いたちは最初半信半疑だったかもしれませんが、ヨセフとマリアが少しの疑いもなく、目の前にいるわが子を約束された救い主として受け入れておられた。特にマリアは、「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(2・19) のでした。これが羊飼いたちに勇気を与え、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせ、神をあがめ、賛美しながら帰って行ったのです。

羊飼いたちはヨセフとマリアの少しも動じない姿を見て、目の前にいる乳飲み子が救い主、主メシアであると理解し、人々に告げ知らせる力を得たのでした。これはわたしたちが取り組むべきお手本だと思います。

わたしたちもこれから新たな年に向かって歩み始めます。カトリックの信仰に自信をもって生きるため、神がいつもわたしたちのそばにいて守り導いてくださることに自信をもって生きるために、神の母聖マリアの動じぬ姿を一人ひとりの心に写し取って帰りたいと思います。

わたしたちは神の手の中で生きていると証するために、誕生にまつわるすべてを包み隠さず示しておられる神の母聖マリアに信頼を寄せて今年一年を過ごしていきましょう。あわせて今年一年が平和な年であることを願いましょう。



主の公現 (マタイ 2:1-12)

わたしたちは東方でその方の星を見た

主の公現の祝日を迎えました。東方から拝みに来た占星術の学者によって、ユダヤ人の王としてお生まれになった幼子が、ついに諸国民の王として示されます。この礼拝によって、ユダヤ人だけでなく、異邦人もお生まれになった王の救いの力にあずかることが明らかになりました。

中田神父の 2016 年の始動は 2 つの別々の行事で始まりそうです。1 つは 2 月 20 日と 21 日の信徒発見劇、もう 1 つは 1 月最後の火曜日 (26 日) の司祭団マラソン大会です。久しぶりに、10 キロマラソンに出てみようと思っています。

信徒発見劇は出番も少ないので、しっかり練習すればこなせると思いますが、司祭団マラソンのほうは 20 日ちょっとしかないなので、どんなに遅いタイムでも、何人追い抜かれても最後まで走る。それが目標です。

まともに走ろうと思うなら 3 ヶ月は練習が必要です。残念ながら今からその時間はありませんので、怪我しないで、恥ずかしい思いをしても走り抜いて帰って来たいと思います。

福音に戻りましょう。占星術の学者たちの礼拝は、神の「秘められた計画」の扉を開く出来事と言ってよいでしょう。異邦人にはわたしたちも含まれています。ユダヤ人以外のすべての人の救いの扉が、占星術の学者たちの礼拝によって開かれたわけです。イエスを信じ、礼拝する人は、国籍や人種や時代を問わず救われるのです。

福音朗読を読み返しながら、一つの疑問が浮かびました。占星術の学者たちの行動は、イエス・キリストを危険にさらしたのではないかという疑問です。彼らの言動がヘロデの耳に入ったことで、ヘロデは幼子の抹殺を画策します。もし学者たちがヘロデの凶暴な性格をもっと深刻に考えたなら、イエス・キリストが成長して危険が減ってから贈り物を携えて礼拝に行くという選択肢もあったのではないのでしょうか。

考えたのは、彼らは占星術の学者であり、イエス・キリストがどのような星のもとにお生まれになったかを十分考えた上で、幼子の時期に自分たちが礼拝に出向いてもヘロデの魔の手から逃れ、王として立派に使命を果たすに違いないとの結論にたどり着いたのだらうということです。つまり学者たちが導き出したのは「お生まれになった方は地上のどの王よりも強い星のもとに生まれた」という答えだったのです。

学者たちは自分たちが得た確信のもとに果敢に行動します。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(2・2) 彼らの言葉は、彼ら自身の命も危険にさらすものでした。そんな大それたことを言えば、ヘロデの気分次第で彼らの首が飛ぶこともあり得ます。しかし占星術の学者たちは、自分たちがユダヤ人の王としてお生まれになった方を見つけ出すまでは殺されないと分かっていたのでしょうか。

また、彼らの考えの正しさは星の導きによっても証明されました。

「彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。」(2・9) 学者たちはその星を見て喜びにあふれます(10節参照)。お会いする王は、ヘロデという残虐な王よりも強く、地上のどの王よりも尊い方であることを、星の導きによっても感じたことでしょう。

ついに占星術の学者たちは、星が示す王を見つけます。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」(2・11)

占星術の学者たちがどこまで感じ取ったかわかりませんが、彼らが見た光景には重大な意味が隠されていると思います。ユダヤ人の王としてお生まれになった方は幼子でした。わたしが疑問に思ったと言いましたが、このままではヘロデに簡単に消されてしまうか弱い姿でした。

神が占星術の学者たちに示した幼子、それは一つのメッセージだったと思います。弱いとしか思えない姿のうちに、すべての人を救う神の計画は実現する。そのことを見える形で学者たちにお示しになったのです。

イエスはのちに、十字架の上で命をささげ、人類の救いを成し遂げます。十字架の姿はこれ以上ない弱い姿のはずです。しかし神の救いのわざはこの「弱さ」の中で発揮されるのでした。学者たちが見た幼子イエスにも、「弱さの中に発揮される神の力」が込められていたのです。

ひょっとすると、学者たちはヘロデの魔の手が幼子に向かうかもしれない、そんな心配はしていなかったのかもしれませんが。この方はどんな危険をもくぐり抜ける星のもとに生まれた方である。わたしたちが余計な心配をする必要はない。わたしたちは高価な贈り物をささげるに値する方を見出した。それで十分だ。だから安心して国に帰ろう。こんな晴れやかな気持ちだったかもしれません。

神の救いの計画は、人間の悪意など全く意に介さないほど優れています。占星術の学者たちが拝んだ幼子イエスを通して、わたしたちもこの確信を持ち帰りましょう。

学者たちは「別の道を通して自分たちの国へ帰って行った」(2・12)とあります。学者たちの身を守るという意味もあったかもしれませんが、神の計画はすべてに勝り力強いことを知って、それを理解しないヘロデにもはや用はないので別の道を通して帰ったと言ってもよいでしょう。

わたしたちも、弱さの中で力を発揮する神の救いの計画をベツレヘムの馬小屋で確かめました。それはこの世が頼りにする力とは別の道です。けれども別の道を通らなければ、わたしたちの本当のふるさとである天の国へ帰ることはできないと思います。神の救いの計画はすべてに勝る。覚悟をもって、この信仰を携えて生きていきましょう。たとえこの道が別の道だと言われても、勇気をもって証することにいたしましょう。



主の洗礼 (ルカ 3:15-16,21-22)

後から来られる方は聖霊で洗礼を受ける

主の洗礼の祝日を迎えました。イエスが洗礼者ヨハネから受けた洗礼から学び始め、イエスが授ける洗礼に思いを向けることにしましょう。

マラソン大会の準備を先週月曜日に始めましたら、さっそく沿道で声がかかりました。わたしは練習初日ということもあってまずは歩き始めることからと、そういう格好で出発しました。するとご婦人から「神父さま、マラソンの練習は走ってするのではないのですか？」としっかり釘を刺されました。

もちろん初日から軽やかに走ることができれば理想的ですが、初日からはとても無理なので、「いやいや、初日からは走れないよ。初日から走ったら体が壊れてしまう」そう言って初日の練習を開始しました。初日、教会前のバス停から上の道まで二往復したのですが、もうすでに筋肉痛で逃げ出したい気分です。

先週は、初めて土井ノ浦教会の神父さまを助ける経験をさせてもらいました。土井ノ浦教会の神父さまが休暇を取っている最中に信徒が亡くなって葬式の必要が生じました。そこでまだ休暇に入ってなかったわたしに声がかかり、水曜日の通夜と木曜日の葬儀ミサ、その後の納骨を代わりに引き受けたのです。

わたしも、昨年東京に出張したときに桐教会の神父さまに代わってもらった経験があるので、困ったときに司祭同士で助け合うって本当に素晴らしいなあと思いました。代わりを務めたことで、以前代わってもらった時のことがどんなに有難いことだったか分かりました。貴重な経験をさせてもらったと感謝しています。

朗読福音に戻りましょう。イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けました。ルカ福音では、イエスの受洗に洗礼者ヨハネは脇役となって姿を現しません。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」(マタイ 3・4)とか、そういうやり取りが省略されています。イエスは確かに洗礼者ヨハネの授ける悔い改めの洗礼を受けたでしょうが、洗礼を受ける場面よりも洗礼を受けてからのことを強調したいのだと思います。

そこで、イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けたことで、洗礼はどのような意味を持つようになったのか、考えてみましょう。まず、聖霊が鳩のようにイエスの上に降ってきたのですから、イエスが洗礼を受けたことで洗礼は聖霊に結ばれる道具となったと言えます。洗礼者ヨハネの洗礼は人を悔い改めに結びつけるものでしたが、これからイエスが授ける洗礼は人を聖霊に結びつけるものとなりました。

洗礼が、人を聖霊に結びつけるものとなったということは、洗礼は恵みとなったということです。ヨハネの洗礼は悔い改めの洗礼ですから、償いの効果はあっても恵みまでは届きませんでした。イエスの洗礼は恵みであり、洗礼を受けることで人は神の恵みの器となるのです。

ここでわたしははたと考えに行き詰りました。イエスが授ける洗礼が人を聖霊に結びつける神の恵みののだと、言葉で十分伝わるだろうか。そこで思いついたのは、イエスが水をぶどう酒に変えた奇跡のことです。

イエスが洗礼を受けたことで、もはや洗礼の水はただの水ではなくなり、ぶどう酒に変わった。そう考えると洗礼者ヨハネの洗礼とイエスが授ける洗礼に決定的な違いがあると表現できるなあと考えたのです。

実際にぶどう酒で洗礼を受けるわけではありませんが、イエスの洗礼を受けた者は、あたかもぶどう酒が周りに香りを運ぶように、恵みを運ぶ器となるのです。わたしたちはイエスの洗礼を受けて、神の恵みの器となりました。そこにはふちまで満たした水が入っているのではなく、香り高いぶどう酒が入っていて、周囲の人々を喜ばせるはずなのです。

イエスがのちに水をぶどう酒に変えたように、悔い改めの洗礼を聖霊の恵みをもたらす洗礼に変えました。イエスは出会う人すべてに救いをもたらす器とされました。わたしたちはどうでしょうか。イエスの「聖霊と火による」洗礼を受けて、中身は水がぶどう酒に変わったでしょうか。洗礼を受ける前と変わらず水の入った器でしょうか。それとも、「人を喜ばせるぶどう酒の入った器」に変えられたでしょうか。

洗礼を受けてある人はもう 30 年、もうそろそろ中身はぶどう酒に変わっているでしょう。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声がイエスに響いたように、わたしも神さまの声に人々が気付く道具になっているでしょうか。

わたしたちには、もう一つ、水をぶどう酒に変える相手がいます。それは、未だわたしたちの信仰に触れたことのない人々、わたしたちの信仰に関心があるけれども、きっかけがなかなか見つからない人々です。

彼らも、わたしたちが恐れずに証しするなら、これまでの「水」であった生活が「ぶどう酒」の生活に変わりうるのです。もっと味わい深く、もっと人を喜ばせることのできる生活に変わりうるのです。

イエスが受けることで決定的に変わった洗礼に感謝しましょう。ミサに積極的に参加することで、水の状態にあった自分がぶどう酒に変えられたことを感じましょう。わたしたちはもはや、自分の命を維持するだけの水ではありません。洗礼によって人を喜ばせるぶどう酒に変えられたのです。



年間第 2 主日 (ヨハネ 2:1-11)

イエスは最初のしるしで喜びを届ける

6年前の説教案を、少し見直して今週の説教に充てたいと思います。今週の福音朗読に選ばれた「カナでの婚礼」の物語は、朗読の最後にあるように、イエスにとっての「最初のしるし」となるものでした。イエスが公の面前で、最初におこなった奇跡です。わたしはこの、「最初の出来事」という点に注目して、一週間の糧を探ってみたいと思います。

イエスにとって、最初に取りかかった事柄というものをいくつか指摘できます。まず、公の宣教活動に入るに当たって、第一声というものがあります。イエスの第一声と思われる言葉は、マルコ福音書によれば、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ 1・15) というものです。心を神に向け直すことを、まず求めたと言っています。

では最初の活動はどんなものだったでしょう。それは、「弟子を選ぶ」ということでした。もちろんイエスは、荒れ野での四十日の試練を経ています(マタイ 4・1-11)、それは最初の活動というよりも、活動に入る前の準備です。

ですから、最初の活動と言えるのは、やはり弟子をお選びになることでした。その意味では、どんな奇跡よりも、信頼できる弟子を選び、育てることが、イエスにとっては何より大切だったのだなあと考えることができます。

もしかしたらそれは、わたしたちの教会活動にも通じるのかも知れません。つまり、華々しいわざを展開するよりも前に、教会に寛大に奉仕してくれる弟子を育てることが、何よりも大事なのかも知れません。

本題の「イエスの最初のしるし」に入りましょう。水をぶどう酒に変える奇跡が婚礼に招かれた人びとに伝えようとしていることは2つあると思います。1つは、ご自分が神であるということ、もう1つは、イエスが最初にもたらしたものは、「喜びを届ける」という奇跡だったということです。

それぞれについて押さえていきましょう。イエスは、水をぶどう酒に変えてくださいました。水は、どんなに手を加えてもぶどう酒になり得ません。ぶどう酒がなくなって、どうしても調達できなくなった場面で、ぶどう酒を与えることができるのは神だけなのです。この出来事を通して、神がここにおられること、神がともにいてくださる(インマヌエル)ことを、お示しになったのです。

もう1つの点は、イエスはこの「最初のしるし」を通して、「喜びを届ける方」であることを示します。イエスが水をぶどう酒に変えたことで、集まっていた人々の顔は喜びで満たされます。婚礼の世話役の言葉が、そのことを如実に物語っています。

(世話役は花婿を呼んで、言った)「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは

良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」（ヨハネ 2・10）

もしかしたら、イエスの奇跡のことを、婚礼の客は気付いてなかったかも知れません。奇跡に気付かなかったとすれば、イエスが神であることに気付くチャンスも失ったのかも知れません。もし、奇跡を目撃しなかったとしても、奇跡の結果は残りました。すなわち、ぶどう酒は婚礼の客すべてが味わい、楽しんだのです。イエスが神であることには気付かなかったかも知れませんが、人々は喜びに満たされたのです。

この出来事から、今週の糧をわたしたちも得ることにしましょう。イエスの最初のしるしのねらいは、1つはご自分がだれであることを示すこと、もう1つはこの奇跡が「喜びを届ける」ものであったということでした。

ここからわたしたちも考えましょう。わたしたちにも、生活の中で2つの点を世に対して示すことができるのではないのでしょうか。その2つとは、自分が何者であることを表明すること、そして喜びを届けることが、わたしたちの「最初のしるし」なのだと思います。

もう少し、説明を続けましょう。1つめの自分が何者であるかということですが、わたしたちはイエスの洗礼によって神の家族に加えられた者です。まずはこのことを証しします。神の家族ですから、家族であることを隠すべきではないのです。イエスによって救われた者として、顔を上げる必要があります。

2つめに、生活の中で「喜びを届ける者」となることが必要です。圧力を与えるのではありません。人を悲しませる者であってもいけません。何よりもまず、「喜びを届ける者」であるべきです。こうしてわたしたちは、イエスが婚礼の席で示した証しを受け継いで、現代にあって証しし続けます。

かつてイエスが、ご自分が誰であることを示し、真っ先に喜びを届ける方となったように、わたしたちも同じ姿をたどることで、イエスの働きを今の世に示すことができるのです。イエスは今も生きている。イエスは今も、わたしたちを通して世に働きかけている。そのことを、わたしたちの生きざまで示しましょう。

肉体労働をしている人も、机に向かう仕事をしている人も、誰でもイエスのわざを今に引き継ぐことができます。イエスの存在を人々に感じさせる。その思いで、今週一週間を過ごすことにしましょう。



年間第 3 主日 (ルカ 1:1-4,4:14-21)

イエスは聖書の言葉を巻物から飛び出させる

「イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、『この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と話し始められた。」(4・20-21) イエスは会堂内にいるすべての人が注目している中で、あっと驚く言葉を語りました。わたしたちも、集まった人々と同じように、イエスの言葉に耳を傾け、取るべき態度を考えましょう。

とうとう 26 日(火)はマラソン大会となってしまいました。派手なウェアを用意した割にはたいした練習も積めなかったのも、本当に冷たい視線を浴びながらのレースになると思います。それでも、当初の目標通り、足を止めず、最後まで完走して帰りたいと思います。

黙想会が 2 月下旬に控えています。今年は久しぶりに誰かにお願いせずに自分で説教師を務めようと思っています。説教はほぼ固まりまして、「信仰に生かされ・信仰を生き・信仰で次の世代を生かす」という信仰の伝承を念頭に置いて話をしようと思っています。

わたしが黙想会を務めるときはいつもそうですが、説教の原稿をプリントにして準備する予定です。また、前もって録音して、たとえば寝たきりの人、体調が悪くて参加できない人のために自宅で話を聞くことができるように CD も用意しようと思っています。黙想会の時にもう一度呼びかけますので、必要な人は利用してください。余ったらどこか別のところで配るつもりです。

福音朗読に移りましょう。当時会堂で聖書が読まれるというのは、読まれた聖書の解釈をするということでした。イエスも聖書の解釈を語るのだらうと思って人々は注視していたでしょう。けれどもイエスの口から出たのは、人々の予想をはるかに超える言葉でした。

イエスが読まれた巻物はイザヤ書です。イザヤは預言者でしたから、当然イエスは預言の解釈をするものだと思っただけでしょう。ある意味いきなりイエスは解釈を飛ばして、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(4・21)と宣言したのです。

預言はたしかにいつか実現するものです。ただ会堂にいる人々は、まさかそれが今ここで実現すると語る人が現れるとは思ってもみなかったでしょう。「この人は威勢がいいなあ」とか、「たいした度胸だ」このようにしか受け止められなかったのだと思います。

わたしたちは、前提なしにイエスの言葉に耳を傾けたいと思います。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」預言の言葉は、それまでは巻物の言葉でしたが、イエスが生きた言葉、巻物から飛び出す言葉に変えてくださるのです。

巻物から飛び出す言葉とは、例えば飛び出す絵本のようなものです。今でもそのような絵本は手に入りますが、子供の頃にそういう絵本を読んだ人もいます。飛び出す絵本のおかげで、物語はさらに楽しい

もの、魅力的なものになります。子供にとっては、飛び出す絵本は絵本の世界から現実の世界に飛び出したように感じたかもしれません。

イエスは預言の言葉を巻物の世界から現実の世界に飛び出させてくださいました。会堂で読まれたのは次の個所でした。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

(4・18-19)

イエスの宣言は、場面が飛び出す絵本になって、楽しい絵本だったねで終わるではありません。実際に、捕らわれている人が解放され、目の見えない人に視力の回復がもたらされ、圧迫されている人が自由になり、主の恵みの年を告げられるということです。

だれが捕らわれているのでしょうか。目が不自由なののでしょうか。圧迫されているのでしょうか。わたしたちではないのでしょうか。罪に縛られ、信仰の価値が見えなくなり、信仰を表に出せば好奇の目で見られる。イエスはそんなわたしたちを解放し、自由にしてくださるのです。

私事ですが、あと二ヶ月くらいでわたしは 50 歳になります。社会で働く 50 歳の人々との違いは、一度も就職したことがないということです。自分の能力を元手に、生活を切り盛りしてきた経験がないのです。わたしが生活させてもらっているのはただ一つ、イエス・キリストを宣べ伝えることだけです。イエスが今も人を解放し、自由にしていると確信しているので、この生き方を生涯貫いていきます。

20 年も自分の罪を告白できなかった人が告白する場面に立ち会いました。長く寝たきりで病苦を耐えて旅立った、その妻の苦しみの意味を悟って神に感謝を捧げる人がいました。教会の人間関係で心を閉ざし、教会に通えなくなった人が、インターネットにわたしが公開している主日の説教を受け取るようになり、慰めを受けている人がいます。こうしてイエスが今も捕らわれ、圧迫されている人を解放する姿を何度も見てきたのです。

黙想会話を最初にしました。黙想会は人を解放するイエスの力、人を自由にする力を体験する良い機会になると思います。黙想会でいったん時間を止めることで、自分を見つめ直し、信仰を一步前に踏み出させてくれる力をいただけたと思っています。

イエスは、世の中の常識にがんじがらめになって信仰の価値を表に出せないわたしを解放し、自由にしてくださいます。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」わたしたちの中にこの言葉を響かせましょう。そして、わたしが出会う人に、この言葉は信用できると、それぞれの体験を重ねて伝えましょう。今日イエスの言葉を必要としている人が、島内にもまだまだ多くいらっしゃいます。



年間第 4 主日 (ルカ 4:21-30)

イエスの言葉の意味を知るまで思い巡らせる

今週の朗読箇所は先週の続きです。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」(4・24)という箇所から学びを得て、生活に活かす糧を持ち帰ることにしましょう。

26日(火)、司祭団マラソン大会の日でした。直前の日曜日と月曜日はご承知の通りまれに見る大雪でした。下五島も同じ状況で、マラソン大会の前日、月曜日の時点で大会中止の判断が下されたそうです。日曜日と月曜日、福見教会と浜串教会との間の雪道を歩いて結構なトレーニングを積んだので、マラソン大会中止の知らせはちょっと残念でした。

福音朗読に戻しましょう。郷里の人々は「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(4・21)と驚きの言葉を語ったイエスにこんな言葉を投げかけました。「この人はヨセフの子ではないか。」(4・22)

郷里の人々は、イエスのことを十分理解しているつもりでした。父親が誰で、母親が誰であるか、親類の人がだれであるか知っていたからです。身内を前にしているのだから、身内を喜ばせる言葉を語るだろう。そんな予測を立てています。

ところが、イエスは予想だにしない言葉を口にしたのです。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」郷里の人々は驚き怪しみ、理解できないばかりかついには憤慨し始めます。もはや、郷里の人々の心は一步も前に進めない状態になりました。冷静さを失ってしまい、考えることができなくなっていたのです。

イエスの言葉は、郷里の人々には痛みを感じるほど強い言葉でした。ここで大切なことは、イエスがむやみにそんなきつい言葉を放つだろうかと、もう少し考える姿勢です。向けられた言葉を、もう少しよく考えてみる。そんな捉え方が必要でした。

イエスがきつい言葉を使うからには、それなりの理由があるはずです。優しく語りかけることも知っている方が、あえて厳しい態度で臨むのですから、理由があつてのことです。理由があるのだと考えたなら、さらにもう少しその理由に迫ろうとしたことでしょう。ところが郷里の人々は、イエスの言葉を聞いた時、「何をー！」という反応を取ってしまったのです。

わたしも一度、きつい言葉をかけられてお先真っ暗だと感じたことがあります。浦上教会の助任司祭を5年務めた後に、転勤の辞令がやってきました。次の任地は滑石教会の助任司祭でした。早めに滑石教会の主任司祭にあいさつに行こうと思っていましたが、思いがけずその機会が巡ってきました。先輩司祭が亡くなって浦上教会で教区葬が行われたときだったと思います。

教区司祭が亡くなると司祭はみな葬儀に参列しますので、滑石教会

の主任神父様もおいでになりました。滑石教会の神父様は浦上教会の主任神父様と親しくしておられたので、司祭館に立ち寄られたのです。これはチャンスと思い、スリッパをサッとお出して、「神父様、4月からはお世話になります。」と声をかけたのです。

すると滑石教会の神父様の返事は意外なものでした。「お前か。今度うちの助任に来るのは。もっとピチピチしたとばもらえんと思っていたら。煮しまつとるじゃないか。お前なら要らん。」とバツサリ切り捨てられたのです。

わたしはひとことも返せず、浦上教会の主任神父様の部屋に入っていくのをただ眺めるだけでした。内心「うわー、きつつい神父様だなあ。今度の主任神父様にはとてもじゃないけれどもお仕え出来そうにない。」と思ったものです。

滑石教会の神父様の言葉の真意を知ったのは、滑石教会に着任して数か月後のことでした。この神父様はわたしとの最初のやり取りをその日のうちに滑石教会の役員に話し、「浦上教会で5年も鍛えてもらった助任をもらうことになった。わたしが手取り足取り教える必要もない頼もしい助任司祭だ。」と自慢げに紹介してくれていたのだそうです。

そうとは知らないわたしは、気分は滅入っていたのです。けれども、きっと新しい主任神父様の考えがあるに違いない。そんな思いも一方では持っていました。それは正解でした。もし新しい主任神父様の思いを誤解していたら、わたしは道を逸れていたかもしれません。

イエスの郷里の人々も、イエスの言葉をもっとよく考えたら、イエスを受け入れることができたのだと思います。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」こう言われた時に、「何をー！」と思わず、自分たちには何が足りないのだろうか、真剣に考えたなら、違った道に導かれたのではないのでしょうか。

わたしたちもふだんの生活を見つめましょう。わたしたちの周りの人々は、必ずしも人当たりの優しいものばかりではありません。どうしてこんな目に遭わなければならないのだろうかと感じることも多々あると思います。予想もしない仕打ちを受ける時、「少し考えれば、意味が分かるかも知れない」そう考える心の準備が必要です。やみくもに困難や試練が来るはずはない。あの人、何も考えなしにあんなことを言うはずがない。きっと何かを教えてくれているはずだ。そんな受け止め方を繰り返し言い聞かせるなら、道は開けるのではないのでしょうか。

皆さんにも何か行き詰まっていることがあるかも知れません。投げ出したくなるような十字架を抱えているかも知れません。それでも、イエスがむやみに今の困難を目の前に置くとはいえないのです。何か、わたしへの思いを知らせようとして、今があるのではないのでしょうか。

「もう少し考えてみよう」「何か、考えさせているに違いない」そんな姿勢を保って、イエスに従って歩みましょう。「イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。」(4・30) 先へ進もうとされるイエスを見て、わたしたちも今日の一步を進めることにしましょう。



年間第 5 主日 (ルカ 5:1-11)

イエスが見せるしるしに勇気づけられ従う

年間第 5 主日、水曜日からは灰の水曜日で四旬節になります。四旬節前の最後の年間主日に、「イエスがときおり見せる圧倒的なしるしに勇気づけられ、従う」という内容で黙想してみたいと思います。

信徒発見劇の練習が大詰めになってまいりました。これからは代わりの利かない配役の人たちは健康にも注意を払って過ごす必要があります。わたしも代わりが利かないと言えば利かない役ですが、「はい旦那様、いえ旦那様、へい旦那様」ですからその場で誰かが代わってもできるかもしれません。先日の大雪で体調を崩し、鼻水を垂らしながら聖体拝領をさせていましたが、これからは劇も黙想会もあるので、よくよく注意したいと思います。

信徒発見劇のチケットが手に入りました。会場の座席数 900 に対して、2 月 1 日に行われた司祭会議では 870 席近い申し込みがあっただけで、わたしが申し込みを締め切った時点での申し込みのチケットは 71 席分でした。

ところが「申込用紙に書いてなかった人々」が現れまして、「残り 30 席くらいしかないから、無理だと思う」と念を押した上で恐る恐る鯛之浦教会に問い合わせたところ、新たな追加分も分けてもらえることになり、胸を撫で下ろしています。何週にもわたって呼び掛けているわけですから、今後は締め切りギリギリまで待たずに申し込んでください。

福音朗読に移りましょう。漁師を弟子にする場面が朗読されました。イエスがシモンの舟に乗り、群衆に神の言葉を語っています。そして話し終わったときに、シモンに「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなささい」(5・4)と言われたわけです。

イエスの言葉は、何も難しいものではありませんでした。「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなささい」と言っているだけです。漁師にとって造作もないことです。しかし、シモンはイエスの言葉に素直に従うことができませんでした。自分たちの経験や知識が、「失敗するに違いない」という疑いを起こさせ、ためらってしまったのです。

イエスの言葉はシモンのためらいを振り払ってしまうほど毅然としていました。シモン・ペトロはイエスに従います。「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみしましょう」(5・5)結果はシモンの知るところではありません。イエスの言葉に従ってみるのが、今は何より大切なことでした。

すると、「おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった」(5・6)のです。シモンの疑いを吹き飛ばす、圧倒的な結果でした。すると今度は、イエスに対する恐れを感じ始めます。「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」(5・8)イエスの言葉を受け取って、それをそのまま実行する。ただそれだけのことでしたが、人間

はそれすらふさわしくないことを、イエスが示した圧倒的なしるしを見て理解したのです。

イエスの返事はシモンの恐れをいやし、力を取り戻させる言葉でした。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」

(5・10) この出来事は、神の言葉を受けてそれを実行するのに、十分な資格を持った人など誰もいないことを教えているのです。

信徒発見劇の練習に加わって、一つ感じたことがあります。この劇の上演は、観る人に宣教への熱を呼び起こさせる大きなチャンスだと思いました。2月の上五島公演をご覧になれば分かることですが、信徒発見劇は圧倒的な迫力です。同じカトリックの信仰を持っていればなおさらのことですが、カトリックの信仰を持っていない人でも、主人公の杉本ユリほか大浦のプチジャン神父を訪ねていく場面は、わたしたちの心に感動を与えてくれると思います。

圧倒的な迫力と感動が伝わった時、一種の恐れすら感じるかもしれません。「わたしたちはここまで信仰のために人生を賭けることはできない。」そんな恐れすら、感じさせるかもしれません。しかしそんなわたしたちにも、イエスは同じ言葉をかけてくださると思うのです。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」

イエスの言葉を聞き、それを実行する。漁師が「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と声をかけられ、それをそのまま実行する。簡単なようですが、神の言葉をそのまま実行するのにふさわしい人は誰もいないのです。

けれども、そのわたしたちをイエスさまは圧倒的なみわざでいやし、力づけてくださいます。250年間司祭が不在だった時も、信仰を次の世代に受け継がせてくださったのは、人間がそれにふさわしかったからではなく、イエスさまがその250年の間も圧倒的なみわざでいやし、力づけてくださっていたからだと思っています。

劇の練習を通して、わたしはそのことを感じましたし、みなさんも今回の上演を観ることで、「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」この言葉を感じることができると思います。

イエスは今もこれからも、御自分の言葉を告げ知らせる働き手を必要としています。本来それにふさわしい人はいないのです。けれども、どこかで圧倒的なしるしを見せてわたしたちを呼び寄せ、協力者としてくださるのだと思います。

この世の価値観と違うイエスの福音を告げ知らせるために、神さまはときおり、圧倒的なしるしを見せてくださいます。迫害の250年間司祭が一人もいないのに信仰を誤りなく伝えさせました。わたしの司祭生活の間では病者の塗油の秘跡で余命わずかの人が健康を回復したこともありました。

これからもわたしたちは、神がときおり見せるしるしに勇気づけられて、この世にあって永遠に価値あるものを告げ知らせる弟子となっていきたいものです。



四旬節第 1 主日 (ルカ 4:1-13)

イエスに信頼する人に悪魔の誘惑は何もできない

「イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。」(4・1-2) 誘惑を受けるイエスの置かれている状況がここに描かれています。「聖霊に満ちてヨルダン川からお帰りになった」イエスが「悪魔から誘惑を受けられた」この点について考えてみたいと思います。

10 日(水)は四旬節が始まる「灰の水曜日」でした。浜串教会で灰の式を行い、小学生も来てくれました。朝のミサでしたが、ふだんの水曜日に朝のミサに変更しても侍者の子供しか来ないのですが、灰の水曜日には侍者以外の小学生も来ていました。家族の理解と、本人の努力が伝わってきました。

11 日(木)建国記念日でしたが、前の週 4 日(木)に福見の小学生のミサで予告した通り、夕方のミサで灰の式をしました。小学生が 1 人来ていまして、お一感心感心と褒めました。この子供たちにも、灰の水曜日の習慣が長く長く記憶されたいなあと願うばかりです。

イエスは宣教活動に入る前に、荒れ野での体験を通られました。イエスが荒れ野に入られたのは「聖霊に満ちてヨルダン川からお帰りになった」状態でのことでした。悪魔からのどのような誘惑があるにせよ、イエスはたった一人なのではなく、父なる神と共にいて、聖霊に満ち満ちた状態で誘惑と向き合うことができました。

ですからイエスの荒れ野での体験は、わたしたちの教育という面もある出来事です。試みに遭う時どのように向き合ったらよいのかを教えてくださいているのです。あえて悪魔の誘惑に身を置いて、わたしたち人間に、試みに遭う時どのように向き合うべきか、模範を残されたのです。

イエスが受けたとされる 3 つの誘惑は、イエスの十字架上の出来事を暗示しているように思えます。最初の誘惑である「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ」(4・3)は、「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」(ルカ 23・37)を思い起こさせます。目の前の苦しみから自分を救うために、力を使えばよいではないかと誘惑しているのです。イエスはきっぱりと拒否します。

イエスは石をパンにすることも、十字架から降りることもしませんでした。イエスはこの誘惑を通して、人は苦しみを必ず受けるけれども、苦しみを取り除くために神がおられるのではなく、苦しみに際してわたしたちを支え続けるためにおられることを教えようとします。

苦しみから逃れたい一心でこの世のものに手を出すことは、一時の対処法にはなるかもしれませんが、根本的な対処法ではありません。苦しみの中で片時も離れず神が支え続けてくださることを、パンの誘惑の中でイエスは教えようとされるのです。神が支えてくださる中で経験する苦しみは、決して無駄ではありません。むしろ尊いものです。

次に悪魔は、「一切の権力と繁栄」をちらつかせて、自分を拝むことを要求しました。この世での権力と繁栄の象徴は金銭でしょう。ユダはこの世での権力と繁栄の象徴である金銭を受け取って、イエスを引き渡し、イエスは十字架にかけられることになります。

ユダはもしかしたらイエスが最終的には十字架から逃れる方法の思いつくだらうと高をくくっていたのかもしれませんが。けれどもイエスは権力と繁栄の誘惑を退けて、十字架に磔になったのでした。

悪魔の2度目の誘惑も、イエスははねのけました。イエスは権力と繁栄を手にして、人に仕えられるためにおいでになったのではなく、仕えるためにおいでになりました。十字架を降りなかったのも、御自分の命を与えるために、あえて降りようとされなかったのです。

権力と繁栄の誘惑は、神がいつもそばにいてくださることを忘れさせてしまいます。「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ。」（申命記 6・13）神がわたしたちから離れてしまったら、権力と繁栄はむなしと教えているのです。

最後に悪魔は、「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ」（4・9）と挑みます。十字架の場面、議員たちのあざけりを思い出します。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」（ルカ 23・35）

十字架から飛び降りるなら、議員たちのあざけりを黙らせることができたでしょう。けれどもイエスは、すべての人々を罪の束縛から解放するために、御父の計画に従順に従うことを選びました。人生の中で生じるあらゆる苦しみを引き受ける力を、イエスは最後の誘惑の場面で示してくださるのです。

イエスが荒れ野での誘惑を退けて示してくださる模範は、イエスの十字架の場面の象徴であり、わたしたちの死を覚悟させるような苦しみの場面で神がそばにいて支えてくださるという約束でもあります。

だからこそ、イエスに従おうとするわたしたちは、苦しみを逃れたい一心でこの世の誘惑に手を出すことをしません。権力と繁栄に心売り渡したりしません。苦しみから逃れようと人生を投げ出したりしません。イエスが聖霊に満たされて荒れ野での試みを退けたように、誘惑の時に神はそばで支え続けてくださいます。

「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。」（4・13）悪魔のあらゆる誘惑が無駄であったことが印象的です。誘惑は避けられないとしても、神がそばにいてくださると信頼して日々を歩み続けましょう。神がそばにいてくださるなら、わたしたちにも悪魔の誘惑は無駄に終わるのです。



四旬節第2主日 (ルカ 9:28b-36)

イエスの「エクソドス」「出発」について行く

「『これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け』と言う声が雲の中から聞こえた。その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。」

(9・35-36) 声が聞こえて、イエスだけがおられたのは弟子たちへの合図です。合図を見逃さないようにして、今週の学びを得たいと思います。

今週は珍しく三つすべての教会の主日のミサを日曜日に果たしました。いつも土曜日に前晩のミサとして主日のミサにあずかっている高井旅の皆さんには、日曜日に受けるミサは新鮮だったかもしれません。

すでに信徒発見劇をご覧になったと思いますが、わたしが劇のどの辺で登場したか、お分かりになったでしょうか? 「旦那様」「いえ、旦那様」「お許しください、旦那様」「へい、旦那様」圧倒的な演技力に、皆さん大喜びだったことだと思います。

ところで次回予定されている4月9日(土)10日(日)の長崎ブリックホール公演にもぜひという声があるのですが、辞退させていただきます。桐出身の与作という役柄ですから、長崎公演では桐の神父様が出演なさるのが理想的だと思うのですが、いかがでしょうか。

福音朗読に戻りましょう。イエスの姿が変わる場面が朗読されました。そこにはイエスと、ほかにモーセとエリヤとがイエスのエルサレムで逃げようとしていた最期について語り合っていたとあります。日本語で「最期」と訳されているギリシャ語は「エクソドス」という単語で、英語でもそのまま「エクソダス」と訳しています。

この単語ですぐお気づきかと思いますが、「出エジプト記」という旧約の書物が「エクソドス」と呼ばれます。そうすると今回は「最期」と訳されていますが、出エジプト記からも容易に連想できますが、もともとは「(エジプトの隷属状態からの)脱出」「出発」という意味です。

そこで今回は、「イエスの最期について話していた」という部分を、「イエスのエクソドスについて話していた」と理解して学びを得たいと思っています。つまり、「イエスがエルサレムで逃げようとしている『出発』について話していた」言葉のもともとの意味で学びを得たいのです。

すると、イエスがエルサレムで逃げようとしていることの意味ももっとダイナミックな印象に変わります。イエスが逃げようとしていた最期についてという理解であれば、そこですべてが止まってしまうような印象になります。

一方の「イエスが逃げようとしておられる出発について話していた」と読むと、イエスがエルサレムで成し遂げようとしているのはより良い方向への上りです。イエスがエルサレムで成し遂げることとはもちろん十字架の上での出来事ですが、それは死んで終わりというようなものではなく、十字架の上の死によって、復活という栄光へ向かう出発が始まるのです。

このダイナミックな動きを、わたしは今回の信徒発見劇を通して学

ぶことができました。杉本ゆりは大浦に天主堂が建ち、そこに司祭がいるに違いないという胸の高鳴りを覚え、やむにやまれず訪ねて行ってプ
チジャン神父と感動的な出会いをしました。

浦上のキリシタンたちは、本当は誰もが大浦の天主堂に待ち焦がれた司祭がいるのではないかと思っていたのですが、命を危険にさらしてまで訪ねていく勇気がどうしても出てこなかったのです。

そんな中、杉本ゆりと仲間たちは、今週の福音朗読にある「エクソ
ドス」を実行したのです。それは、役人に見つかって命を落とすとい
う「最期」を迎えるかもしれない危険を冒してでも、信仰をひた隠しに
して生きる現状から、よりよい未来に向かっての「出発」だったのです。

杉本ゆりが、「エクソドス」「出発」を実行に移さなかったら、浦
上キリシタンたちとプチジャン神父との出会いはさらに何年もあとに延
びていたかもしれません。ここには大きな教訓があると思うのです。つ
まり、人はある場面では「エクソドス」「出発」を決意することでより
よい状態に移ることができるということです。

今の状態を維持すること、一つの生き方でしょう。信仰をひた隠
しにしてきた人の中には、浦上キリシタンが 150 年前に司祭に出会った
後も、自分たちの様式に従って信仰を守り続け、隠れキリシタンとして
生きています。ある場面で「エクソドス」「出発」を経験する人たちと
経験できなかった人たちとは、その後に大きな違いが生じたわけです。

イエスは、御自分がエルサレムで遂げようとしておられる「エクソ
ドス」「出発」について弟子たちに予告し、御父はその予告の後に「こ
れはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」(9・35)と呼びかけます。
弟子たちにもイエスに聞き従い、イエスと同じ「エクソドス」「出発」
を体験するように招いているのです。

同じことはわたしたちにも向けられています。築き上げた生活や安
定しいた待遇、それらが心地よくなった時、わたしたちには誘惑が忍び
寄ってきているのです。ここまで成し遂げてきた。今のわたしならこの
石にパンになるように命じてもそうなるかもしれない。望むだけの権力
と繁栄が手に入るかもしれない。高いところから飛び降りても怪我など
しないかもしれない。ここまでわたしが築き上げてきたものは、誘惑に
なりうるのです。

そこでイエスはご自分の「エクソドス」「出発」を示して、御自分
に聞き従うように招きます。今まで築き上げたもののうちから、何かを
困っている人のために手放したり、自分よりも経験の浅い人に上に立つ
仕事を任せ、自分は支える側に回ったり、何かの形で「エクソドス」「出
発」を求められているのです。

これまで築き上げたものに安住せず、今一度両手を空にしてイエス
の「エクソドス」「出発」に聞き従う。ここにわたしたちの信仰の成長
があるのだと思います。わたしも含め、すべてのキリスト者がイエスの
求めに聞き従って、救いの道を歩き続けるのです。



四旬節第 3 主日 (ルカ 13:1-9)

いちじくの木に協力しない大地をかばう園丁

厳しかった冬の山場もようやく峠を越えた感じがします。今週四旬節第 3 主日は、2つの部分から成り立っていますが、後半の「『実のならないいちじくの木』のたとえ」について考えてみたいと思います。

黙想会、本当にご苦労様でした。参加した方々の中には、20日と21日の信徒発見劇で踏み絵を踏んでいた浦上キリシタンのように、「あーこれで一年の務めを果たした」そんな気持ちになっている人もいるかもしれません。その人たちも含めて、黙想会を通して生活の中で信仰に土台を置いて生きる必要性を確認し、再出発できたなら幸いです。

ところで信徒発見劇の観劇のために用意したバスでは、いろいろハプニングがあったと聞きました。中には夜6時半から劇が始まるのに、夜6時半に出発するのだと勘違いしていた人がいたり、整理券を家に置いてきたままバスに乗ろうとしたりした人がいたと聞いております。

ついでですが、貸し切りバスはかなりの費用が必要です。今回バス利用者があまりいなかったので効率の悪い貸し切りとなりました。場合によっては、バスを借りるのではなく、タクシーで乗り合わせて、あとでかかった費用を払い戻したほうが安くつくかもしれないと思いました。

話変わって、浜串教会の聖櫃ですが、本当に心配しております。聖櫃のために寄付してくださった方も気を揉んでおられるに違いありません。何とか御復活までにはと思っていたのですが、現時点で御復活までに必ず新しい聖櫃が届くという保証はありません。大変心配しております。

さて「実のならないいちじくの木」ですが、黙想会で話したことと結びつけて考えてみたいと思います。ぶどう園の主人が、いちじくの木を植えておき、実を探しに来ました。しかし実は見つかりません。この状況に、神さまの救いの御計画を重ねてみました。

ぶどう園の主人を父なる神ととらえるのは問題ないと思いますが、御独り子イエス・キリストはどこで表されているかがカギになります。園丁ととらえるのが通常だと思います。いちじくの木は人間であり、3年間ありったけの努力をする園丁のとりなしにもかかわらず、いちじくの木は今にも切り倒されようとしています。

わたしは、今回違った考え方でとらえてみました。いちじくの木も園丁も、イエス・キリストを表していると考えたいのです。ぶどう園の主人に例えられる父なる神が、地上に御独り子イエス・キリストを植えてくださいました。しかし大地はいちじくの木に実をつけさせる協力を拒み、実をつけさせてくれないのです。

大地がいちじくの木を拒むので、園丁は木の周りを掘って、肥やしをやってみます。これは、イエス・キリストを拒む人類に代わって、イエス・キリスト自身が実をつけるためのあらゆる手を尽くしていると考えてみたのです。人間がどれだけイエスを拒もうとも、イエスは人間を救うためにできるすべてのことを尽くそうとします。

この部分は、黙想会の最初の講話で「蜘蛛の糸」という小説を引き合いに出したところを思い出してくださればと思います。わたしたちの信仰の理解では、小説の「蜘蛛の糸」とはイエス・キリストであり、神は差し出した救いの唯一の糸であるイエス・キリストを決して切ることはないという部分に重なってきます。

「来年は実になるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。」(13・9) イエスは最終的には切り倒されていけにえになる十字架の木なのです。そのことを、園丁といちじくの木の間方を合わせることで表すことができると思いました。

イエス・キリストといういちじくの木を父なる神が地上に植えてくださいましたが、人類を表す大地はいちじくの木に協力せず、実をつけさせてくれませんでした。

それでも神さまの側から木の周りを掘って、肥やしをやってみて、実をつけるあらゆる努力を試みます。それでも大地は神の努力に答えようとしないので、最後はいちじくの木は切り倒されてしまいます。神はわたしたち人間が実をつけるために、実をつけるいちじくの木であるイエス・キリストを植えて、わたしたちの協力を待ったのですが、それも無駄に終わりました。

そこで神は、みずから植えたイエス・キリストを切り倒して人類の忘恩をイエス・キリストによって償いとしてささげさせたのです。神の愛は、人間が実をつける手段として与えてもらったイエス・キリストを拒んでもなお、人類への愛を諦めなかったのです。どんなに愛深いお方なのでしょう。

わたしたちが神の期待に応え、いつもいちじくの木であるイエス・キリストに協力して実を結ばせるなら、父である神の心配はなくなるはずですが、わたしたちは神様の期待に十分応えられないのです。十字架の神秘は、とうとうわたしたち人間が神さまの愛に応えられず、神さま自身が命をささげた神秘です。神の愛に感謝することしか、わたしたちにできることはないのだと思います。

黙想会を通して、また今週の福音朗読を通して、神の愛がどこまでもわたしたち弱い人間を覆っていることを考えました。わたしたちは弱いながらも、神さまに繋がってこれからも日々を生きていきましょう。

いちじくの木に、十分身をつけさせるほどの力はないにしても、せめていちじくの木に繋がる大地であり続けましょう。神が人間の大地に植えてくださったイエス・キリストは、わたしたちの弱さをよくご存知で、ぶどう園の園丁のように、今も、いつも、父である神にとりなしてください。



四旬節第 4 主日 (ルカ 15:1-3,11-32)

父のところでは有り余るほどパンがある

今週の福音朗読は、弟が我に返って反省している場面から学びを得たいと思います。弟は次の言葉をつぶやきました。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。」(15・17) 父のところと、自分が今いる場所とのあまりの落差にハッとして、弟は取るべき態度が理解できたのでした。

先週、水曜日の午前中に釣りに行きましたら、型の良いアラカブが釣れまして、久しぶりにワクワクする釣りでした。これが釣り大会当日だったらどれだけ良かっただろうか、と思いました。今日の小教区釣り大会は一体どういう展開になるのでしょうか。去年同様、磯から狙う方々に分があるのでしょうか。

1 週間のうちにリハーサルと本番、2 回も大きなアラカブを釣るのは奇跡に近いです。ですから今日は目標を立てず、参加した皆さんと大会を楽しめばそれでよいと思います。磯を歩きながら釣りをする方もいらっしゃるでしょうから、十分安全に配慮して釣りをしてください。自分の身は、自分で守る。ぜひ、お願いします。

福音朗読に戻りましょう。財産を無駄遣いしてしまった弟の判断は責められても仕方ありません。しかし弟の言葉には、光るものがあると思います。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。」(15・17) 弟は、父の家では雇い人であっても有り余るほど幸せがあることを思い出したのです。それに比べれば、父の家以外はすべて、「飢え死に」だと、気付いたのです。

最終的に弟は、「豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかった」(15・16) と考えます。ユダヤ人にとって豚は、宗教上食べてはいけない動物でした。宗教上禁じられていた動物は当然宗教上の汚れをもたらします。何より気にしていた宗教上の汚れを引き起こす動物にまですがらなければならない。そのみじめさは、どれほどだったのでしょうか。

もはや、迷っている場合ではありません。たとえ雇い人の一人として扱われても、父のもとで味わった豊かさ、宗教上も日常でも味わっていたあの豊かさに戻ろう。弟はすっかり生まれ変わりました。

ところで兄は、その父親のもとを離れずに生活していました。ですから父の家にいて、父のそばにすることが豊かな生活であり、父のところ以外はすべて飢え死にと変わらないことを理解していなければなりません。「この通り、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに」(15・29) 兄はまだ不満があるのでした。

兄はここで2つの過ちを犯したと思います。1つは、弟が飢え死にの状態から豊かさを取り戻せる父のところに帰ってきたことを喜ばなか

ったこと。もう1つは、自分が父の家を離れず、宗教上も日常生活も、これ以上ない豊かさにあずかっていたのを感じ取っていなかったことです。それと比べると、弟は1つの過ちだったのです。父のところ以外は飢え死にと同じだということを理解していませんでしたが、父のところがあんなに豊かであったことは一度も忘れたことはなかったのです。

わたしたちも、この兄弟の取った行動を自分に当てはめ、考えることにしましょう。わたしたちにとって、父の家とはどこでしょうか。わたしたちが常に立ち帰るべき父の家とは、教会ではないでしょうか。

「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。」(15・17) 神の家であるカトリック教会の豊かさと比べたら、それ以外の場所はどれもみな飢え死にしそうな場所なのです。たとえお金を湯水のように使う生活であっても、父なる神が用意してくださる洗礼や聖体やゆるしの恵みに比べれば、何を食べようが何を飲もうが、喉の渇きも空腹も終わらないのです。

わたしたちが、兄のように2つの過ちを犯しているのなら、いずれの過ちも認め、父なる神にゆるしが必要です。教会の豊かなお世話を受けながら父なる神に感謝の祈りも日々捧げていない。父なる神からの豊かさに比べれば他のものにあふれていても飢え死にと同じなのだといまだに感じていない。もしそうであるなら、わたしたちこそ回心が必要です。

もしわたしたちが、1つの過ちだけであるなら、立ち返って出直しましょう。父の家があんなに豊かであることは分かっていたのに父の家を離れてしまった。その人は立ち返りさえすれば、父の家であるカトリック教会は迎えてくださいます。

一つ問題があります。父の家の豊かさをもう一度思い出し、誰かが立ち返ってきたとき、わたしたちは例外なくその人を「よく帰ってきた。もう今までのことは水に流そう」と言って迎えるだろうか、ということです。わたしたちの心の広さが問われていると思います。もう一度出直して、父の家であるカトリック教会のお世話になろうとする人を、温かく迎える広い心が必要です。いざとなったら「立ち返ってくれてよかった。ありがとう」と声をかけるのだと自分に言い聞かせましょう。

人間は弱いので、過ちを犯します。また、過ちを犯した人をゆるせない弱さもあります。父なる神はそんなわたしたちに声をかけ、なだめ、皆が父なる神の豊かさにあずかれる方法を示してくださいます。それは環境を変えてあげることだったり、目標を明確に与えてあげることだったり、きっと神はそれぞれの神の家であるカトリック教会を「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがある」そんな状態に保ち続けてくださいます。

父なる神の導きに全面的に信頼し、これからの日々を委ねてまいりましょう。どんな人も、父の家であるカトリック教会があんなに豊かであると忘れないならば、立ち返りのチャンスはなくなるらないのです。



四旬節第 5 主日 (ヨハネ 8:1-11)

イエスによってしか命は守られなかった

今週四旬節第 5 主日の福音朗読として、姦通の現場で捕らえられた女性をイエスが救ってくださる場面が選ばれました。律法目で見れば、もはや逃れようのない罪ある女性でしたが、イエスは思いがけない方法で彼女を救います。わたしたちも神から思いもかけない方法で救われています。イエスの声に耳を傾け、今週の学びを得ることにしましょう。

個人的なお知らせですが、わたしは大司教様から異動の辞令をいただきまして、ここ浜串小教区から県北の田平小教区に赴任することとなりました。平戸地区には今まで一度も赴任したことがありませんので全くの素人ですが、大司教様の意向に沿えるように、新しい場所でも力を尽くしたいと思います。

なお後任の浜串小教区の主任神父様は現在太田尾小教区を司牧しておられる汐留神父様です。わたし同様に変わらぬ暖かさで接してほしいと思います。そのほかのことは、ミサの終わりにお知らせしたいと思います。

律法学者やファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女性をイエスのもとに連れてきました。モーセの律法によれば、共同体を汚す罪を犯す者は、取り除かなければなりませんでした。律法学者たちの言う通り、姦通の罪を犯した女性は、石打の刑に処せられるのでした。なんとも残酷な刑ですが、手を汚さずにというのが、さらに冷酷さを印象付けます。

ただこの場面には罠がかけられていました。ユダヤの国はすでにローマ帝国に支配され、さまざまな権限もはく奪されていたはずでした。たとえば人を死刑にする権限も、ローマ側にあったでしょう。すると、権限のないまま死刑を黙認すれば、ローマに訴える格好の口実になりました。

一方で、女性の罪を見逃せば、イエスは律法を無視していると騒ぎ立てたでしょう。律法学者とファリサイ派の人々は、どちらに転んでもよいようにして、手ぐすね引いて待っていたのです。宗教指導者たちの罠は、悪意がどこまで人間をおとしめるかを示しているようにも見えます。

イエスは思いもかけない方法で、死ぬしか道の残されていない女性に近づいていきます。「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」(8・7) 共同体から罪を取り除かなければならないのは確かだが、あなたたちの中ではどうなのか。罪を取り除く努力を怠っていないか。自分のことを棚に上げて、この女性を罪ある女として共同体から排除できようか。そのように考えさせたのです。

唯一、この女性に石を投げることでできる方がいました。イエス・キリストです。罪に定めることのできるお方が、彼女を罪に定めませんでした。ここに、わたしたちが耳を傾ける必要があります。

わたしたちはついこの前黙想会を終わったばかりです。黙想会は再出発のきっかけでした。「イエスから始めてみる」その取り組みの再出発となるものでした。

今週の福音朗読も、わたしたちにイエスから始める再出発を促していると思います。すなわち、罪に定めることのできるお方が、人を罪に定めなかった。わたしたちはこのイエスの姿勢から学び、人に接するべきだということです。

イエスが「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」こう問い直した時、「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った」(8・9)のでした。わたしたちは自分の罪すら取り除けない。そのことを年長者は誰よりよく知っていたはずです。このあとイエスの取られた態度を最後まで見届けることもせず、一人残らず立ち去ったのです。その場にいた誰一人、イエスから再出発する道を選ばず、去っていきました。

わたしたちは、イエスから再出発する道を探す必要があります。今週与えられた福音朗読で、イエスによってしか命は守られなかったことを確かめました。物語の女性はどこにも逃れようのない立場に立たされていたが、イエスが思いもかけない方法で救ってくださいました。

わたしたちは誰に対しても、命を取り上げることは許されていません。命を守ることだけが、わたしたちに許されている態度です。それなのにわたしたちの力不足で命を守れない時があります。わたしたちはそんな場面で、どうかこの人の命を守ってくださいと、イエスに委ねるのです。

よくよく考えると、わたしたちも罪ある生活から逃れることができなかったのを、イエスの十字架という思いがけない方法で救われた者のはずです。ですから、「わたしたちはイエスによって再出発します。どうかこの人にもあなたによって再出発する道を与えてください。」誰に対してもそういう接し方をしたいと思います。



受難の主日 (ルカ 23:1-49)

枝を手を持って、主キリストを喜び迎えよう

受難の主日、イエスが弟子たちと過ごす最後の一週間をたどっていきます。わたしたちも、イエスが弟子たちに最後まで示される愛と模範を確かめるために、イエスの後について行きましょう。

今年の受難の主日は、わたしもみなさんとの最後の聖なる一週間ということになります。主任司祭として、最後まで任せられた信徒に精一杯真心を示し、模範を示すことができるよう心掛けたいと思います。

今日の受難の主日は、駆け足で聖週間をおさらいするようなものです。イエスは歓呼の叫びの中をエルサレムに入られますが、その同じ群衆によって「十字架につけろ」と叫ばれます。

しかし、イエスは最後まで勝利者としてふるまわれます。十字架につけられたイエスはひとことも不平を口にしませんでした。人々のあざけりを「今に後悔させてやる」と恨むこともしませんでした。なぜならイエスは、敗者として十字架につけられたのではないからです。

ではどこに、勝利者としてのイエスを見ることができるのでしょうか。わたしは、十字架につけられたイエスの「釘打たれた手」が、勝利者のしるしではないかと考えました。イエスははりつけにされるとき、十字架に釘づけにされました。当然、イエスの手を無理やり開いて、釘を打ったことでしょう。

開かれた手は、何を意味しているのでしょうか。わたしは、「与える姿」を示していると思います。わたしたちは物をつかむとき必ず手を握りしめます。手を開いていては、物をつかめないからです。つまり、手を開いている状態は、物を握りしめている姿ではなくて物を手放す姿、それはある場合には物を与える姿なのではないでしょうか。

ですから、イエスが十字架にはりつけにされて釘打たれた手は、わたしたちに最後まで何かを与え続ける姿なのだと思います。イエスの右に十字架につけられた犯罪人に対して、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(23・43)と言われました。これはイエスが犯罪人に楽園を与えているということです。

またイエスの最後の言葉は、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」(23・46)でした。これもみずからを与えつくす姿ではないでしょうか。イエスは最後まで与えるお方として十字架の上におられます。疑いもなく、与えることのできる方は、敗者ではなく勝利者です。

イエスは勝利者です。十字架の上で与えることのできるお方です。勝利者であるイエスの完全な姿は、言うまでもなく復活の姿です。イエスの復活のその時まで、イエスについて行きましょう。罪によって離れてしまう弱く貧しい者ですが、わたしたちを十字架で救ってくださるイエスに信頼を寄せてこの一週間を過ごしましょう。



聖木曜日 (ルカ 2:16-21)

感謝の祭儀と司祭職の制定、兄弟愛

聖なる三日間が始まります。聖木曜日はその始まりの日です。これから起こることをすべてご存知でおられるイエスにとって、この三日間は弟子たちへの遺言の日々であり、すでに十字架上の苦しみを覚悟する日々であり、復活して御父に栄光を帰する日々でもありました。

聖木曜日は感謝の祭儀と司祭職の制定、兄弟愛について説教する日です。司祭職について考えさせられた大神学院時代の体験を分かち合いたいと思います。わたしたちの頃の大神学院では予科生を終えると本科生になり、スータンを身につけます。本科生の4年間はイエスについて行く、人の救いのために自分の生涯を明け渡す学びが始まる期間です。覚悟をある程度決めたここからが、本当の意味で迷いが生じるのです。

福岡での8年間に2度召命をためらうことがありました。最初のものは、「司祭になんてなりたくない」という気持ちから生まれたためらいでした。ほとんど、それは身勝手から生まれたものです。しかし2度目の、スータンを着用してから訪れた迷いは、これまでとはまったく違った迷いでした。

それは「このまま留まってもよいのだろうか」という迷いです。もしかしたら、このまま留まっていれば司祭になってしまうかも知れませんが、はたして自分がこの使命を引き受けても良いものだろうか？最終的にこのような思いで心が揺れるのです。

誰も、「このままでもいいよ」とも「このままじゃいけない」とも言ってくれません。大神学生を指導するために指導司祭がついていましたが、指導司祭も本人の心の中までは知りませんから、指導司祭の目を見て、本人が希望すれば司祭への階段を確実に昇っていくわけです。「本当はまだ準備ができていないのだけれども」とか、「わたしは怖い」中には「しめしめ」と思っている、それを口に出して自分で司祭への階段を降りなければ、レールの上を進む列車は止まらないのです。

用事があって聖堂に行くと、たくさんのスータンを来た先輩たちが、神学院聖堂で跪いている姿を見ました。決められた祈りの時間ではありません。それは自分との闘いの姿だったのだと思います。「わたしはスータンを身につけているが、このまま道を進んでよいのだろうか。身を引くべきではなかろうか」。なりたくなくてのためらいではありません。司祭になりたい人が、ためらって跪いて闘っているわけです。

わたし自身も同じ道をたどりました。指導司祭にも腹を割って相談しました。これこれの弱さを抱えたまま司祭になったとして、それでも大丈夫なんでしょうか。正直に指導司祭に指導を仰ぎました。わたしが気にかけていた問題の解決のために、指導司祭といっしょに半年間取り組みました。その時の体験は本当に得難い体験であり、今でも大きな支えとなっています。

最後の晩餐の場面から始まるイエスと弟子たちの三日間も、弟子た

ちのためらいと、イエスの愛による励ましとが折り重なった濃密な三日間だったのだらうと思います。食事の途中で立ち上がって自分たちの足を洗うイエスを見て、ここまで身を低くするイエスに自分たちは最後までついて行けるだらうかとためらったはずです。

のちに十字架の場面では弟子たちの多くが散り散りに逃げ去ってしまいました。イエスはそのことも予見しながら、今は深い愛で、過ちを犯しても立ち返るだけの愛を、いのちの糧である御聖体と共に与えてくださるのです。

弟子たちは、イエスが差し出そうとする聖体の秘跡と愛の奉仕のわざの前に、受け取るにはあまりにも不完全な存在です。それでもイエスは弟子たちを招いて、「皆、これを取って食べなさい」と仰るのです。

触れることもふさわしくない御体と御血を与えてくださいました。感謝の祭儀をこれからも執り行うための司祭職の恵みを与えてくださいました。兄弟愛の模範を与えてくださいました。どれ一つとして、受けるわたしたちがふさわしくないにもかかわらず、惜しみなく与えてくださり、「取って食べなさい」と仰るのです。

ためらっても、イエスはわたしたちを愛してくださいます。裏切っても、わたしたちにすべてを与え、赦してくださいます。この豊かさが、最後の晩餐の豊かさ、感謝の祭儀・ミサの豊かさです。ここにとどまることができるわたしたちを幸いと呼ばずに、誰を幸いと呼ぶのでしょうか。

それぞれ、感謝の祭儀に招かれたことを感謝する一日にしましょう。信徒の皆さんは、自分たちが日常生活で寛大になれないにもかかわらずご自分のすべてを与えてくださったお方に感謝しましょう。

奉献生活にある方々は、至らなさを日々感じる自分をいつまでもそばにおいてくださる寛大な主に感謝しましょう。司祭は信徒の感謝と奉献生活者の感謝に加えて、執り行う祭儀に対して、あまりにも身分不相応な存在を召し出してくださったことに感謝したいと思います。

聖体祭儀に、わたしたちが感謝すべき宝が溢れています。一人ひとり、感謝のうちに持ち帰りましょう。聖体祭儀の後の聖体賛美式にもあずかって、ふだんじっくり向き合えない御聖体と向き合って、感謝の気持ちをおささげしましょう。



聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

イエスは自らの意志で十字架を選ばれた

聖金曜日、主イエスがわたしたちのために十字架で命をささげてくださいました。主の受難の神秘を、わたしたちが確信をもって証しできる、そのためのきっかけを見つけないと思いません。

わたしたちは、心のどこかで、「イエスさまは十字架にかけられたのであって、みずから十字架にのぼられ、命をささげたとは言えないのではないか」と思っているかもしれません。

イエスさまが十字架を通して救いを成し遂げられたと信じていても、十字架にかけられたのはやはり悪意を持った人間たちから強いられたのではないか。その思いは拭えないのではないのでしょうか。

実はわたしも、その疑問に明快に答えることができないでいました。しかし、先週の金曜日にその疑問が解けました。いくつかのことを重ね合わせて、わたしなりに「イエスは確かにみずから十字架で命をささげることをお選びになったのだ」と断言できると思ったのです。

先週金曜日の朗読は敵意を持ったユダヤ人たちがイエスを取り囲んでいる場面でした。彼らはイエスを石で打ち殺そうとして、石を取り上げました(ヨハネ 10・31 参照)。しかし実際には実行されませんでした。イエスは何度も捕らえられそうになったり、崖から突き落とされそうになったり、殺されそうになったのですが、一度も実現しませんでした。これは、しるしだと思うのです。つまり、人間は誰も、イエスを捕らえ、殺すことはできない。その確かな証拠なのではないのでしょうか。

ですから、最期でイエスがはりつけにされている場面も、わたしはこう思ったのです。「人間が何度もイエスの命を狙い、殺そうとしても成功しなかったのに、一度だけそれが成功したというのは考えにくい」と。最期でイエスが十字架にのぼられることをお望みにならなければ、実現しなかったのです。

今は、確信をもって言うことができます。イエスの十字架上でのいけにえは、イエスが望まれたから実現したのです。御父の望みにイエスが「はい」と答えてくださったから、イエスは十字架上で命をささげてくださいましたのです。誰かの強制ではなく、イエスが望まれた。わたしたちはこの点を、確信をもって証しすべきです。

今までは、十字架にかけられたイエスさまのご像を、教会を訪ねてきた人に自信を持って語るができなかったかもしれません。復活のイエスが教会のシンボルの御像ならよかったのだと思っていたかもしれません。でも今日からは、堂々と十字架にかけられたイエスを証しできる人になってください。わたしたちのために十字架にのぼられたイエスは、おんみずから十字架をお選びになって、御自分の意志で、十字架の上で救いのわざを完成してくださったのです。



復活徹夜祭 (ルカ 24:1-12)

朽ちていく者から朽ちない者へ

主の御復活おめでとうございます。浜串小教区の皆様と御復活のあいさつを交わすことができるのは今年が最後ということになります。今年の復活徹夜祭のメッセージから、浜串小教区の皆さんへの最後の呼びかけを見つけてみたいと思います。

ルカ福音書の復活の出来事の始まりは、婦人たちが連れ立ってイエスのご遺体が納められた墓に向かうところから始まります。ルカ福音記者は女性の活躍を前面に出していましたが、墓に向かった女性の数はほかの福音書とは違って大所帯となっています。

婦人たちが出かける理由ははっきりしていました。イエスはたしかに十字架の上でお亡くなりになり、墓に埋葬された。墓に納められたご遺体に香料を塗り、最後のお別れをしに行くためでした。婦人たちにできる最後のお世話をするために出かけようとしていたのは疑いようがありません。

ところが、墓には主イエスの遺体が見当たりません。途方に暮れていると輝く衣を着た二人の人がそばに現れ、「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」(24・5-7)と語りかけます。

婦人たちは何が起きているかはわかりませんでした。とにかく十一人のもとへ一部始終を知らせに行きました。この時点では墓で出会った二人の人に言われるがままに行動していましたが、すでに婦人たちの行動は新しいものにすっかり変えられていました。それは、もはや準備した香料は必要なくなったということです。イエスを、朽ちていく人間がいる墓に探す必要がなくなったのです。

しかしまだ、婦人たちが起きていることを理解するには時間が必要でした。使徒たちも同じことでした。彼らは婦人たちの言葉をたわ言としか受け止めていませんでした。それでもペトロは立ち上がって墓へ走ります。墓の中をのぞき込むと亜麻布しかありませんでした。ペトロも、出来事を十分には理解できませんでしたが、イエスは朽ちていく人間の一人ではなくなったのだと驚いたのです。

ルカ福音記者は、第24章全体を使ってイエスの復活を語ることで空の墓の出来事にはイエスは登場しません。しかし少しずつ、イエスを信じ、イエスに従った人たちの考えは変わり始めています。

イエスは十字架の上で確かに亡くなられたが、朽ちていく人間の運命にはおられない。自分たちはこれまで亡くなった人間がどのようなようになっていくのかを考えて、朽ちていく運命を頭の中で描いて動いていた。けれども、もはや朽ちていくことに囚われてはいけないうのです。

わたしたちは頭をまず、朽ちていく考えから切り替えて、復活して生きておられるイエスに向けていく必要があるのです。万物はいつか滅びていきます。わたしたちの頭は、どこかでこの「すべてのものが滅びる」という考えの中で物事を考えてきました。けれども今は、逆らいようのない自然の摂理に立ちはだかる必要があるのです。

すべてが滅びる中で、滅びないものがあることを、イエスが教えようとしておられるからです。今年の復活徹夜祭の学びは、ここにあると思っています。すべてが滅びます。けれどもわたしたちは、滅びないものを一つ信じることができるのです。それはイエス・キリストです。

この社会の急速な変化は、永遠に続くものなどないかのようです。子供がたくさんいた時代は去り、数えるほどしか子供はいなくなりました。その土地にあった作物を収穫し、そこそこの生計が成り立っていました。今は買って来たほうが安く感じているかもしれません。

海は取り尽くせないほどの恵みをもたらしてくれていましたが、もはや獲り尽くしてしまいました。かつてのクリシタンは外海地方から五島へと夢を抱いて移住しました。今は多くの若者が五島を出ていきます。

たくさんの思い出が、今や昔話です。けれどもイエスの復活は、滅びないものがあることをもう一度呼び覚ましてくれるのです。滅びるものにすがりついて現状を打破しようとしても、足元をすくわれるだけでしょう。むしろ、滅びないものを一つだけ知っているのですから、ここに望みを託して、生活全体を切り替えていく必要があるのではないのでしょうか。

主任司祭も変わります。人事という、この世の仕組みだからです。けれども、イエス・キリストという一人の羊飼いのもとに、イエス・キリストの代理として民を導く主任司祭が与えられます。ここは変わらない真実です。

行き詰って、にっちもさっちもいかないという時、どうか皆さん、滅びぬものは何かを思い出してください。復活し、滅びぬものとなられたイエス・キリストはどのように前に進んでほしいと願っているか、考えてみてください。ここに、進むべき道は開けてくると思います。

墓で出会った二人の人は、婦人たちにこう言いました。「まだガラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。」(24・6) わたしたちが仮に倒れ、失望しても、思い出すべきなのはイエス・キリストなのです。イエス・キリスト、復活して、滅びぬものがここにあると招くこのお方に、探すべき答えがあるのです。

幼い頃語り継がれた信仰、親となって子に語り聞かせた信仰。祖父母になり、孫たちに語り、孫たちが教会から聞いてきたことに耳を傾ける素朴な信仰。ここに、思い出すべきものがあるのではないのでしょうか。

いまわたしたちの心には復活の灯であるイエス・キリストの光がともされています。「まだガラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。」(24・6) 自分自身に言い聞かせ、また人々にも語る勇気のたまものを、復活した主に願いまししょう。



復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

見て、告げ知らせ、反芻して信じる

あらためてご復活おめでとうございます。復活の卵に「当たり」が入っていた人もおめでとうございます。福音朗読から、「見て、信じた」というヨハネの理解に少しでも近づくことにしましょう。

今から6年前のことです。当時司祭館では信者の賄さんが働いてくれていました。この賄さんは食事を用意しながら鼻歌を歌うのが常でした。後期高齢者が口ずさめる歌ばかりでした。

浜串教会への異動の辞令を受け取った翌朝のミサ後の朝食、いつものように鼻歌を歌いながら食事を並べているところに、二階からわたしが降りてきます。階段を降りている途中で歌っている鼻歌が聞こえてきて、その歌に胸が締め付けられ、再び二階に戻りました。あろうことか、「星影のワルツ」を歌いながらご飯を用意していたのです。

「別れることはつらいけど しかたがないんだ君のため 別れに星影のワルツを歌おう 冷たい心じゃないんだよ 冷たい心じゃないんだよ 今でも好きだ 死ぬほどに」転勤の事実を知らないとは言え、いくら何でも選曲が悪すぎます。二階で気持ちを落ち着かせていると、一階から追い打ちをかけるように「おつゆが冷めます。早く降りてきてください。」平静を装うのに苦労しました。

こちらでも面白いことが起こりました。社協の食事サービス「マリア会」でのことです。3月の食事サービスを終えて「来月はいつにしましょうか。去年桜を見に土井ノ浦に行きました。神父さまは去年参加できなかったので、今年はぜひお願いします。4月8日でもいいですか？」と聞いています。

慌ててわたしは「4月8日はちょっとまずいんでないかなあ」と生返事をしました。「4月1日は寒いです。では15日にしましょう。」「15日はますます悪いんでないかなあ。」それでとうとう事情を話す必要に迫られまして、異動なのだとそれとなく言ったのでした。

福音に戻りましょうご復活日中の典礼に選ばれているヨハネ福音書第20章から、一つの点を指摘しておきたいと思います。それは日本語で「見る」と訳されている箇所についてです。与えられた朗読に3箇所登場します。「墓から石が取りのけてあるのを見た」（20・1）「亜麻布が置いてるのを見た」（20・6）「先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた」（20・8）

ギリシャ語ではそれぞれ別の単語です。それぞれ意味が違うと考える聖書学者もいます。解釈に立ち入らないとしても、マグダラのマリアが見た後にペトロに伝え、ペトロが見た後にイエスが愛しておられた弟子が見て、最終的にイエスの復活を信じました。

見たことを告げ知らせ、見たことを反芻する中で、イエスは生きておられると理解できたのです。これは、わたしたちにも当てはまるのではないのでしょうか。わたしたちもできる限りミサ聖祭に集い、ここで聞

いたみ言葉を告げ知らせ、みことばと聖体の恵みを反芻する中で、イエスは生きて、わたしたちを導いておられると理解できるようになるのです。復活の信仰は、繰り返し見て、何度も告げ知らせて、反芻するうちに、信じることができるようになるのだと思います。

ご復活の知らせが来ると、教会によっては新しい体制で教会の歩みが始まります。浜串小教区もそうです。浜串小教区が、新たな気持ちで復活の主を証しする教会家族となれるよう、ミサの中で共に恵みを願いましょう。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)



神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

イエスが鳴らす教会の鐘に応えるのはあなた

皆さまと主日のミサをささげるのも最後となりました。今週は「神のいつくしみの主日」と名付けられた主日です。長崎教区で転勤の絡む教会は、ほとんど、今週がお別れの説教となっていることでしょう。

福音朗読は復活のイエスが弟子たちに現れる場面、特にトマスにあらためて現れる場面が選ばれます。今日の説教、わたしたちすべてが神のいつくしみを感じるための助けになればと思います。

イエスがお亡くなりになった後、弟子たちは心を閉ざし、家の戸にも鍵を掛けて隠れるようにしていました。誰に従って生きていけばいいのか、何を頼りに生きていけばいいのか、全く分からなかったからです。

そこへ、復活したイエスが現れてくださいました。戸に鍵が掛けているのにおいでになったのですから、心理的・物理的、あらゆる形で自分を閉ざしていても、復活した主はおいで下さり、わたしたちを解放してくださることが分かります。

復活したイエスはすべてを閉ざしていた弟子たちに現れて、何を仰ったのでしょうか。いちばん印象的な言葉は、「あなたがたに平和があるように」(20・19) というものでした。この点に絞って、わたしの考えをまとめたいと思います。

復活した主がおいでになる前、弟子たちの心は不安でいっぱいだったでしょう。「不安」は「平安」がない状態です。どんな平安が奪い去られていたのでしょうか。まずは従っていく相手を失ったのです。エマオに向かう弟子たちは、次のようにイエスを言い表しました。「この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。」(ルカ 24・19) 誇りを持って、胸を張って従っていく相手を失ったのです。

さらに、従っていく相手を失ったことで、何を頼りに生きていけばいいのか、全く分からなくなりました。かつて2人ずつ組になって町々に出かけ、宣教しましたが、今はそのことも思い付きません。「わたしたちにも祈りを教えてください」(ルカ 11・1) と願って教えていただいた「主の祈り」を唱えてみることも思い付きませんでした。何かの抜け殻のようになっていたのです。

そこへイエスが現れ、「あなたがたに平和があるように」と仰いました。何もかも奪い取られ茫然としていた弟子たちに、復活したイエスが現れ、すべてを取り戻してくださったのです。弟子たちはこれまで通り従っていく相手を取り戻し、頼りにすべき道標を取り戻したのです。

イエスは「あなたがたに平和があるように」と言いました。すなわち、不安のどん底に突き落とされていた弟子たちを、まずは引き上げてくださったのです。細かいことを言う前に、根本的な部分に救いの手を差し伸べてくださったのです。

「弟子たちは、主を見て喜んだ」(ヨハネ 20・20) とあります。喜びが満ち始めれば、あとは問題ありません。必要な指示を与えさえす

れば、弟子たちは本来の姿に立ち帰っていきます。

弟子たちの心が喜びに満たされたところで、イエスは指示を出します。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」(20・21)「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(20・22-23)弟子たちはもはや以前の抜け殻ではなく、よく準備された状態に変わっていたので、イエスの指示に耳を傾けることができたのです。

トマスは、イエスの最初の出現に立ち会うことができませんでした。それでも、トマスもその後のイエスの出現で「信じない者ではなく、信じる者に」(20・27)変わります。トマスの中にも喜びが満ちて、「わたしの主、わたしの神よ」(20・28)と答える人になっていたのです。

喜びが満ちあふれば、人は、イエスの証し人として十分働けるようになります。イエスの復活後の弟子たちがそうでした。同じことは、わたしたちにも当てはまります。わたしたちの心が平安であり、喜びが満ちあふれているなら、イエスの証し人として働くことができるのです。

問題は、どのようにしてわたしたちが平安を得て、喜びに満ちた人になるかということです。答えは身近にあります。ふだんの生活で、当たり前のように実行していることです。「どこに、何があるかを知っていること。」これは信仰生活にも当てはまります。

わたしたちが信仰者として必要なものが、どこにあるかを知っているなら、当然そこへ行くことで平安を得て、喜びが満ちあふれるはずです。信仰者に必要なものは、どこへ行けば手に入るのでしょうか。疑いもなく、教会へ行くということです。

教会は司祭の手を通して皆さんを招き、集会祭儀を開き、秘跡を授け、恵みを与えます。その最初の合図は教会の鐘だと思います。高井旅教会は教会の鐘を鳴らしませんが、心の中では教会の鐘の音が聞こえると思います。教会の鐘は始まりを知らせ、信仰者を集めるのです。

そこで、皆さんへの置きみやげに、歌を歌って最後の説教としたいと思います。「あの鐘を鳴らすのはあなた」和田アキ子さんの代表曲です。作詞した阿久悠さんが教会の鐘を思いながら作詞したかは分かりませんが、信仰者を呼び集め、秘跡を執行して恵みを授ける、そのしるしとなる教会の鐘を鳴らす人が必要で、鳴らすのはあなたということです。

実際に鐘を鳴らしているのはシスターや信徒ですが、心の中で鐘を鳴らすのは皆さんお一人お一人です。主任司祭を通してイエスさまがあなたを教会に呼んでいますよ、あの鐘に応えるのはあなたですよ。そういう気持ちを込めて歌いたいと思います。

「あの鐘を鳴らすのはあなた」

作詞 阿久 悠 作曲 森田公一

まもなく、新しい主任司祭がやってきます。次の主任司祭も、皆さんを祭儀に招き、秘跡を執行し、恵みを届けます。わたしも、新しい教会の鐘を鳴らすために、旅立ちます。



復活節第 3 主日 (ヨハネ 21:1-19)

あなたは第三の薬を受け入れますか

今回の辞令で上五島の浜串教会から田平教会へ赴任してまいりました中田輝次（ナカダコウジ）神父です。どうぞよろしくお願いいたします。昭和 41 年の 3 月 12 日生まれ、平成 4 年 3 月 17 日の信徒発見の日に司祭に叙階されて、24 年目を歩んでいるところです。

上五島を出るときに、先輩後輩からそれぞれ念を押されてきました。先輩からは「田平教会の人たちはまじめだから、あなたがふだん言っているおやじギャグとか冗談は言わないように。信者から呆れられるよ」と言われました。

後輩からは、「先輩は 1 週間に 8 日釣りに行きたい人だけでも、赴任した翌日にボートを手に入れてさっそく釣りに行ったりしたらダメですよ」と言われました。ご忠告はありがたく聞きまして、「ヘイヘイ」と聞き流して出発しました。ただ一つ、冗談がどれくらい通用するかが心配です。

わたしは現在、薬を 3 種類服用しています。1 つは生活習慣病予防健診でコレステロール値が引っ掛かり、これを抑える薬です。2 つめは何年か前に通風の発作が来て、それ以来尿酸値を抑える薬を服用しています。これらは毎日です。

3 つめの薬は、これ以上禿げないための薬です。薬の名前は壱岐ゴールドとか、黒白波とかです。これは保険がきかない高い薬です。最後の薬は効果があるのか自信がありませんが、保険もきかない高い薬だから、きっと効果があると信じて時々服用しています。

さて福音朗読ですが、復活したイエスが七人の弟子に現れ、大漁の奇跡を体験させる場面でした。イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」（21・5）と声をかけた時、「ありません」と答えるしかなかったようです。この時点で弟子たちは漁師としての知識を総動員して漁をおこなっていたはずですが、たとえるなら、最初わたしが話しました「効果が認められる薬をきちんと服用して手を尽くしている」と同じです。しかし劇的な変化は起こりませんでした。

そこでイエスは、新しい声をかけました。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」（21・6）それはベテラン漁師が考えもしなかったこと、経験や知識にない指示でした。これはつまり、第三の薬、第三の方法です。

「舟の右に網を打ちなさい」という指示は、必要ないと言えれば必要ありません。指示通りにしても大漁に恵まれるとはとても思えません。信じないという選択肢もあったでしょう。けれども弟子たちは、「それをして何かが変わるの？」という指示に、素直に従ったのです。

状況は劇的に変化しました。変わらないはずの状況が変わりました。これは一つのしるしです。わたしたちの生活に、変わらないはずの状況を変える第三の薬、第三の方法は、イエス・キリストにあるということ

です。イエスの御言葉を、心を開いて素直に受け取る。ここに、わたしたちの置かれている状況をすっかり変える鍵があるのです。

わたしたちの生活を振り返ってみましょう。ふだん、第一の薬、第二の薬は、誰に言われなくても気掛けて服用していると思います。健康維持のために病院から出されている薬とか、生活を豊かにする手段をふんだんに取り入れていることでしょう。しかし、第三の薬、第三の方法についてはどうでしょうか。つまりイエス・キリストからいただく恵みを取り入れて、本当に価値ある生活を手に入れようとしているでしょうか。

「信仰のために時間をかけて、生活が本当によくなるの？」と思っているかもしれません。「利くか利かないか分からないものに時間もお金もかけたくない」と思っているかもしれません。失意の底に沈んでいた弟子たちもそうでした。それでも弟子たちは、第一の手段第二の手段と、あらゆる手を尽くして何も変わらなかったのも、第三の方法、第三の薬にかけてみたのです。

わたしが言うことができるのはここまでです。弟子たちは第三の方法、第三の薬であるイエス・キリストの言葉に従い、劇的な変化を体験しました。わたしも、たとえば病者の塗油の秘跡を授けて、イエス・キリストの恵みに信頼を寄せた人が死の淵から生還するのをこの24年で3人見てきました。あなたはどうしますか？わたしが言えるのはここまでです。

もし、親子の信頼関係が第一第二の方法で深まっていかなかったら、イエス・キリストにより頼むという第三の方法、第三の薬は考えてよいと思いませんか。もし夫婦の関係がぎくしゃくしていて、第一第二の方法で互いの信頼が深まらないとしたら、イエス・キリストにより頼むという方法は、試してみるべきではないでしょうか。

信仰は、変わらないものを変える第三の方法、第三の薬だと思えます。信仰に興味のない人もいますから、必要ないと言えれば必要ありません。イエス・キリストにより頼むことがただちに目に見える効果をもたらすとはとても思えません。信じないという選択肢もあるでしょう。それでもわたしは、「それをして何かが変わるの？」というこの第三の薬、第三の方法であるイエス・キリストを皆さんにお示ししたいのです。

家庭での祈り、主日のミサはもちろん平日のミサ、聖母月など季節ごとに行われる信心業、個人的な聖書の朗読、ゆるしの秘跡などの諸秘跡、これらはどれも、イエス・キリストに源を置いた第三の方法、第三の薬です。皆さんはこの保険のきかない薬を手に取りますか、手に取りませんか。

復活したイエスはあらゆる手を尽くしても状況が変わらないで失望している弟子たち、失望している現代のわたしたちに声を掛けてくださいます。わたしたちの耳には「それをして何になるの？」と聞こえるかもしれません。あえてその問いに答えましょう。復活したイエスにより頼む人は、必ず報われるのです。



復活節第 4 主日 (ヨハネ 10:27-30)

イエスは命がけで教会家族を守る

「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。」 (10・27) イエスの言葉は自信に満ち、確信を持って語られています。わたしたちもイエスの自信に満ちた言葉に少しでも答えることができるように、御言葉に耳を傾けましょう。

ミサの初めにも祈りを呼びかけましたが、このたびの熊本の地震は、大震災と呼べるような被害になってきました。わたしたちはまず、祈りによって災害に遭った方々のために手を差し伸べたいと思います。

さてわたしは、説教する時間は 10 分で十分、12 分で十二分と思っています。ちなみに先週は 11 分 7 秒でした。それと皆さんにお断りしておかなければなりませんが、わたしは毎度ミサの初めから終わりまでを録音しています。それはミサにどうしてもあずかれない病人やその看護をしている人、様々な事情を抱えて参加できない人のためです。

また説教の原稿も、インターネット上のブログやホームページにアップしたり、メルマガで配信したりしています。より多くの方が、ミサの説教を目にし、手に取ることができるようにするためです。長崎教区を一步出ると、月に一度だけ司祭が巡回してミサを行い、ほかの日曜日は自分たちで聖書を読み、訓練を受けた奉仕者が月に一度のミサで用意された御聖体を授ける教会があるのです。正式な説教ありません。

そんなある教会で、実はわたしの説教が印刷され、司祭の来ない日の補いに用いられているそうです。目の前の皆さん以外にも、さまざまな人を支えている田平教会のミサ録音、田平教会での説教ですので、皆さまにも少しご協力をいただき、中田神父の外へ向かっての活動をこれまで通り継続させていただきたいと思っています。

福音朗読に戻りましょう。短い朗読箇所の中に、イエスの力強い言葉が何度も繰り返されています。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。」 (10・27) 「彼らはわたしに従う。」 (同) 「彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」 (10・28)

「わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。」 (10・29)

イエスの確信に満ちたこれらの宣言は、本当なのでしょうか。わたしの心には、イエスの言葉をそのまま受け取るのをためらう引っ掛かりがあります。この前ある方が司祭館のチャイムを鳴らして「田平教会の何々地区の者です。何々の活動をするために、カトリック教会を辞めます」と言ってきました。わたしは「念のため言っておくけど、その選択は最悪だよ。カトリック教会に満足できないところが確かにあるかもしれない。でもあなたが言うその活動は破滅だと思う」と引き止めました。けれども「もう決めたことだから」と言って帰ってしまいました。

こんなことが足元で起こっているのだから、「彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」というイエスの御言

葉を、何の躊躇もなく受け入れるのは難しいのです。しかしそれでも、イエスの言葉は全面的に信頼するに値するのだと思います。

おとといの金曜日、わたしは何人かの人に誘われて、教会の下の浜を見に降りてみました。途中何カ所か、道のないところを切り開いて進みました。降りてみると立派な浜が広がっていました。今は道ありませんが、皆さんにとってこの浜は大切な場所のはずです。

わたしが言うまでもありません。この浜から皆さんの先代、先々代の人たちが、レンガを背負ってこの丘に登り、教会建設のため汗を流したのです。田平教会に積み上げられているレンガの一つ一つが、皆さんのご先祖の汗と涙の結晶のはずです。先輩方は黙々とレンガを運び、また貝殻を焼いて漆喰の材料を用意して、永遠の命を与えてくださったイエス・キリストの羊であることを証明した。イエスの声を聞き分け、イエスに従う者であることを口先ではなく行いで証明したのです。

私事になりますが、わたしの父方の祖父は七右衛門と言います。その兄弟倉吉はイトという女性と結婚しました。イトの父親は幸右衛門で、幸右衛門の兄弟に卯之助という人がいて、卯之助の子に中田藤吉神父さまがおられます。直系ではありませんが、わたしの系図は確実に藤吉神父さままでたどっていくことができます。

その藤吉神父さまがわたしを田平教会に招いてくださり、「彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない」と言えと、促しているのだと思っています。「百年前の証を、百年経った今も証しせよ」と言えと、促しているのだと思います。

皆さんはイエス・キリストが血を流して救ってくださった子供たちです。イエスが永遠の命を与え、決して滅びない、だれもわたしの手から奪うことはできないと言って、イエスの手の中にある子供たちです。ですからたとえどんなオオカミが食い荒らしに來ても、どんな災難が降りかかっても、決して悪の勢力に奪い取られたりはしないのです。

百年前の先祖たちは、イエスの声を聞き分け、イエスに従う信仰をこの教会レンガの一つ一つで証ししてくれました。わたしたちもイエスの言葉を信じる羊であると、態度で答えていく必要があるのです。

三つ例を示しましょう。百年前、家庭での祈りは隣の家まで聞こえるほど響いていたはずですが。百年後の今、祈りを響かせる家庭を必要としています。百年前、できたばかりの聖堂に毎日何十人もの人が平日のミサにあずかっていたことでしょう。今は20人くらいです。もう一度、平日のミサに足を運んでくれる家族を必要としています。百年前、だれもが力を合わせ心を合わせ、一つになっていたことでしょう。「だれかがやってくれるさ」ではなく、「わたしは今日から、教会家族の一致のために協力する」と手を挙げてくれる家族を必要としています。

イエスは十字架の上で血を流して命を分け与え、全力でわたしたちを守ってくださいます。わたしたちはイエスの愛にどのように答えますか？百年前の先祖たちは立派に答えました。あなたはどうしますか？今わたしたちに問われていると思います。



復活節第 5 主日 (ヨハネ 13:31-33a,34-35)

今や人の子は栄光を受けた

「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。」(13・31) 事実はこちらとは正反対の出来事が起ころうとしているのに、イエスはあえて「栄光を受ける時が来た」と言われました。イエスの心の内を、探ってみることにしましょう。

日曜日のミサに用いる「聖書と典礼」を大きなものに取り換えることにしました。典礼委員会の話し合いに出席したとき、「通常の大きさの聖書と典礼は、人によっては文字が小さくて使われていない節がある」と報告を受けました。聞けば、聖書朗読の分だけ大型版が用意されていて、会衆の皆さんはすべて通常版だったそうです。

150 部も購入し続けていたのに、文字が小さいからという理由で最初から敬遠されていたとしたら、実にもったいない話です。そこで、大きいものならばきっと手に取ってくれるだろうと思いまして、主任司祭の一存ですべて大型版に切り替えることにしました。

知っておいてほしいことがあります。費用の出どころです。クイズを出しましょう。「聖書と典礼」の費用は、どこから捻出されているでしょうか。次の 3 つから選んでください。(1) 皆さんの日曜日のミサの賽銭から (2) 皆さんの日曜日のミサの賽銭から (3) 皆さんの日曜日のミサの賽銭から。どれだと思いますか？

(しばらくして) 皆さん正解です。問題はここからです。大型版は便利ですが、通常版の聖書と典礼と、大型版の値段が同じわけではない。慎重な中田神父はこれ以上言えません。中田神父が言えるのはここまでが限界です。あとは皆さんが考えてください。

福音朗読に戻りましょう。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。」(13・31) 実際の場面はユダが最後の晩さんの席から出て行ったあとにこう言われたのでした。つまりイエスは、ユダが手引きした人たちによって捕らえられ、十字架の上での最期を遂げるとははっきり覚悟して、「今や、人の子は栄光を受けた」と言われたのです。なぜ、裏切られ、苦しみを受けることになるのに「栄光を受けた」と言うことができるのでしょうか。

ここでも、次の 3 つから選んでください。(1) イエスは御父の望みを完全に果たすことを「栄光」と考えていたから (2) イエスは御父の望みを完全に果たすことを「栄光」と考えていたから (3) イエスは御父の望みを完全に果たすことを「栄光」と考えていたから。何番だと思いますか？

まあ何番でもいいのですが、イエスはどのような運命をたどるにせよ、御父の望みを完全に果たすことを「栄光」と受けとめていたのです。たとえそれが、人類の救いのために十字架の上で命をささげてほしいという願いであっても、御父の望みであれば完全に果たそうと受け入れてくださったのです。イエスの完全な奉獻は確かに御父にとって栄光であり、

御父は御子イエスに栄光をお与えになりました。

またイエスはこうも言われました。「神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。」(13・32)目の前で、ユダが席を立てて出て行ったのです。それでも、御父は御子に「すぐに」栄光をお与えになるというのです。

これはわたしたちにも何かを考えさせます。父なる神は、ご自分の栄光をすぐにお与えになるお方です。決して遅らせることはないお方です。わたしたちはそれを、どれくらい確信を持っているのでしょうか。

誰かにお願いごとを持って行ったら、冷たくあしらわれ、断られた。心を込めて奉仕しているのに、感謝の言葉一つもかけられなかった。許しがたい状況や、裏切られた気分になることは日常あちこちで見られることでしょう。

しかし、御父はすぐに栄光を与えてくださるというのです。ということは、わたしたちは御子イエス・キリストと同じように、すぐに栄光を与えてもらっているのではないのでしょうか。たとえ、親切を無にされたとしても、それは御父がわたしたちに冷たい仕打ちをしているのではなくて、すでに栄光の始まりなのではないのでしょうか。

イエス・キリストはユダが晩さんの席を立てて出て行った時すでに栄光を受けたとおっしゃっています。わたしたちもそうなのではないのでしょうか。わたしたちの隣人愛が無駄に終わったと感じるとき、それはすでに神の栄光を映し出しているのです。神は返ってこなかった隣人愛の報いに代えて、ご自身の栄光を与えてくれるのです。ですから何も心配することはないのです。

御父は御子イエス・キリストにすぐに栄光を与えてくださったように、わたしたちにも栄光を与えてくださるのだと思います。あとはわたしたちの生き方が問題です。わたしたちは毎日の生活で、御父の栄光を映す鏡として生きているのですが、わたしという鏡は、御父の栄光を曇りなく映す鏡になっているのでしょうか。報われなかったから、裏切られたからと言って不平不満に陥り、御父の栄光を映すはずのわたしの心は曇り、輝きを失っているのではないのでしょうか。

「わたしは今、御父の栄光を受けた。」毎日の生活で、このように神に感謝できる人は幸いです。それは華々しい栄光ばかりではありません。裏切ろうとしているユダが晩さんの席を立ち、出て行ったように、信じていた人に裏切られ、惨めな思いをする形かも知れません。それでもわたしたちは、御父がすぐに栄光を与えてくださる方であると信じ、「わたしは今、御父の栄光を受けた」と声を上げたいのです。

生活のすべてに、父なる神は栄光を与えることがおできになります。「こんな思いまでしなければならぬのか。」もしもそのような体験をされたのでしたら、「わたしは御父から栄光を受けた」と胸を張って答えましょう。こうしてわたしたちの信仰は灼熱の火で精錬され、清められるのだと思います。



復活節第 6 主日 (ヨハネ 14:23-29)

わたしが話したことをことごとく思い起こさせる

「事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく。」(14・29) 復活した主は聖霊の約束にわたしたちの目を向けさせようとしています。聖霊が働くその時に向けて、わたしたちも準備を急ぎましょう。

先週月曜日、ステキなご婦人が司祭館を訪ねてきました。午前 10 時ごろでしたが、司祭館のチャイムが鳴ったのです。月曜日だったので、「月曜日にチャイムを鳴らすとは無礼な」そう思いながら玄関に向かいました。そのご婦人はゴミサをお願いに来ていました。

「ゴミサならよろしい」と内心想っていたら、こう話しかけてきたのです。「神父さま。わたしは 80 歳になります。神父さまのお説教はステキです。」それを聞いてわたしは手の裏を返したように「まあ何とステキな方でしょう」と思い直したのです。目の前のご婦人があと 30 歳若かったら一目ぼれしたのになあ、と思いました。

話は変わりますが、次のコマーシャルをご存知でしょうか? 「わたしのおじいさんがくれた初めてのキャンディー。それはヴェルターズ・オリジナルで、わたしは 4 歳でした。その味は甘くてクリーミーで、こんな素晴らしいキャンディーをもらえるわたしはきっと特別な存在なのだと感じました。今ではわたしがおじいさん。孫にあげるのはもちろんヴェルターズ・オリジナル。何故なら彼もまた、特別な存在だからです。」

もちろん飴の宣伝です。いかにもおいしそうだと感じさせます。みなさんは飴を食べるとき、性格が出ると言ったら信じるでしょうか。たとえば、飴を最初からガリガリ噛んで食べる人はいませんか? その人はきっとせっかちなのだと思います。さすがに最初からはガリガリいなくても、最後のほうになるとガリガリ噛んでしまう人なら結構いるでしょう。この人たちはまあふつうです。

そしてのんびりした人たちは、最後の最後まで、溶けてなくなるまでゆっくり味わうでしょう。飴を食べる癖をよくよく観察していると、3つのタイプそれぞれに性格が出ると言っています。

福音朗読に戻りましょう。イエスの約束は何だったのでしょうか。次のようなものでした。「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」(14・26) 今回このイエスの約束を、わたしたちにどのように当てはめることができるかなあと考えてみたのです。

せっかちな人はこう考えるでしょう。「聖霊が教えてくれて、ことごとく思い起こさせてくださると言っておられた。それなのに今日教えてくれなかった、今日思い起こさせてくれなかった。なんだ、イエスさまは約束を果たしてくれないじゃないか。」すぐに結果を求め、すぐに答えを求める人がいます。すぐ与えられないと我慢ならない人は、聖霊

の働きに導かれるのは難しいかもしれません。

次のような人もいますでしょう。最終的にどこかで期限を切る人たちです。あと少し残っていた飴を、かみ砕く人たちと言ったらよいでしょうか。この人たちはいつまでも待とうとはしません。やはりどこかに締め切りを置いて、いついつまでに結果が出なければ、そこで終了と決めてしまう人たちです。多くの人がこのタイプに当てはまると思います。

イエスは、聖霊が教えてくれて、ことごとく思い起こさせてくださると約束しましたが、それでも多くの人それはそれがあまりにも長い時間かかるのは困ると考えてしまいます。ですから多くの方は、イエスの約束を信じてはいても、聖霊がいつ教えてくれて、いつことごとく悟らせてくださるのか知りたがっているのです。ですがイエスの約束なさを「それはいつなのだ、どれくらい待つのか」わたしたちに注文を付けることなどできるのでしょうか。

そして残る人たちは、イエスの約束がどれだけ時間がかかっても、それを待ち続ける人です。最後の最後まで飴をかみ砕かずに、飴が溶けるまで待つことのできる人です。この人たちは、たとえイエスの約束、「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」この約束がどれだけ時間がかかっても、イエスの約束は必ず実現すると信じて待ち続けることのできる人です。

ここまで考えてみて、聖霊の働きに信頼を置いている人とは、どのタイプの人たちを言うのでしょうか。わたしは最後のタイプの人たちが、イエスの約束、聖霊の導きに十分にあずかれる人たちではないかなと思っています。

必ずしもものんびりした人たちだけがこの最後のタイプなのではありません。どんな性格の人でも、その性格をうまく生かしながら、最後の最後まで飴が溶けるのを待つようにイエスの約束が実現するのを待つなら、聖霊の導きを十分味わうのではないのでしょうか。

わたしたちのほうで結果を判断せず、あるいは期限を切ったりせずに、聖霊がすべてのことを教えてくださるまで、イエスの話したことをことごとく思い起こさせてくださるまで待つ人であるなら、必ず聖霊の恵みに触れるのだと思います。

わたしたちは、イエスが約束してくださる聖霊の働きに、どこまで信頼を置こうとしているのでしょうか。わたしたちのほうから期限を切ったりせずに、聖霊の働きに自分を委ねる信仰を育てていきましょう。

一つのゴールに導くのに、ある人は1年、ある人には3年をかけようとしておられるかもしれません。それでも、信頼を失わないでイエスの約束する聖霊の働きに心を開きましょう。わたしたちに約束された聖霊は、わたしたちの必要を満たして余りあるお方なのです。



主の昇天 (ルカ 24:46-53)

昇天したイエスは今も近くに感じさせてくださる

「イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。」

(24・50-51) 主の昇天の祭日を迎えました。弟子たちとイエスとの距離は離れたのでしょうか。より近くなったのでしょうか。

不思議な体験をしました。釣り竿と会話を交わしました。ライトジギングのロッドなのですが、わたしがそばを通るたびに「海行きてえな」「海行きてえな」って言うんですよ。しばらくは相手にしませんでした。が、あまりにうるさいので「行け」と言い放ちました。

これが効いたらしく、釣り竿はわたしの痛いところを突いてきました。「連れてってくれよ。3月までは毎週毎週毎週毎週、どこかに連れてってくれたじゃないか。」これには参りました。願いを叶えてあげたいのですが、目の前の仕事を横に置いては行けません。もうしばらく待ってくれと、今回のところは宥めました。

わたしの耳がおかしくなったのかもしれませんが。でも釣り竿が訴えかけている気がしてならないのです。それがわたしの心の中で声となった。そういうことだと思います。道具は決して話したりはしませんが、道具が伝えたいことは、道具の持ち主には分かるのではないのでしょうか。

福音朗読に戻りましょう。イエスは、ご自分の弟子たちを祝福し、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられました。イエスが天に上げられた時、弟子たちはイエスが遠く離れて行ったと感じたのでしょうか。

ところでイエスはどのように思っておられたのでしょうか。イエスは弟子たちをこの上なく愛し、すべてを教え、ことごとく思い起こさせてくださる聖霊の約束もなさいました。ですからイエスが父のもとに昇ったとしても、遠く離れて行ったとは考えてなかったでしょう。これまでと変わらず、むしろこれまで以上に、イエスは弟子たちの間にとどまり、弟子たちの中に生きていると考えていたはずです。

問題は、イエスの思いが弟子たちに十分理解できていたかということです。もしイエスのご昇天の際、弟子たちがイエスと同じ理解に達していたら、あるいは聖霊降臨の恵みは必要なかったかもしれません。聖霊の約束は、弟子たちの理解がまだ完成途上であることを暗示しています。自分たちのもとを離れていくのではないか、自分たちは置き去りにされるのではないかと心配していたはずです。

しかし弟子たちは考えるきっかけをもらって立ち直りました。使徒言行録はその様子を次のように描いています。「話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと

同じ有様で、またおいでになる。』」(使 1・9-11)

復活したイエスは姿が見えなくなりましたが、もはや天を見つめている必要はありません。イエスの存在は弟子たちに残された数々のしるしから読み取れるのです。イエスの声さえも聞き取れるのです。約束された聖霊を受けるまではエルサレムにとどまりなさい。聖霊を受けたら地の果てに至るまでわたしの証人となりなさい。

天に上げられたイエスの姿をぼんやり眺めるのではなく、その向こうにある思いに目を向ける。御父のもとで絶えず呼び掛ける声に動かされ、地の果てに至るまでイエスを証しする。弟子たちは、今は不安の中にいますが、間もなく聖霊に満たされてイエスの復活の証人となります。イエスの声が聞こえている人として、証の場に立つのです。

振り返ってわたしたちのことを考えてみましょう。天に昇られたイエスは、わたしたちにも近くいてくださるのでしょうか。わたしたちのうちにとどまって、導いておられるのでしょうか。例を挙げてみたいと思います。

中田神父は司祭になって 24 年、幸いに毎週説教を続けてきました。父の葬儀の時とイスラエル巡礼の時に合わせて二度、日曜日の説教をしなかったかもしれませんが、あとは欠かさず続けてきたつもりです。

24 年も説教が続けられたのはなぜでしょうか。単に言い方を変えたり例えを入れ替えたりすれば、24 年続けられるものでしょうか。わたしはそうは思いません。わたしを含めすべての司祭が、イエスの声が聞こえているので日曜日の説教を続けることができると思うのです。復活し、天に昇られたイエスが語りかける声があれば、才能だけで続けられるものではないと思うのです。

皆さんの中には、ほとんど休むことなく日曜日のミサに来ておられる方もいるでしょう。何年、何十年とミサにあずかることができるのは、努力したからと言うより、ささげられているミサの中でその人がイエス・キリストを見たからではないでしょうか。司祭が唱える奉獻文の言葉を通して、イエス・キリストの声を聞いたので、これまで参加し続けることができたのだと思うのです。

家庭での祈りを欠かさず続けている人もまだまだいらっしゃるでしょう。単なる習慣だけで、何年も何十年も祈り続けることができるのでしょうか。「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」(ルカ 18・1) とのイエスの言葉が聞こえているから、ここまで祈り続けることができたのだと思うのです。

わたしたちは皆、何かの形でイエスの声を聞いて今の信仰を維持しています。遠くからかすかに響く声ではありません。天に昇られたイエスは、わたしたちのすぐそばで、わたしたちの中で、今も「(エルサレムから始めて、) あなたがたはこれらのことの証人となる」(24・47-48) と声を上げているのです。わたしたちはその声に動かされて生きているのです。



聖霊降臨の主日 (ヨハネ 14:15-16,23b-26)

御父と御子の愛は開かれた。あと必要なのは

聖霊降臨の主日を迎えました。天に昇られたイエスは、父なる神と御子イエスとの愛である聖霊を、弟子たちに注いでくださいました。聖霊の注ぎによって、天に昇られたイエスのわたしたちに対する愛を知ることができます。聖霊の恵みに、どのようにすれば感謝を表すことができるでしょうか。み言葉にしばらくひたりたいと思います。

復活節から年間の季節に移行するこの時期、一連の主の祭日が続きます。主の昇天・聖霊降臨・三位一体・キリストの聖体・イエスのみ心です。これら一連の祭日の名前と順番は、ぜひ覚えておきたいものです。

ついでですが、わたしが大人の信徒に求めることは、これから大人の信徒の仲間入りをする堅信組にも求めると理解してください。大人に要求することは、わたしは堅信組にも要求します。そういうわけで、ついこの前のけいこの時は、典礼暦で大切と思う 10 の祝祭日を覚えてもらいました。

先週散髪に行きました。なかなか床屋の看板が目に残まらなくて、はじめはずいぶん探しました。ようやくお店を探し当て、火曜日に散髪してきました。「そろそろ行こうカナ」「だいぶ伸びたし、いいかげん行こうカナ」「散髪に来るのを待ってますって言ってたお店はどこにあるのカナ」ここまで「カナ」を 4 回言ったカナ。まあ、これくらいお店の名前を宣伝しておけば大丈夫でしょう。

福音朗読の学びに戻りたいと思います。聖霊降臨の場面は第一朗読、「使徒言行録」に詳しく描かれていました。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」(使 2・1-4)

ここで 2 つのことを取り上げたいと思います。1 つは、「一同が一つになって集まっていると」(同 2・1)という場面です。何気ない場面と思われるかもしれませんが、彼らはすでに心を一つにして、助け主である聖霊を待っていたということです。

イエスの復活の直後、恐れに囚われて家の中に閉じこもっていた弟子たちでしたが、復活したイエスが天に昇られた後は、心は一つにまとまっていたのです。そこへ炎のような舌の形で聖霊が現れ、一人一人の上にとどまりました。わたしたちが聖霊の恵みを願うためにも、心を一つにして祈り求める必要があることを教えてくれていると思います。

もう 1 つ取り上げたいのは、「一同は聖霊に満たされ」て「話した」ということです。聖霊がちょっと注がれたものではありません。聖霊に満たされたので、言葉となってその人から溢れ出ていったのです。

ここに、聖霊降臨が果たした 2 つの面が示されていると思います。

1つは、御父と御子の愛である聖霊は、溢れて弟子たちに注がれていったということです。たとえば夫婦間の愛は夫婦の間にだけとどまるのですから、御父と御子の愛は、御父と御子の間にだけとどまるということも可能だったでしょう。けれども神はそのような閉じられた愛を望まず、愛である聖霊が弟子たちに、そしてわたしたちにも注がれるように窓を開いてくださったのです。

聖霊降臨のもう1つの面は、弟子たちに注がれたのちに彼らを満たし、あふれて人々に届いたということです。聖霊が弟子たちを満たして、そこでとどまって終わることも可能だったかもしれませんが、聖霊は弟子たちを満たすだけでは終わらず、溢れて人々に語りかけたのです。

この同じ聖霊降臨の体験は、わたしたちにも与えられるに違いありません。父と子の愛である聖霊は、復活したイエスに希望をおくすべての人に開かれているのです。聖霊は溢れて、イエスを信じるすべての人に注がれるのです。

もう1つも同じように実現するでしょう。わたしたちに聖霊が注がれたなら、わたしたちを満たして終わるのではなく、わたしたちから溢れて人々に向かっていくはずです。「“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」（使2・4）とありますが、これは別に日本人が外国語をすらすら話すということだけ考えなくてもよいと思います。

「イエスを信じる人は永遠の命を受ける」この言葉だけでもイエスを知らない人々には何を言っているのか分からない言葉のはずです。これまでの生活で聞いたこともない言葉は、十分にほかの国の言葉ではないでしょうか。

あとは、わたしたちの応答だけが残っています。今週の福音朗読でイエスは「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。」（ヨハネ14・15-16）と仰っています。

新しい言葉、つまりイエスを知らない人々が一度も聞いたことのない洗礼や聖体や罪の赦しがあるのですと語りましょう。わたしたちから溢れ出た言葉は周りの人々を変えるきっかけとなります。それはもはやわたしたちの言葉ではなく、聖霊の恵みが溢れてわたしたちの口をついて出てきた言葉だからです。

互いに愛しあうこと、聖霊の導きに信頼して、すべての人に福音を知らせること。これらはイエスの「掟」でもあります。わたしたちに注がれた愛が言葉や態度になって溢れ出たそのものなのです。

御父と御子は、その愛を閉じた関係にとどめることを望まず、弟子たち、わたしたちに溢れさせてくださいました。わたしたちも聖霊を受けて、閉じた関係にとどめることなく、周りに溢れさせましょう。聖霊降臨はこうして、イエスを信じる者から始まって、世界中のすべての人に届いて行くのだと思います。



三位一体の主日 (ヨハネ 16:12-15)

わたしたちは三位の神を等しくたたえます

三位一体の祭日を迎えました。父と子と聖霊の唯一の神をたたえる日です。三位の神をたたえる確かな動機、きっかけを探すことにしましょう。

わたしは以前、次のような書き置きをして出かけることをよくやっていた。書き置きには3つのことが書かれていまして、「海上保安庁の仕事に行ってきます。捜さないでください。先立つ不孝をお許してください」というものです。すでにお気づきかと思いますが、釣りに行くときにそのことを賄いのシスターに知らせる書き置きでした。

初めの頃は、「海上保安庁の仕事って何ですか？」と聞かれたりしていました。分かってないのだなと思い、さらに困らせようと思って「誰か違反操業をしていないか、見張りに行っているのよ」ととぼけたりしていました。お土産の魚を持って帰る日もあったので、最終的には釣りに行っているのだと分かったようです。

「捜さないでください」と書くのは、午前中に出かけることが多かったのですが、たいてい昼ご飯までには帰るので、昼ごはんは用意していてねという合図でした。「先立つ不孝をお許してください」はシスターがやってくる前に出発していたので、なぜいないのかを知らせる合図でした。

単なる書き置きでは面白くありません。何かを考えさせる書き置きをして、わたしという人間を知ってもらおうという思いもありました。3つの書き置きを総合して、賄いのシスターは主任神父がどのような人間であるかを徐々に理解していったのでした。

わたしたちの信じる神も、ご自身の特徴を言おうとして「三位一体の神である」と、このように啓示されたわけです。人間の知恵でたどり着けない神の特徴は、神ご自身がお示しくださる以外に知ることはできません。そこで神は、御子イエス・キリストを通して「父と子と聖霊である」と示してくださったのです。

ここまでで「なるほど」と納得された方がいらっしゃれば、これ以上話すことはありません。ただ、多くの方が「それは分かりますが、ピンときません」と思っておられるでしょう。わたしたちの信じる神は「父と子と聖霊」ですが、ほかに言葉を補うことはできないのでしょうか。

三位一体の神についてはさまざまな説明が試みられてきました。それらの歴史に耐えうる説明と比べるとつたないかもしれませんが、次の3つについて考えるなら、わたしたちの信じる三位一体の神に思いを馳せることが出来るのではないかと思います。その3つとは、「死・復活・赦し」です。

わたしたちの信じる神さまは、人となってこの世においでくださっただけでなく、わたしたちの救いのために死んでくださったお方です。人の救いのために死んでくださる神は、ほかのどの宗教にもおられませ

ん。この、人の救いのために死んでくださる神は、わたしたちの推理ではたどり着けないお姿なので、神が人となって、実際に命をささげ、わたしたちに啓示してくださいました。この「人の救いのために死んでくださる神」は、御子によって啓示された神の姿です。

また神は、人類の救いのために死んでくださった神の独り子を、復活させてくださいました。使徒言行録 13 章 30 節に次のようにあります。「神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです。」パウロはアンティオキアの会堂でこのように雄弁に語って、「父と子と聖霊」の神を証ししたのです。イエスを死者の中から復活させてくださったのは、父なる神の姿を示しています。

そして復活したイエスは弟子たちに息を吹きかけて、次のように言われました。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」（ヨハネ 20・22-23）御父と御子から与えられる聖霊は、神の赦しを啓示するのです。

こうして、御子によって「神は人類の救いのために死んでくださる」ことが示され、御父によって「神は死者の中から復活なさる」と示され、聖霊が弟子たちに注がれて「神は赦しを与えてくださる」ことが示されました。わたしたちの信じる神は、「父と子と聖霊」の三位一体の神であり、言葉はつたないですが、「死んで復活し、赦しを与えてくださる神」と補うことができると思います。

この説明であれば、神さまはどのようなお方ですかと問われたときに、「父と子と聖霊の神」また「死んで復活し、赦しを与えてくださる神」と、自信をもって答えることができるのではないのでしょうか。

説教の初めに、「三位の神をたたえる確かな動機、きっかけを探すことにしましょう」と呼びかけました。もし、今日のミサを通して三位一体の神をたたえるきっかけをつかんだなら、具体的な場所、時間を思い描きましょう。わたしはどこで、三位一体の神をたたえますか。わたしはいつ、三位一体の神をたたえますか。

「わたしはこの日、この場所で父と子と聖霊の三位一体の神をたたえます。」あなたが三位一体の神をたたえるとき、三位一体の神を知らないだれかが、あなたを通して知り、同じように父と子と聖霊の三位一体の神をたたえる日が来ますように、今日のミサの中で恵みを願いましょう。



キリストの聖体 (ルカ 9:11b-17)

キリストの聖体を、出かけて行って配るために

キリストの聖体の祭日です。イエス・キリストがわたしたちを養う食べ物になってくださいました。そしてこの不思議なわざに、弟子たちの手足で届けていくという弟子たちの協力を求められました。人間の考えを越えた神の働き方について学ぶことにしましょう。

教区司祭の黙想会に参加してきました。今回の黙想会期間中に萩原神父さまと来月5日の打ち合わせをしてきましたので、その話を分かち合いたいと思います。

萩原神父さまとは、おもに典礼のための打ち合わせをしてきました。ここ数週間は白の祭服を着用する祭日が続いていますが、6月5日は年間第10主日で、祭服は緑に戻ります。「神父さまのお祝いをするミサなので、祭服は白でもよいと思いますが、どうでしょうか」とお尋ねしたら、「典礼に従い、祭服は緑にしましょう」という返事でした。

萩原神父さまとわたしとは、30年前からの長い付き合いです。わたしが大神学院の神学科に進み、スータンを着始めたころに郷里の鯛之浦教会に萩原神父さまがやってきました。わたしと、2年先輩の葛嶋神父さまの助祭叙階、司祭叙階は萩原神父さまが主任司祭の時だったのです。

また、わたしが助祭の時に萩原神父さまも叙階25周年の銀祝を鯛之浦教会で迎えました。あれから25年経ち、わたしが田平教会に赴任したことによって、司祭として送り出していただいたわたしが萩原神父さまの金祝をお祝いする側に回るという不思議な縁に恵まれたのでした。

ちょっと話はそれますが、萩原神父さまは人間的には2つの面を持っていました。その一つは「何とかなるさ」という面です。わたしが助祭だった時、小学生の侍者を連れて長崎市内と外海の教会を案内して回ってほしいとお願いされました。「プログラムはお任せします。行ったらっしやい」とだけ告げてすべてを任せてくださったのです。任せてもらい、無事に務めを果たしたことで成長させてもらったと思っています。

もう一つは、短気な部分です。「瞬間湯沸かし器」でした。大神学校の前期が終わり、帰省して司祭館にお土産を持って挨拶に行きますと、司祭館から大声が聞こえるのです。評議会で語気を強めている雰囲気でした。わたしは司祭館のチャイムを鳴らすのをためらい、お土産とあいさつは翌朝のミサの時に後回しにしたのでした。「短気は損気なんだけどなあ。」似たような場面に立ち会ったことが2度ありました。

それでも、わたしは萩原神父さまによって育てられ、司祭職に送り出されたと思っています。助祭の時、主日のミサは鯛之浦で2回、船隠、佐野原、頭ヶ島それぞれ1回、合計5回のミサと説教がありまして、そのすべてにわたしはついて行き、説教は田平教会で言えば二番ミサ以外はすべてわたしが担当しました。日曜祝日毎に4回説教をして、助祭の期間を鍛えてもらったことは一生の宝でした。

長くなってしまいました。福音朗読に戻りたいと思います。弟子た

ちは、一日の終わりにあたり、イエスに進言しました。「群衆を解散させてください。」(9・12) 弟子たちのこの言葉には、単に「今日はこれで終わらしましょう」だけではない、隠された意味があるかもしれません。

「神の国について語り、治療の必要な人々をいやす」この仕事は大まかに言うと祭司の仕事です。祭司の務めは一日が終わればまた次の日に果たせばよいわけです。「先生、祭司の務めは終わりにしましょう。群衆は生活に戻る必要があります。食べ物を与えるのは先生の仕事ではないです。」そういう意味合いが込められていたのかもしれません。

「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」(9・13) イエスは単なる祭司ではありません。祭司であり、預言者であり、王であるのです。ひとことで言うなら「主でありメシアである」お方なのです。主でありメシアである方の務めは、日が傾いてそれで終わりなのではなく、どこまでも民の必要に答える必要があるのです。

昼も夜も、絶えず叫び求める民に答えるために、イエスのご自分が食べ物となることを願われました。御聖体です。ご自分が食べ物となることで、「すべての人が食べて満腹した。残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった」(9・17) あの豊かさを味わうことができたのです。

イエスを信じる人は、五千人にパン五つと魚二匹という絶望的な状況でも、満たされる体験ができます。35年前、聖ヨハネ・パウロ二世教皇が松山でミサをささげた時、人々は寒さに凍えましたが、教皇様を一目見た。教皇様のミサにあずかれました。そのことだけで寒さを忘れました。

長崎市内の滑石教会で、お仕えしていた主任司祭が年末に肺炎で急死したとき、クリスマスは喜べるはずがないと思っていましたが、希望の持てるクリスマスを神様は用意してくれました。聖地巡礼に連れて行ってくれた島本大司教様が亡くなられたとき、あまりのことに何も手につきませんでした。当時巡礼に参加した青年たちが立派に育ち、今は慰められています。絶望的な状況にあって、イエスのご自分を食べ物として与えてくれたおかげで、何度も有り余る豊かさにあずかったのです。

一つ、ここに必要なものがあります。弟子たちの働きです。イエスが五つのパンと二匹の魚を群衆に配った時、弟子たちの協力がありました。今わたしたちの手足を必要としています。御聖体はいつもわたしたちのために用意されていますが、それを配る司祭が必要で、「この人は御聖体を必要としています」と案内してくれる信徒が必要なのです。

わたしたちの食べ物となられたイエスは、わたしたちの絶望的な状況にあって豊かになる体験を与えてくださいます。特に聖体祭儀、ミサの中で体験させていただきます。そして、キリストの聖体に豊かにされるには、奉仕者である司祭、修道者、信徒がこれからも必要なのです。

イエスが五千人を満たしたあの体験を現代に再現するためには、奉仕者が必要です。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」このイエスの言葉に従う奉仕者がわたしたち田平教会に与えられますように、ミサの中で恵みを願いましょう。



年間第 10 主日 (ルカ 7:11-17)

神のいつくしみは声なき者まで及ぶ

年間第 10 主日 C 年は、「やもめの息子を生き返らせる」という場面が選ばれました。この物語は、人間に対する神の特別ないつくしみを教えてくれます。神のいつくしみが人間のどのような姿に注がれるかを学び、お一人お一人、生活との結びつきを考えてみましょう。

わたしは現在、二つのボランティア団体に関わっています。一つは「カトリック点字図書館」です。点字という印刷物で目の不自由な方に情報をお届けするボランティアです。わたしは点字を読めませんが、自分のお小遣いで寄付を続けて、今も続いています。

司祭になり、浦上教会に赴任したとき、当時のカトリック点字図書館館長橋本宗明さんと後に館長になる高橋秀治さんが司祭館を訪ねて来ました。24 年前のことです。この頃ようやく点字もパソコンでプリントできる時代になりまして、わたしは思い切って当時使用していたパソコンを寄贈しました。それが縁で、東京に出向いたときは今でもカトリック点字図書館に顔を出して帰るという付き合いを続けております。

もう一つは「声の奉仕会マリア文庫」です。こちらも目の不自由な方々へのボランティアですが、おもに書物や雑誌を録音して情報提供する団体です。出会ったきっかけは、マリア文庫が定期的に作成している月刊テープに、「宗教コーナー」として先輩神父さまがお話を提供していたのですが、後任に譲りたいということになり、マリア文庫の事務所からいちばん近い浦上教会で助任だったわたしに声がかかったのです。関わりはその後ぐっと深まって、初代の代表でマリア文庫を 25 年引っ張ってくれたシスター野崎の後任として、現在は代表を務めています。

この二つのボランティア団体は別々の形でわたしを引き寄せたと思っています。東京のカトリック点字図書館は、ある意味何も働きかけはなかったのですが、わたしから心惹かれ、関わり続けています。寄付をしなければならない理由もありませんでした。寄付したいと思ったのです。一方で声の奉仕会マリア文庫は、月刊テープ作成に協力してくれていた先輩神父さまが担当を降り、マリア文庫会員がわたしのところに来て、どうか手伝ってください助けてくださいとお願いされたので協力が始まったのです。どちらも手を差し伸べたことには変わりありませんが、きっかけはそれぞれ別のところにありました。

福音朗読に戻しましょう。ナインという町の門で、イエスは一人息子を亡くした母親に目を留めました。当時夫を亡くしたやもめの女性は働くすべもなく、とても不安な生活を強いられていました。さらに一人息子が亡くなったというのですから、彼女の置かれている状況は絶望的だったでしょう。町の人が慰めようとしていましたが、やもめの心を支えることはとてもできなかったはずです。

イエスはこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」(7・13) と言われました。先にわたしが二つのボランティアのことを話

して、一方は何も働きかけがなかった、もう一方は「手伝ってください助けてください」と言われて手を差し伸べたと言いましたが、ここにも同じ場面が描かれています。一人息子を亡くしたやもめは、イエスに何も訴えかけなかったのです。叫ぶことすらできないほど哀れな姿だったのです。しかし、「主はこの母親を見て、憐れに思った」のです。ここに、神の憐れみといつくしみの頂点があると思います。

つまりこういうことです。イエスに出会った人々は、「どうか憐れんでください」と叫び求めて、願いを叶えられた人々と、願いの声すら上げられず打ちひしがれているのをイエスが一方的に憐れに思い、手を差し伸べた人々とがいました。「助けてください憐れんでください」と訴えかけて願いが叶えられるのは通常のやり取りです。ここでも神の深い憐れみといつくしみが示されますが、神はさらに、何も叫ばなかった人、何も叫べない人にさえ、無償で憐れみといつくしみを示すのです。

参考までに、何も叫びを上げなかったのに神が手を差し伸べたと考えられる場面が福音書に三つあります。一つは今週の「やもめの息子を生き返らせる」物語「主はこの母親を見て、憐れに思い、『もう泣かなくともよい』と言われた」（7・13）で、一つは「善いサマリア人」のたとえ「旅をしていたあるサマリア人は、そばに來ると、その人を見て憐れに思い」とあり、このサマリア人はイエスと受け取ることもできます。あと一つは「放蕩息子」のたとえ「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」（15・20）もちろんこの父親は父なる神です。

これらの物語はすべてルカ福音書のものです。こうしてルカは、一方的に人間を憐れに思い、駆け寄る神の姿を描くのです。もちろん「わたしを憐れんでください」との叫びに答えるイエスも描かれています、一方的に憐れみをかけてくださる姿に、わたしは神のいづくしみが特に示されていると思うのです。

ところで神が一方的に憐れみをかけ、いづくしみを示されたのは二千年前だけのことでしょうか。そうではありません。詩編第 136 編に何度も繰り返されているように、「慈しみはとこしえに」なのです。

わたしは初金曜日の病人訪問で、神が一方的にわたしたち人間にいづくしみを示す姿を感じます。足がかなわなかったりして見舞ってもらっている人がほとんどですが、なかには御聖体が本当に命をつないでいるのかもしれないと思う方々もいます。「この人を訪ねて、わたしは命を養いたいのだ。」イエスの一方的な憐れみ、いづくしみに突き動かされて、司祭は病める羊のもとを訪ねています。神の慈しみは今も命の危機にある人を養い、神は今も司祭を通して出向いて行くのです。

わたしたちもミサの中で聖体をいただいています。聖体に養われています。そうであるなら、出会う人に、神のいづくしみを形に表しましょう。助けてくださいと言われるまでもなく手を差し伸べるイエスに、わたしたちが倣う者となれますように。ミサの中で恵みを願いましょう。



年間第 11 主日 (ルカ 7:36-8:3)

神の無償の恵みにわたしたちも心開く

今週の福音朗読は「罪深い女を赦す」物語です。罪が赦されるとはどういうことなのか、物語を通して学ぶことにしましょう。

先週の司祭叙階金祝記念ミサは皆さんの熱心なお祈りのおかげで、立派に終えることができました。萩原神父さまもとても喜んでおられ、帰りに皆さんへの感謝と、わたしへのねぎらいも添えてもらいました。ありがたいことです。次は何年後かに、浜崎神父さまのお祝いがあると思います。わたしはその頃には、次の神学生が誕生していればいいなあと願っております。

さてこちらに赴任する前から飲み続けておりました薬が無くなったので、青洲会病院に薬を処方してもらいに行きました。この先は作り話なので落語だと思って聞いてください。高橋という内科の先生に一通り診察していただいて、聴診器を当てた時に「気管支炎の兆候があります」と言われました。

全く身に覚えがないと返事をしましたら、「最近、誰かの指示を無視したことがありますか？」と聞かれ、「はあ、ナイターソフトでコーチが三塁でストップ！ストップ！と言っているのを無視して二塁から一気にホームに帰ったことがあります」と答えました。

「それですよ、それ。」何のことですかと続けると、「それはですね、『言うこと聞かんし炎』という病気です。これからはコーチの指示に従ってください。いいですか？」わたしは返事をしませんでした。

最後に看護師が「先生、お薬を」と言うと先生が「第三の薬を処方しておきましょう」と指示を出すと、「先生、そのお薬はもう処方済みのようです」と看護師が答えたので「では第四のお薬を」「承知しました」というオチでした。九割がた作り話ですが、いかがでしたか。

福音朗読に移りましょう。物語に登場する女性は、「この町に一人の罪深い女がいた」と紹介されています。小さな町であれば、噂は誰もが知っていることでしょう。誰もが、その女性に冷たい視線を向けていたのだと思います。しかし女性は、そうした冷たい視線を一身に浴びながらも、イエスの足元にひれ伏しました。

イエスはこの女性がどんな気持ちを表そうとしているのかご存知だったでしょう。後ろ指さされる生活をしてきた自分であっても、イエスの憐れみにすごることができる。どこかで彼女はそのことを知り、自分がすでに憐れみをかけてもらっていると感じ、感謝の気持ちを表しに来たのです。彼女の行動は、「今からこれだけのことをしますので、赦してください」という態度なのではなくて、「すでに赦して下さっていることに感謝します」という態度だったのではないのでしょうか。

先週、萩原神父さまが今週の福音朗読を予感していたかのように、「ゆるしの恵みは、カトリック教会にしかありません。神が人の罪を赦すという驚くべき御業に司祭はたずさわります。こんなにすばらしい仕

事はありません。」そう繰り返し語っておられました。赦しは、神のいつくしみの最も発揮される部分と言えるでしょう。神にしかできないいつくしみの業に、人間に過ぎない司祭が関わることは、司祭職はなんとすばらしい道でしょう。

物語を進めましょう。食事の席を設けたファリサイ派の人は、イエスの姿に神のいつくしみを見たはずですが、彼はイエスに心を開くことができません。ファリサイ派の人にとって、罪深い女を近づけることだけでも許しがたい行為だったのです。罪深い人には近づかない。交わる人に線引きをして遠ざける。それが、みずからを宗教上の汚れに晒さない唯一の方法と考えていたからです。

ところがイエスは、罪深い女性が足元に飛び込んでくるのをお許しになったのです。「泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。」（7・38）これは、彼女の罪がイエスのいつくしみによって洗い流され、ぬぐわれ、ついには赦された者として香りを放つようになる姿そのものだと思います。

ファリサイ派の人が神のいつくしみを全く理解しないので、イエスは例えを示されました。現代であれば、一方は 250 万円、他方は 25 万円くらいの借金かもしれません。「二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」（7・42）彼は正しい答えを返しました。「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」（7・43）

人はなぜ、正しい答えを出せるのに、正しい行動が取れないのでしょうか。ファリサイ派の人は、イエスとお近づきにはなりたかったのですが、罪深い女のように足元に跪くつもりはありませんでした。女性が示した愛と従順を、正しい立派な行いだと認め、彼女と共にイエスの前に跪く。そこまでイエスに近づくことはできなかったのです。

なぜ正しい答えを出せるのに、正しい行動が取れないのでしょうか。それは神の恵みは無償であると認めないからだだと思います。神は正しい人には恵みを与え、罪深い人には恵みを与えない。頭のどこかにそのような考えがあるから、正しい答えを出せても正しい行動が取れないのです。イエスによって明らかにされた「正しい人以上に罪人を憐れみ、いつくしみと恵みで覆ってくださる神」は、認められないのです。

わたしたちはどうでしょうか。罪深い女性の罪を覆うほどの神の赦しの恵みを、認めることができるでしょうか。認めることができないでしょうか。認めることができないかもしれません。教会の決まりから大きく外れている人が神さまの赦しといつくしみをもらうのは虫が良すぎると、思っているかもしれません。

イエスは今日、わたしたちに「神の赦しは無償の恵みです」と示してくださいました。神さまが誰かの罪を寛大に赦してくださったとしても、正しいのは神さまであって、わたしたちではありません。洗礼・堅信・聖体・罪の赦しなど、神が与えてくださる無償の恵みを、わたしたちも心からたたえることができるよう、ミサの中で願いましょう。



年間第 12 主日 (ルカ 9:18-24)

苦しみを経て初めて知ることのできる絆がある

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」ペトロの信仰告白が今週取り上げられました。ペトロは立派な信仰を言い表しましたが、それは十分だったのでしょうか、わたしたちも信仰の心構えを学ぶことにしましょう。

最近は無理ができなくなりました。1日1つ仕事を入れると、疲れてそれ以上はまともな仕事ができない日が出てきました。昔は3つ4つ会議を入れても平気だったし、日曜日に一番ミサ二番ミサ、結婚式、飛び込みでの納骨、評議会と重なったとしても平気だったのです。

ところが先週水曜日、平戸地区の司祭会議に午前中出席し、昼過ぎに帰ってきたら、ぐったりして何もする気が起こらないのです。どうしようもなかったので畳に大の字になってウトウトしていたら玄関のチャイムが鳴りました。郵便配達員でした。荷物の受け取りにやっとの思いで玄関に立つ有様です。以前と比べて粘りがなくなっただけだと思います。

皆さんも経験されたことがあるかもしれませんが、「口だけは達者」という人がいます。物を運ぶ力もない、足もおぼつかない、けれども言うことだけは人の何倍も元気だという人を見たことがあるかもしれません。そこから見えてくるのは、「言うのは簡単だ」ということです。

福音朗読では、イエスが弟子たちに問いかけています。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」(9・20) まずは言葉で、ご自分のことを何者だと考えているかを尋ねました。弟子たちは、どんな言葉でも選ぶことができました。言うだけであれば、どんな言い方もできたわけですから。

そんな中で、ペトロは立派な言葉でイエスへの信仰を表しました。「神からのメシアです。」(9・20) これ以上ない、満点の回答でしょう。ただし、ペトロの答えは試練をくぐって清められる必要がありました。鉄が、火で精錬されて鋼になるように、ペトロの信仰、ペトロの言葉は、苦しみという炎を経て揺るぎないものに変えてもらう必要があったのです。それがイエスの死と復活の予告でした。

言葉だけの絆ではなく、苦楽を共にした人の絆は強いものです。「愛しているよ」と一日 20 回言葉をかけることも夫婦の絆かもしれませんが、言葉数よりも共に苦しみ、共に喜び合う夫婦の絆のほうがより強いはずです。

そのように、イエスは弟子たちに言葉だけが踊っている信仰ではなくて、苦しみを経て精錬された信仰を求めるのです。ペトロは苦しみを経て初めて、自分が口にした信仰「神からのメシアです」が本物に高められていくのでした。

イエスご自身予告した通り、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活する」(9・22) お方です。ペトロは弟子の頭でありながら、三度イエスを知ら

ないと言い、十字架のもとにとどまることもできませんでした。弟子を代表して「神からのメシアです」と答えたのに、受難と死の予告にさえしり込みしたのです。

ペトロの信仰は十分立派なものでした。しかし言葉で表した信仰は、苦しみを経て精錬され、完成される必要がありました。事実ペトロの信仰はイエスの死と復活によって完成されたのです。「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」とも言ったペトロの信仰は、イエスの受難と死という現実には苦しみ、苦しみを経て完成されたのです。

わたしたちの信仰はどうでしょうか。自分の信仰を言葉で言い表すことができるかもしれません。自分も含め司祭たちは叙階の記念に用意した御絵に、しばしば聖書の言葉を引用します。わたしは2通り用意しましたが、そのうちの1つは使徒言行録でペトロとヨハネが宣教活動しないように脅された時に発した言葉です。

「わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」（使 4・20）どんなに苦しくても、行き詰まっても、見たこと聞いたことを話さないではいられない。わたしもそう考えています。選んだ言葉は、逆境を経て、司祭としての苦しみを味わって、本物になりました。

それぞれが、約束した言葉や誓いの言葉を持っているでしょう。結婚した人々は、「生涯互いに、愛と忠実を尽くすことを誓います」と声に出して誓いました。言葉それ自体も素晴らしいと思いますが、夫婦が苦しみを通った時、重みは増してくるわけです。

また洗礼を受けた人は「父と子と聖霊のみ名によって」洗礼を受けています。「洗礼を受けると神の命をいただきます」そのように信仰を表明すれば、なぜ日曜日ごとにミサに行くのですか、なぜ十字架にはりつけにされたキリストを信じるのですかと洗礼を受けていない人に事あるごとに聞かれ、答えに苦しみ、逃げ出したくなることもあるでしょう。けれども、そうした苦しみを経て初めて、わたしたちの信仰は金銀よりも価値あるものになる、火で試されて清められるのです。

苦しみの先に、命があります。わが子を産んだお母さんは皆、そのことをご存知です。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。」（9・23-24）日々の十字架という苦しみを経て、イエスの言葉はわたしたちに命をもたらす言葉となります。

言葉だけの絆ではなく、苦しみを経て初めて知ることのできる命の絆をイエスと保つべきです。この命、この絆は、日々の十字架を背負うすべての人に保証されています。希望をもって生きてまいりましょう。



年間第 13 主日 (ルカ 9:51-62)

イエスをまっすぐ見つめ、後ろを振り向かない

今週の福音朗読は「弟子の覚悟」を問う場面が選ばれました。神の救いのわざを目の当たりにした人にイエスは覚悟を求めます。わたしたちもイエスの求めに答えることにしましょう。

最近司祭館で食器が見つかり、騒ぎになりました。わたしの歓迎会の日の晩、何人かのお父さんたちが司祭館に寄って、コップとか急須とかを使って帰ったのです。わたしは後片付けの様子を見ませんでした。

水曜日に賄いさんが来てこう言ったのです。「いつも使っている急須がありません。どこに仕舞いましたか?」「知らないよ。」賄さんはわたしを疑っています。「そう言えば歓迎会のあとに食堂を使ったなあ」と身の潔白を証明するのですが、それだけの数のコップや急須が消えるはずがないと、ますますわたしへの疑惑が深まっていました。

先週です。賄いさんが急須やコップが見つかったと報告してきました。なんと食洗器の中に2ヶ月、ずっと置いたままだったのです。わたしはこの2ヶ月白い目で見られたことを謝ってほしい気分でしたが、それにしても台所の食洗器を開けなかったのには驚きました。

聞くとところによると食洗器は6年間使っていないそうです。「急須行方不明事件」が発生したおかげで食洗器が使えるのだと分かり、賄さんは急須ほかを食洗器に入れて帰ったお父さんたちに感謝しております。

伊万里マリーナでお金を払ってボートを借り、一人で伊万里湾を荒らしてきました。場所の見当を付け、タイラバでの釣りもしてみました。初めは小アジと間違えそうなサバがかかり、当然リリースすべき大きさでしたが、お金払ってボート借りて、もしもこれ一匹だったらという恐れがあったので、リリースしませんでした。

最終的にはスズキとコチも釣りました。スズキは竿がしなりまして、「オレの腕で釣れないはずがなかろうもん」とここまではよかったのですが準備が悪かった。タモ網を持って行ってなかったためにバラしてしまい、手元に残ったのは手のひらくらいの鯛2匹と小アジくらいのサバ2匹でした。もっと腕を上げてからまた報告します。

福音朗読に戻りましょう。イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」(9・57)と言う人がいました。イエスの答えは、この人に対してだけではなく、従っている弟子たちにも言っているものだと考えるべきでしょう。

イエスがこの人に答えたのは、どんな生き物にも神が用意してくださった安らぐ場所があるけれども、わたしとわたしに従う者たちには安らぐ場所は期待してはならない、そんな厳しい宣教の旅であるということでした。すでにイエスに従っていた弟子たちにとっても、身の引き締まる言葉だったでしょう。

また別の人にイエスが「わたしに従いなさい」と呼びかけると、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と条件を出して

きました。家族の葬りは、何を置いても優先される出来事のはずです。従っていた弟子たちも、「それは致し方ない」と考えたことでしょう。

しかしイエスの宣教活動は一刻を争うものでした。イエスが救い主であると気付いた人は、父の葬りも理由にならないのです。家族の中でイエスが救い主だと理解できている人が自分一人であるならば、父の葬りはその他の家族に任せよ、そこまでの覚悟をイエスは求めるのです。

何かのプロフェッショナルを自認している人は、しばしば家族の最期に立ち会うことができないと言います。例えばプロスポーツ選手がそうです。そして家族も、家のことにかまっていないで、プロとしての仕事を立派に果たして欲しいと願うそうです。イエスに生涯を委ねた人は、その道のプロフェッショナルですから、イエスの招きを最優先するのです。そして家族もその選択を応援してくれるはずです。

また、別の人も言います。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」(9・61) この願いも譲れないように聞こえます。弟子たちにも家族のいる者がいたでしょう。イエスはどのように答えるだろうか。注目していたのではないのでしょうか。

イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」(9・62) と言われました。このイエスの答えを思い出させる面白い話を聞かせてもらいました。

長崎の神学校でお世話になった小島神父さまに、引退後聞いた話ですが、ある親子が神学校の入学式に臨むために長崎に出かけていきました。両親は親元を離れるわが子が、きっと不安でたまらないだろうと心配して付き添っていたのですが、建物の一階で無事に入学式を終えると、生徒は勉強部屋や小聖堂のある二階に上がっていきます。

その子は二階に上がる時に両親にこう言ったそうです。「入学式が終わったから帰っていいよ。」そう言って一度も両親を振り向くことなく、同級生や先輩たちと二階に上がっていきました。ちょっとくらい後ろを振り向くかと思っていた両親はガッカリして帰ったということです。彼が無事に司祭になったのか、その後のことは分かりません。

神学院に入学したこの新入生は、ルカ福音書の今日の箇所を知っていたのでしょうか。「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」(9・62) 知らなかったかもしれません。けれども、後ろを振り向くことも忘れるほど、入学式の中でイエス・キリストと出会ったのだと思います。神との出会いが強烈であればあるほど、自分の前を歩くイエスに引き寄せられていくのではないのでしょうか。

誰もが、父母を持っています。誰もが家族を持っています。けれども福音宣教において大きな実りを得るためには、後ろを振り向くのを忘れるほどイエスに引かれて行く人が必要なのです。イエスをまっすぐ見つめてついて行く司祭になってみたいという子供たち、シスターになってみたいという子供たちが必要なのです。田平教会に手を挙げてくれる子供たちがいるなら、わたしは最後まで応援します。



年間第 14 主日 (ルカ 10:1-12,17-20)

あなたがたの名が天に書き記されている

年間第 14 主日 C 年の朗読として、七十二人の任命と宣教活動への派遣の様子が選ばれました。今週のように福音朗読が長い形と短い形を用意しているときがありますが、わたしは、短い朗読の形では省略される七十二人が宣教から帰ってきて報告し、イエスがさらに言葉をかける部分に注目したいと思います。

田平小教区で初めての霊名の祝いを迎えることができます。「霊名の祝いを迎える主任神父さまのために祈りましょう」という声を聞いたときに、何かくすぐったい気持ちを覚えながら、この日を迎えました。皆さまのお祈りに心から感謝いたします。病人訪問に出かけたときにも、「霊名のお祝いおめでとうございます」と声をかけてもらいました。

こんなに気にかけてもらい、本当に幸せだと思います。個人的にお祝いをくださる方もいらっしゃいました。これからの働きでお返しできればと思っております。なおわたしのポケットは若干の余裕があります。

新上五島町から、参議院議員選挙投票所への入場券が郵送されてきました。説明の紙には（１）当日新上五島町に投票に来るか（２）新上五島町に期日前投票に来るか、（３）いろいろ面倒くさい手続きを新上五島町にお願いして投票用紙を郵送してもらい、近くの投票所で不在者投票をするか、いずれかにしてくださいと書いてありました。

長崎教区の司祭たちは基本的に面倒くさいことを嫌う人種です。不在者投票を田平でするための手続きを新上五島町に申請するくらいなら、浜串生活館の投票所に投票に行ったほうがおもしろそうだなとわたしは思いましたので、火曜日に期日前投票のため五島に行くことにします。

予定では火曜日午後のフェリーに乗るのですが、せっかく五島まで行くのに投票所の紙一枚だけ手に持っていくのはあまりにももったいない。ということで、釣り竿も持って五島に行つてこようと思います。ただし五島で魚が釣れたら、実家に置いて来るつもりです。

福音朗読に戻りましょう。長い朗読の形では、七十二人が喜び勇んで宣教から帰ってくる様子が描かれています。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」（10・17）驚くような体験をしてきているので、イエスに報告したくてたまらないという雰囲気伝わってきます。

七十二人はイエスが「そうかそんなことがあったか。それは見てみたかったなあ」こんな迎え方をしてくれるものと思っていたのでしょうか。思っていたかもしれません。しかしイエスは、この弟子たちの興奮から少し距離を置いて話しています。

「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

（10・20）どんな華々しい奇跡よりも、名前が天に記されていることを喜べと言うのです。天の父に名前が記憶されていることが、何より大事

だということです。

先週わたしは広島に行き、引退してすでに名誉司教となっておられた三末司教さまの葬儀ミサに参列してきました。もともとは野球観戦のためにこの日を押さえていたのですが、不思議なめぐり合わせで名誉司教の葬儀ミサにも参列することができました。

大阪教区大司教の前田司教さまが葬儀ミサの主司式を執り行いました。説教は三末名誉司教の人柄をしのばせるすばらしいものでした。その中で「神のなさることは時にかなって美しいと言うけれども、本当だなぁ」と思わせるエピソードを紹介してくださいました。

三末司教さまがお亡くなりになったのは6月28日未明です。その2日前、6月26日にフランシスコ教皇さまは、広島教区の次の司教として白浜 満師を第七代の教区長に任命されました。そして、その通知は日本におられる教皇大使を通して、手紙で三末名誉司教にも届いていたそうです。

28日名誉司教が亡くなり、部屋に入ってみると、次の教区長が決まったという手紙が、開封されて机の上に置かれていたのです。つまり引退された三末名誉司教は、後継者が決まったことをその目で確認して、安心して神さまのもとに旅立ったわけです。

神さまのご計画は、筋書きのないドラマだと思います。いつ後継の司教さまが指名されるか、いつ名誉司教さまが天に召されるか、誰にもわかるはずがありません。それなのに、確かに後継の司教さまを見届けて、名誉司教が旅立った。司教叙階という恵みによって天にその名が記されている人々だからこそ、起こる出来事なのだと思います。偶然そのようになったのだと説明するには、あまりにもでき過ぎた話だと思ったのです。

わたしたちの人生で確実に喜ぶことのできるものは本当に限られています。給料が上がったと喜んでいても、次には半分の給料を提示され、しぶしぶ受け入れなければならないかもしれません。目の前に起こる出来事は、生じては消え、絶えず流転していくのです。

そんな中であって、わたしたちが洗礼によって堅信によって叙階によって、一度天にその名を刻まれれば、その喜びは決して奪われることがないのです。今日わたしが霊名のお祝いを受けているのも、わたしの霊名が、天に記されていることを皆さんに喜んでもらっているのだと思います。

「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」秘跡は、皆さんの名が天に書き記される確実な体験です。この世でどれだけのことを残したり成し遂げたりしたかを喜ぶよりも、秘跡によって自分の名前が天に記されたことを喜ぶ人となれますように。このミサの中で恵みを願ってまいりましょう。



年間第 15 主日 (ルカ 10:25-37)

行って、あなたも同じようにしなさい

年間第 15 主日 C 年の朗読として「善いサマリア人」のたとえが選ばれました。イエスは「行って、あなたも同じようにしなさい」(10・37)と呼びかけます。きっとそれは、わたしたちにも向けられた言葉です。どのように理解し、消化すべきか、考えることにしましょう。

参議院議員選挙投票日となりました。国民の義務を果たすため、確実に一票を投じに行ってください。ちなみにわたしは期日前投票をしに新上五島町に行ってきました。選挙区選挙の投票用紙には3人の候補者のうちの1人を投票しました。比例代表選挙の投票用紙には「ん党」と書いて出してきました。皆さんの想像にお任せします。

福音朗読は「善いサマリア人」のたとえです。わたしは皆さんの期待を裏切るような話から始めようと思っています。「善いサマリア人」は滅多に現れない。わたしの経験から学んだことです。それを物語る2つの経験を紹介します。

わたしは以前、スズキの 250cc KATANA に乗っていました。当時は今以上に運転技術が未熟でしたが、このバイクにどうしても乗りたくて普通自動二輪免許を取りに行った手前、乗りこなせないのは承知の上で、KATANA を乗り回していました。都合6年くらい乗ったでしょうか。

このバイクでわたしは二度転倒事故を起こしました。一度はいわゆる「立ちごけ」です。これは大した怪我ではなかったのですが、もう一度は道幅の狭い下り坂で砂にタイヤを取られてのスリップ事故でした。バイクは道路脇の溝にはまり、想像がつくと思いますが、すねから太もも、腰にかけて思いっきり擦り傷を負いました。

事故は司祭館から KATANA で出発し、峠を越えてあと少しで国道に出ようとする場所で起きました。このとき後ろから、パジェロがずっとついてきていたのです。司祭館を出た直後からついてきていたので、おそらく教会の信者だったと思います。砂にタイヤを取られ、転倒して溝にはまった時、「痛い」より「恥ずかしい」という気持ちでした。

わたしのすぐ後ろをついてきていたパジェロはどう思ったのでしょうか。減速して、そーっと脇をすり抜けてしまいました。声もかけてもらえませんでした。わたしもいつまでもそこにいたくなかったので何とか起き上がり、エンジンがかかることを確かめてから、溝から引きずり出し、この後どうするかを考えたのです。その間あと一台見知らぬ車が素通りしました。とうとう「善いサマリア人」は現れませんでした。

もう一つの例は、溝にはまっている車をわたしが目撃した体験です。当時わたしが赴任していた教会はつづら折りの坂を下りて行った谷底のような集落にある教会でした。その日は大雨で、車のワイパーをすごく早く動かしながら運転していました。また月夜間の期間でもあり、遠洋漁業の仕事から帰ったお父さんたちで賑わっている時期でした。

その日の朝、巡回教会のミサを終え、いつものように上の道路から谷底

の集落の教会へと帰る途中、一台の軽自動車が道の脇で止まっていました。大雨の中、タイヤを溝に落として身動き取れずにいたようでした。わたしは運転手を見ませんでした、こう考えたのです。

「あー。誰かお父さんが前の晩に一杯ひっかけて運転して、操作を誤ったか。かわいそうに。」ここで車を降りて動けなくなっている人に近づいていれば、わたしは「善いサマリア人」になれたはずです。ところがわたしは、「まあ、誰か船の友達が助けに来るでしょう」そう考えてそのまま立ち去ったのでした。

ここで話は終わりませんでした。司祭館の賄シスターの報告で急展開します。賄シスターがこう言うのです。「いやあ、参りました。この大雨の中、タイヤを溝にはめてしまい動けなくなりました。どうしようかなあとじっと待っていたら、船員さんが声をかけてくれました。その人はすぐ仲間の船員さんたちを呼んできて、たった今助けてもらいました。」わたしはその場を通りかかったとは言えませんでした。

結論を申し上げますと、「善いサマリア人」はそうやすやすとは現れないのです。わたしが困難にあえいでいた時、すぐ後ろからついてきていた人、しかもおそらく当時赴任していた教会の信者が、素通りしていったのです。反対にわたしが「善いサマリア人」になれるチャンスが巡ってきたときは、「誰か仲間が助けてくれるでしょう。」そう言って助けようとしなかったのです。

しかしこれで終わったのでは、イエスのたえは何の意味も持ちません。イエスは最後に「あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」（10・36）と問いかけ、正しい答えを選んだ律法の専門家に「行って、あなたも同じようにしなさい。」（10・37）と言われたのです。この「行って、あなたも同じようにしなさい」は、当然わたしたちにも向けられているのです。

現実には、「善いサマリア人」は滅多に現れません。統計上もそうです。日本全体でカトリック信者は100人に1人しかいないのです。車が100台通って、やっと1台巡ってくる確率なのです。だからこそわたしたちカトリック信者は、その「滅多に現れない『善いサマリア人』」であるべきです。

アパートに住んでいても、隣人は誰なのか知らない。そういう時代にわたしたちは生きています。そんな時代にあって、わたしたちは滅多に現れない人、滅多にいない「報いを求めずに手を差し伸べる人」となりましょう。それこそが、聖書を開いて街頭で大声で叫ぶよりも、イエスキリストを確実に告げ知らせる効果的な宣教だと思います。

一人でも多くの人が、わたしの差し伸べる「報いを求めない手」を通して、イエス・キリストを知ることができるよう。そのための力を、このミサの中で願い求めましょう。



年間第 16 主日 (ルカ 10:38-42)

それを取り上げてはならない

「必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」(10・42) 年間第 16 主日 C 年の朗読に選ばれた「マルタとマリア」の物語の最後の場面です。ここに注目して今週の学びを得ることにしましょう。

水曜日の雷は怖かったですね。賄さんの雷が落ちたのかと思いました。怖いだけならまだしも、精密機械に影響が出ました。電話とパソコンです。電話と、ADSL モデムはレンタルなので業者が取り換えに来てくれたことで解決しましたが、パソコン本体はそうはいきませんでした。

どうやらパソコンからインターネットにつながる LAN ケーブルのコネクタがショートしたらしく、ケーブル接続でのインターネットが使えなくなりました。今のところ、Wi-Fi という無線接続でインターネットにつないでいます。場合によっては主任司祭の賽銭会計から新しいノートパソコンを購入して、司祭館備え付けにすることも考えています。

福音朗読に戻りましょう。お手元に年間第 16 主日のパンフレットをお持ちの方は挿絵をご覧ください。お持ちでない方は入り口近くにある小さなパンフレットをご用意ください。ちなみにパンフレットは大きなものに取り換えると言っておりましたが、催促の連絡をしてみると 4 月に入っていた連絡に行き違いがあり、先週いただいた返事では 9 月のパンフレットから大型版に変更してもらえそうです。

パンフレットの挿絵は、第一朗読で読まれた「三人の客をもてなすアブラハムとサラ」が挿絵となっています。昔の人たちは挿絵が聖書を学ぶ助けになっていました。なぜかと言いますと、かつては識字率が非常に低かったので、文字の聖書を理解できる人が少なかったのです。

参考までに、教会を飾っているステンドグラス、ここ田平教会も立派なステンドグラスがはめ込まれていますが、ステンドグラスの本来の目的は教会の装飾ではなく、文字を読めない多くの人に聖書を学ばせる助けとして、教会での授業の教材に使われていたのです。

福音朗読は、姉のマルタがせわしく立ち働いて客であるイエスと弟子たち一行をもてなす場面です。パンフレットの挿絵のように、いろんなものを並べてごちそうしたことでしょう。姉の考えでは、妹のマリアはぼおーっとしてイエスの話を聞くだけで手伝おうとしないのです。なんと気が利かない妹だろうと、姉マルタの目には映ったことでしょう。妹マリアを手伝わせるように、イエスに催促しました。

ところがイエスの反応は違っていました。妹マリアには見どころがある。お姉さんのマルタもそこに気づいてあげなさい。そういう返事でした。

「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」(10・41-42)

ここで一つ、翻訳の問題を取り上げたいと思います。わたしたちが読ん

でいる日本語の聖書、ミサの朗読では新共同訳聖書が読まれています、
「マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」という部分
は、実はかなり踏み込んだ翻訳をしております。今回はできるだけ元の
意味に近い翻訳を知っておいたほうが良いと思います。

新約聖書が書かれたのは本来ギリシャ語です。ということはギリシャ語
の聖書から元の意味に近い翻訳を引き出すのが理想ですが、わたしの勉
強不足でギリシャ語はチンプンカンプンです。英語の翻訳でしたら少し
は分かるので参照しますと、” **Mary has chosen the better part and it
will not be taken from her.**” となっています。この翻訳に沿って日本語
訳を考えると、「マリアはより良い方を選んだ。そしてそれは、彼女から
取り上げられることはないだろう」と読めるでしょう。日本語新共同
訳聖書のかなり踏み込んだ翻訳「マリアは良い方を選んだ。それを取り
上げてはならない」と比べると、説明が必要なことが分かります。

日本語としてはぎこちないですが、「それは彼女から取り上げられるこ
とはないだろう」この解釈に沿って考えてみましょう。妹マリアはイエ
スのもとに座って一心に話を聞いていましたので、イエスの言葉が彼女
の心の中にしっかりと刻まれました。姉のマルタは、イエスの話を聞き
つつ、もてなしにも心を砕いていましたので、イエスの言葉がしっかりと
刻み付けられるところまで至ってなかったかもしれません。

「彼女から取り上げられることはないだろう。」これは未来のことを言
っています。神の言葉がいったん心に深く刻まれたなら、それは、もう
取り上げられることはない。この先どんなことがあっても誰からも取り
上げられることはない。」そういう意味ではないでしょうか。

物語のその後は描かれていません。おそらく、姉マルタの求めに応じて、
マリアはイエスと弟子たち一行をもてなすがわに回ったのかもしれませ
ん。けれども、すでに深く心に刻まれたイエスの言葉は、姉と一緒にも
てなしに忙しく立ち働いても、取り上げられることはないのです。

ここに、イエスがマルタとマリアに求めている思いがあると考えていま
す。わたしたちは、まず神の言葉を心に深く刻む必要があるのです。そ
れからそれぞれの本分を果たしなさいと促します。初めに神の言葉を深
く心に留めるなら、その後どんな仕事に入っても大丈夫。神の言葉は
あなたから取り上げられることはないだろう。ということです。

もしその順番を間違ってしまうと、神の言葉は深く心に刻まれず、いつ
かはこの世の忙しさに紛れて取り上げられてしまうのです。イエスは言
います。「マリアは良い方を選んだ。」効果的に神の言葉を深く心に刻
み、それから生活に入っていく。イエスはこのリズムをわたしたちにも
期待しています。その助けになるのは日曜日のミサです。

わたしたちがどんなに忙しくなってもみ言葉が心の中から取り上げられ
ることのないように、ここに集い、ミサにあずかることを大切にしまし
ょう。周りの人に対しては、「神の言葉が取り上げられてしまうような
生活の組み立て方をしてはいけない」と、はっきり言える人でありまし
ょう。そのための力をミサの中で願いましょう。



年間第 17 主日 (ルカ 11:1-13)

しつように頼めば何でも与える

「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」（11・1）。祈りを教えてくださいと願った弟子たちは最終的に何をいただいたのでしょうか。考えてみたいと思います。

先週書籍販売にパウロ会の修道士（たぶん）が来てくださいましたが、いろいろ売っている中で、祈祷書を買っている人がいてちょっと声をかけたくまりました。案内書に置いてある祈祷書は 400 円で販売しています。あの日 400 円以上の値段が付けてあったとしたら、もったいないなあと思ったのです。声には出しませんでした。少なくともわたしがいる間は、案内書の祈祷書は 400 円にて販売します。

福音朗読に戻しましょう。イエスの弟子たちは「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と願いました。ヨハネの弟子たちが祈りを教わる姿がカッコよかったのかもしれませんが。そしてヨハネがその弟子たちに教えた祈りよりも、もっとカッコいい祈りを授けてもらえる。そう考えたかもしれません。

イエスは弟子の願いに答えて「主の祈り」を教えてくださいました。しかもイエスは、どのように祈るべきかも添えて教えてくださいました。すなわち、「しつように、粘り強く願う」ということです。

わたしは小神学生時代に、この「しつように、粘り強く願う」ことを体当たりで経験したことがあります。中学 3 年生でした。当時神学生は 100 人近くいて、食堂にはテーブルが 15 台も並び、1 つのテーブルに 6 人掛け、7 人掛けしてぎゅうぎゅうになって食事をしていました。

テーブルはすべて縦割りの班でして、学期ごとに班の入れ替えがありました。台ごとに「台長」と呼ばれる最上級生がいました。この台長が思いやりのある人であれば食事は楽しいし、思いやりのない人、意地悪な人の場合は食事は楽しくないので、楽しみの少ない神学校生活で「台長に恵まれますように」というのは誰もが願うことでした。

中学 3 年生の新学期、自分が割り振られたテーブルの台長は「意地悪番長」といった感じの人でした。夕食は 6 時からでしたが、部活などで中学生は遅れて戻ってくることもありました。遅れると必ず台長に遅れた理由を言って、許しが出たら食事の席に着くのですが、その台長はなかなか許してくれず、ずいぶん困らされていたのです。

そんなある日、事件が起こりました。その日の食事に「わかめスープ」が出ていました。焼肉屋さんで出るような「わかめスープ」が、学校給食で使うような大鍋に入れてテーブルに置いてあるのです。この日全員がそろって食事ができたので、無事に食事が始められると思っていたのですが、わたしたちの班にいた中学 1 年生が運悪くワカメが嫌いだったようです。「食べられない」と言い出しました。

台長の顔色が変わり、テーブルは凍り付きました。「なぜ食べられない？お前が食べるまで、この夕食は終わらないからな。」台長は好き

嫌いを決して認めず、何時になっても食事を終わらないと言うのです。そうすると夕食後の自由時間も奪われるし、それ以上に宿題をするための自習時間も無くなってしまいます。

テーブルの仲間たちは誰も「先輩。勘弁してください。無理を言わないでください」そんな助け舟を出してくれる人はいませんでした。もちろんわたしも恐ろしくて言えませんでした。

そのときわたしは一つのことをひらめいたのです。「台長はわかめスープを食べ終わるまでと言っているのだから、後輩の中学1年生が食べるはずのわかめスープが全部無くなれば、台長も無理は言わないだろう。だったらわたしが全部食べてしまおう。」それでわたしは大鍋にいっぱい入ったわかめスープを、どんどんお代わりし始めました。

5杯、7杯、10杯、13杯。15杯。もう腹から吐き出しそうにありましたが、鍋にはワカメは見えなくなりまして、その時ようやく台長がこう吐き捨てたのです。「お前はよっぽどワカメが好きなあ。」そしてその日の夕食をやっと終えることができました。

当時わかめスープが食べられないと泣いていた中学1年生がどうなったかは分かりません。台長として威張り散らしていた先輩は、高校を卒業すると神学校を辞め、ガソリンスタンドに勤めたと聞いています。わたしの思いが先輩に伝わっていたのか、今でも知りたいと思います。

当時の台長は一切の事情を汲んでくれませんでした。しかし、願いを求めなければ事態は動かなかったのも、わたしは恥も外聞も捨て、粘り強く願ったのです。言葉ではなく態度で。そのなりふり構わない態度が台長に届き、渋々ではあっても求めに応じてくれたのだと信じたいのです。意地悪な人間でさえそうであるなら、いつくしみの神が粘り強く願う人間に答えてくれないということがあるのでしょうか。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」(11・9-10) わたしは自分の体験からこう思っています。イエスの言葉は信じる価値がある。しつように、粘り強く願う。イエスが教えた「主の祈り」は、この「しつように、粘り強く願うこと」とセットで与えられたのだと思うのです。

イエスは祈りを教えてくださいと願う弟子たちに、「主の祈り」と「どのように祈るか」をセットでお与えになりました。それは言い換えれば、「必ず聞き入れられる祈り」を与えてくださったということです。

わたしたちは「主の祈り」を、どのように受け止めているのでしょうか。しつように、粘り強く願う祈りとして、また願いが必ずかなう祈りとして受け取りましょう。人々に、「わたしは主の祈りを唱えて与えられた。見出した。開かれた」と証しできる体験を与えていただけるよう、このミサの中で願い求めることにしましょう。



年間第 18 主日 (ルカ 12:13-21)

神の前に豊かになるために

年間第 18 主日 C 年は「愚かな金持ち」のたとえが選ばれました。「神の前に豊かになる生き方」とはどのようなもののでしょうか。わたしたちはどんな生き方をすべきでしょうか。

夏休み中は朝 6 時のミサ後にラジオ体操をしています。「頑張ってきてくれた子供たちには史上最大のプレゼントをあげます」とお知らせしたのが効いたのか、よく頑張ってきて来てくれています。まだ来てない子供たち、一度は来たけれども挫折してしまった子供たち、まだ夏休みは一ヶ月ありますから、どうぞ来てください。「史上最大のプレゼントを確かめたい」とお父さんお母さんをお願いしてみてください。

福音朗読に戻りましょう。金持ちが登場します。畑が豊作だった時、「もっと大きい納屋を作り、もっと穀物や財産をため込む」ことを考えました。自分の持ち物ですからどう使おうが勝手ですが、少なくともこの金持ちの行動は神には「愚か」に見えたということになります。

お金を使えば財布の中身は減りますし、食べ物を消費すれば保管していた倉庫に空きができるでしょう。もろもろの活動で空間ができた時、その欠けたところをどのように満たすか。この差が「愚かな者」か「神の前に豊かな者」かの分かれ目になるのです。

ではわたしたちは何によって自分の欠けたところを満たせばよいのでしょうか。今月旅立っていった一人のシスターを紹介しますので、彼女の生き方を例に考えてみましょう。そのシスターの名前は小林三枝と言って、わたしが小学生のころ、郷里の鯛之浦教会で奉仕しておられてお世話になったお告げのマリア修道会のシスターです。

小林シスターはわたしにとって大恩人のシスターです。生まれたとき助産師に取り上げられた人たちは、その助産師さんを「この世に取り上げてくださった方」として恩を感じることでしょう。そのように、小林シスターは、わたしが司祭職への道を意識していない頃からわたしに声をかけ、司祭職への道に取り上げてくださったのでした。

当時わたしは小学 4 年生くらい、小林シスターは堅信組のけいこを担当していました。当時は一問一答形式でまとめられた「公教要理」という本で学んでいました。先生役の小林シスターが問題を読んで、生徒のわたしたちは答えを繰り返して暗唱するという勉強でした。

記憶力がよかったわたしは、答えを暗唱するだけの勉強が次第に退屈になり、勉強会に行かなくなりました。その時間はカトリックでない友達と小学校のグラウンドで遊び、カトリックの友達の勉強が終わるころに示し合わせて自宅に帰ることを繰り返していました。

堅信組は学期ごとに主任司祭の試験がありました。試験はいつもその場を切り抜け、のちに長崎の神学校に入学しそこで堅信式を受けます。小林シスターは勉強会に来ないわたしをずっと心配していたはずですが。もしかしたら、ずっとわたしのために祈っていたかもしれません。旅立ってし

まい、もはや確認できませんが、まじめに勉強に来ている子供たちよりも、ある意味、心の中で気にかけてもらっていたかもしれないのです。

堅信組に加わるころ、けいこに来ないわたしに小林シスターは「侍者」をさせました。そば近くで司祭がミサをささげているしぐさを見て、司祭へのあこがれを持つように願ったのでしょう。侍者デビューするまで小林シスターは付きっきりでミサの時の動作を教え、指導してくださいました。

6年生になると身長が伸びて、小学生用の侍者服が入らなくなり、中学生用の侍者服を着なければならなくなりました。小林シスターはこの中学生用の侍者服をわたしに着付けさせながらこう言ったのです。「小学生でこの中学生用侍者服を着た子供は誰もいない。だからあなたは、神学校に行きなさい。」長崎の学校は丸刈りにしなくてもよいとも聞いていましたので、これ幸いと思い「神学校に行ってみよう」と思ったのです。

付きっきりで面倒を見てくれた小林シスターのおかげもあり、わたしは長崎の神学校に入り、何とか司祭になりました。前任地の浜串教会に赴任した時です。偶然にも小林シスターの妹さんが、山口さんという人と結婚して住んでいました。山口さんから、姉小林シスターは歳を重ね、静かに晩年を過ごしておられると聞き、思いきって訪ねることにしました。

訪ねてみてびっくりしました。小林シスターは認知症を患い、会話の途中何度も「中田神父様は、いまどちらの教会ですか？そうですか。浜串教会でしたか」「中田神父様は、いまどちらの教会ですか？そうですか。浜串教会でしたか」と繰り返しているのです。

小林シスターは、間違いなくわたしを司祭職への道に導こうと、人々の中から取り上げてくださった恩人です。少しは自慢しても、誇ってもいいはずなのに、小林シスターは記憶を失い、ご自分がわたしを司祭職の舞台に上げてくださった恩人であると思い出せなくなっていたのです。

記憶が欠けてしまい、記憶を満たそうと繰り返しわたしに尋ねますが、満たされません。しかしシスターを満たしてくださる方はほかにおられるのです。聖書の次の言葉を思い出しました。「右の手のすることを左の手に知らせてはならない。」（マタイ 6・3）徹底的に、わたしのためにしてくれた施しを「隠れた施し」にして天国に旅立って行った。小林シスターの欠けたところは、神がすべて満たして下さっているはずです。

わたしはこのシスターの生き方を振り返りながら、自分の欠けたところを神に満たしてもらい生き方は尊いと、改めて思いました。この世の活動はすべて、自分の持ち物を使い、減らしながらの生活ですから、何かが欠けていきます。その欠けたところを、この世のもので満たすのではなく、神に満たしてもらい生き方が、神の前に豊かな生き方です。

心と体の欠けた場所がある。欠けていると感じる。その時こそ、神に欠けたところを満たしてもらいまたとないチャンスです。何によって満たそうとするかを誤ることなく、神の前に豊かになる道を選びましょう。そのための知恵と照らしをこのミサで願ひましょう。



年間第 19 主日 (ルカ 12:32-48)

主人は帯を締めて、給仕してくださる

「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。」(12・35) イエスは今週朗読に選ばれたたとえ話の中で、主がどのようなお方であるか、教えようとしておられると考えました。どれほど偉大で、どれほど謙虚な方であるかを知り、誠実にお仕えしようと思いを新たにしたいのです。

報告があります。先週のナイターソフトです。試合そのものは 11 対 12 で惜しくも負けたのですが、11 点のうちの 1 点を、わたし一人でもぎ取りました。これでようやく、万年セカンドゴロアウトも卒業です。残り 2 試合あると思いますが、あとは全部セカンドゴロで構いません。

こちらに赴任してから、教会台帳整理をぼちぼち続けています。なかでも洗礼台帳については、最新の洗礼の記録からさかのぼって、全員の名前をパソコン入力することにしました。パソコンの力を借りれば、どんなに古い時代の人でも、瞬時に探し出して洗礼名を知ることができます。最終的には洗礼台帳に本来記載しておくべきもの、堅信とか結婚とか死亡とか、そうした情報もすべて盛り込みたいと思っております。

洗礼の記録を入力中、驚きの事実が明らかになりました。いちばん新しい洗礼の記録は、2016 年 7 月 17 日に授けた男の子で、6137 番です。これが正しければ、田平教会で 6100 人以上が、洗礼を受けたはずですが、ところが実際には、6000 人ちょっとしか受けていないと分かりました。

最新の洗礼の記録からさかのぼって入力をして 1650 人過ぎたあたりでのことです。台帳の番号が、4491 番 4490 番となって、さらに 1 つ手前の番号が、4389 番となっていたのです。何度も確認しました。どうやら当時の主任神父様が番号を 100 人分すっ飛ばしたようなのです。

台帳記録は当然若い番号から記録します。4388 番、4389 番と記録していたのに、次の番号はなぜか 4490 番でした。その後番号はずれたまま、現在の 6137 番へと受け継がれました。記録上 4400 番台は 4490 番から 10 人しかいないのです。こんな説教をしているので、当時の主任神父様はきっと天国でくしゃみをしていることでしょう。

福音朗読に戻りましょう。「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。」この戒めをよく教えてくれた経験は、大神学院生活の中にあっただと思っています。大神学院では年に一度、神学院祭というお祝いがありました。卒業した先輩司祭がお祝いにたくさんやってきて、この学び舎での思い出を語り合い、後輩神学生を励ましてくれる日でした。

神学院祭の大きな柱は「記念ミサ」と「祝賀会」で、記念ミサでは 25 周年の司祭が、司教様方がずらりと並ぶ記念ミサの中で説教をします。わたしも、恐れ多いとは思いましたが、10 周年の時には記念のあいさつをさせてもらいました。

もう一つの柱、祝賀会では、これまた年に一度しかお目にかかれない場面が待っています。大神学院の最上級生である助祭様が、卒業生の先輩司祭たちと後輩の大神学生たちの給仕をしてくださるのです。まさ

に今週の福音朗読の通り、「腰に帯を締め」（12・35）「戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにして」（12・36）給仕してください。

1年365日のうち、この日だけは、最上級生の助祭様に、「お代わり」「飲み物を持ってきて」と要望することができるのです。同じ大神学生であっても叙階の秘跡を受けている最上級生に何かを命じるなんて恐れ多いことですが、この日だけは目一杯こき使うのでした。

わたしたち後輩が「お代わり」「ワインついで」と助祭様に注文すると、中には「覚えてろよ」という人もいました。ただ、この最上級生が給仕をする経験には、大切な意味があったのだと後で知るのでした。

その一つは、自分たちも後に最上級生になり、卒業生や後輩たちが「おい、お代わり」「おい、ワインついで」と言われたらすぐに給仕をしなければならないということです。わたしも最上級生になり、叙階の秘跡を受けた助祭になって、神学院祭の祝賀会で腰に帯を締め、給仕をしました。後輩たちの無茶な要求に、「自分たちも同じことをしたんだな」と思い返すことになります。

もう一つは、目の前にいる卒業生、それぞれの教区で活躍している先輩司祭たちも、同じように腰に帯を締め、呼ばれればすぐに給仕をした人たちなんだとしみじみ思ったのです。その中から、ある人は小教区の主任司祭になり、ある人は教区司教になり、またある人は大司教や枢機卿になっていったのだなあと、しみじみ思ったのです。

「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。」仕える僕の心得ですが、神学生や司祭にとっては、のちに司教になり、大司教になり、枢機卿になる方々すべての心得なのです。

わたしたちが目を覚ましている僕として本当に用意していなければならない主人はイエス・キリストです。イエスは目を覚ましているようにと要求するだけでなく、ご自身が目を覚ましている僕であり、わたしたちのもとにおいでになれば「帯を締めて、僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」（12・37）お方なのです。

命令であれば、人をあごで使うような主人にも目覚めて用意しておくこともあるでしょう。しかしわたしたちが目覚めて用意しておく主人は、わたしたち以上に柔和で謙遜な主人、わたしたちのために喜んで給仕してくださる主人なのです。わたしたちは喜んで、目を覚ましている僕となる必要があるのではないのでしょうか。

田平教会に赴任して、教会台帳を整理しながら、何とまあ大雑把な管理だろうかと最初は思ったのですが、今週の福音を学びながら思い返しました。わたしは、いつイエス・キリストに田平教会の台帳提出を求められても、いつでも提出できるように腰に帯を締めて、目を覚まして用意しているようにこの小教区に招かれたのだと思います。必ず台帳整理を成し遂げて、「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕」（12・37）になりたいと思います。



年間第 20 主日 (ルカ 12:49-53)

イエスの投じた火を燃やし続ける

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」 (12・49)
「火」は、2つの働きをもたらします。わたしたちの生活にイエスの投げ込む「火」が働き続けているか、振り返ることにしましょう。

赴任して4ヶ月、馴れ合いが生じてきたのか、子供たちの中には注意をしないとイケないかなあと感じる子供が出てきました。念のため言っておきますが、わたしはもともと気が短いので、我慢ならないと思えば説教中でも降りて行って厳しく接することもあり得ます。

我慢ならない場合は飛び蹴りとか頭突きの可能性があります。用心しておいてください。頭突きはわたしの頭が痛いので、おしゃべりや手まぜをしている者同士の頭を思いきり衝突させることもあると思います。

いきなりはしません。態度が悪くて困るなあという子には、前もって警告をします。警告を受けた後でも反省する様子がなければそれはもう飛び蹴りです。仮にそういうことが起こったとしても、「さんざん警告を受けてのことだろうから」と受け止めていただきたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。イエスは「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである」と仰います。「火」は2つの働きを持っていると思います。イエスの時代、電気がなかったことを考えると、火の働きの1つめは、「闇に光を照らす」という働きだったと思います。

暗闇は、違いがあるもの同士を区別できない世界です。正しい人と不正な人、正しい思いと不正な思いなど、暗闇の中でうごめくものがどのような人かどのような思いなのか、判断することは困難です。

そこに火が投げ込まれると、世界は変わってきます。暗闇は照らされ、正しい人は光のあるほうに近づいてきますが、不正な人は光を嫌い、光から遠ざかるのです。正しい思いを持つ人も光のほうに近づきますが、不正な思いをいだく人は光から離れるのです。

イエスが地上に投じる火も、暗闇の中で区別ができないものをはっきり区別します。それはまさに「分裂をもたらす火」です。一家に五人いて、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれる、そのような火です。たとえ家族の中であっても、神の望みにかなう人と神の望みに反する人はイエスが投じる火によって分裂してしまいます。分裂が明らかになって、自分がイエスの投じた火に近づこうとしているか避けようとしているかを考えます。イエスの火を避けようとしていたなら考えを改め、光に近づこうとすればよいのです。

「火」のもう1つの働きは、物を燃やすということです。火はそこに何か燃えるものがなければ燃え続けることはできません。燃えるものが尽きてしまえば、火はその場にとどまっていられないのです。イエスが投じた火もきっとそうです。何かに燃え移ることで働き続けるのです。

ここでさらに考える必要があります。人間が火を放つとき、何かを焼き尽くそうとして火を放つ場合と、火を保ち続けるために燃え移る材

料を差し出す場合とがあります。農業で焼き畑をする場合、一定の面積の草を焼き尽くそうと火を放っています。ところが焚き火などをしている場合は、薪を燃やし尽くそうとして火に投げ込んでいるわけではありません。火を維持し続けるために材料を提供しているのです。

すると、イエスが投じる火も、燃え続けるうちにものの本質や結果が見えてきます。わたしの中にある思いが、焼き尽くされてしまうような思いであれば、イエスの火が投じられても、思いを焼き尽くした後に火は残らないでしょう。

しかし、わたしの中にある思いが、イエスが地上に投じる火を燃やし続けるために差し出される道具であるなら、イエスが投じた火はいつまでも燃え続け、火の働きは続くのではないのでしょうか。

イエスはすでに、地上に火を投ずるために来ました。イエスが投じた火は、どこで燃えているのでしょうか。焼き尽くされてしまうこの世の思いに火が燃え移って、もはやイエスの火は消えてしまったのでしょうか。わたしたちの中の何人かは、地上に投じられたイエスの火を燃やし続けるために差し出された薪であってほしいのです。

わたしも、イエスの思いをこの地上で燃え上がらせる薪でありたいと思います。ひょっとしたら、わたし自身は燃え尽きてしまうかもしれませんが、それでも、イエスがこの世に投じた火を燃やし続けるためなら悔いはありません。

振り返って、わたしたちの生活にイエスの投じた火は燃えているのでしょうか。イエスの火がわたしたちの心を照らし、神の望みにかなった思いとそうでない思いを分け、神の望みにかなう思いはイエスの火によっていよいよ燃え盛り、神の望みに反する思いは燃やし尽くされ、わたしたちの生活は人々にとって山の上にある町、家の中すべてを照らす光となっているのでしょうか。

「火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」（12・49）「どんなに願っていることか」というイエスの思いを、わたしたちは十分に知ることができません。しかしイエスの火がこの世に燃え移るために、ご自身をおささげし、どんなに苦しまれたかはわかります。わたしたちの中に火が燃え移るようにと、ご自身を燃やし尽くして差し出された火を、受け取ってくれる人が現れるのを願っているのです。

わたしの生き方が、家族の生き方が、イエスの投じた火を燃やし続けるのに差し出された道具となって、イエスの火を世に示すよう努力しましょう。イエスの火によって燃え尽きるはかないものを追い求めるのではなく、イエスの火を燃やし続ける価値あるものに目を留めましょう。

わたしたちがイエスの投じた火を燃やし続ける生活をするなら、火によって初めにもたらされる対立や分裂の先に、真の平和を手に入れることになります。



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

力ある方が、わたしに偉大なことをなさいました

聖母の被昇天の祭日を迎えました。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」(1・45) 天に上げられたマリアを、エリサベトと同じ言葉で今日わたしたちもたたえることにしましょう。

初めてマリア様の御像の塗り直しを間近で見学しました。わたしは中田ザビエル工房という親戚を持っているにもかかわらず図工も美術も「2」でしたので、出来上がりには興味はあっても途中経過はあまり興味がなかったのです。けれども都合五日間、一つ一つの作業を見ているうちにだんだん興味が覚え、これはやりがいのある仕事だなあと思いました。

聖母像は何種類かの色を使っています。わたしは、それぞれの色は全く関連なく塗り替えられるものだと思っていましたが、そうではないことを今回知りました。これまでの汚れを落とした後、ザビエル工房の中田さんは聖母像全体を白く塗り始めたのです。ベースとなる色、下地の色を塗る作業でした。

平日に始まった作業でしたので、平日に朝ミサに来てラジオ体操をする子供たちには、日々変化していく聖母像の様子を知ってもらおうと、聖母像の前に集めて観察を続けさせました。「マリア様の御像を、専門家をお願いして塗り直しをしてもらっています。昨日のマリア様と、今朝のマリア様は違っているはずです。どこが違っていますか？」

水色の部分も含め、全体が白く塗られたのですから、さすがに気づくでしょうと思いましたが、案外気づかないものです。「分からない」と言われました。ちょっとショックでしたが、「水色の帯も、足を置いている岩の土台も、すべて白く塗られているでしょう。このあとそれぞれの色を重ねて塗っていくそうです。作業が進んだ様子を、明日も見に来なさい」と促してこの日は帰しました。

幸いに、日一日と変化して作業が完成していく様子を見ることができた子供たちもいました。教会正面の聖母像は、今は立派な姿に生まれ変わっています。この聖母像の塗り替えを観察しながら、今年の聖母被昇天の説教のアイディアが浮かびました。最終的に、いくつかの色が塗られて立派な聖母像になるわけですが、その像も最初は下地の色となる「白」を塗った上で、色を重ねるということです。

つまりこういうことです。新しくされた聖母像は、マリアの一生に思いを向けさせていると思ったのです。マリアは自分を神の前に真っ白な状態で差し出し、神がその上に御業をおこなって、色が重ねられた。そのように考えてみたのです。

もし聖母像の塗り替えで、全体を白で塗り上げてから色を重ねることが無駄な作業であるなら、塗料も無駄になるし作業も一日無駄に費やすことになります。決してそうではないのです。聖母像は、何かの色が

重ねられる前に、いったん真っ白にされて、そのおかげで素晴らしい色を重ねていくことができるのです。

実際のマリアの一生も、そうなのではないでしょうか。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」(1・38) 神のお告げにこのように答えたマリアは、これからどのような神の御業が自分の上に起こるのか全く知りませんでした、すべてを差し出しました。

神はマリアの上に、心を剣で刺し貫かれる体験、奇跡を見る体験、さまざまな御業を成し遂げられました。それはひとことで言えば、「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいました」(1・49)ここに表されています。

一度真っ白に塗られた聖母像に、巧みにさまざまな色が塗り重ねられ、御像は見事に修復されました。マリアの生涯もそうです。最後には、目には見えない御業、天に上げられるという御業がマリアの生涯に塗り重ねられました。神がこれからなさろうとする御業にすっかり自分を差し出したので、天に上げられるという栄冠も含めて、マリアの生涯は完成されたのです。

マリアはわたしたちの手本となってくださいました。わたしたちの人生は神の御業によって色鮮やかにされていきます。そのためには、わたしたちは自分の人生をすっかり神に差し出す必要があるのです。「ここは神に協力できるけれどもここは譲れません。ご勘弁ください」こういう態度ではなく、「わたしの上にどのような御業が行われようとも、わたしはすっかりあなたに委ねます。」こんな覚悟を、聖母の取り次ぎによって願いたいのです。

「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいました」このように神をたたえるためには、まず自分自身をすっかり神に委ねる必要があります。「主がおっしゃったことは必ず実現する」そう信じて、全面的に協力する必要があると思います。

わたしたちが機会あるごとに自分をすっかり差し出すとき、「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいました」このマリアの賛美が実現するのだと思います。わたしたちは天に上げられたマリアを鏡に、これから何度も「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいました」という体験を積みしたいと思います。

その上さらに、わたしたちの上に実現した神の御業を見て、キリスト教に触れたことのない人が「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」と神を賛美することにつながりますように。わたしたちの賛美が、わたしたちの教えを知らない人の賛美につながりますように。被昇天の聖母の取り次ぎを願いましょう。



年間第 21 主日 (ルカ 13:22-30)

どこで、狭い戸口から入ろうと努力しますか

「狭い戸口から入るように努めなさい。」(13・24) イエスの招きは、「できればそうしなさい」ではなく、狭い戸口の先にしか、主人と喜びを共にすることはできないという強い招きです。自分のこととして受け止めるきっかけを探しましょう。

リオデジャネイロオリンピックではたくさんの素晴らしい試合を見ることができました。中でも女子レスリングは感動を味わいました。惜しくも銀メダルで終わった選手は、このオリンピック決勝で敗れるまで、公式戦 208 連勝というとてつもない記録を打ち立てていたそうです。たとえ銀でも、メダルの重みが違うと思いました。

これは、今週の朗読でイエスが語っておられる「狭い戸口」に通じる体験かもしれません。「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」たとえば 200 連勝してみないとわからない難しさがあるわけです。あるいは年間 60 本のホームランを打つてみないと見えない世界があるのだと思います。それぞれの立場で体験できる「狭い戸口」の先に神が用意しているものを体験してみないことには、わたしたちは軽々しく口にできないのだと思います。

苦い思い出があります。初めての教会で数年が経ったときでした。わたしはその教会で聖歌の奉仕をしてくださっている聖歌隊の練習担当でしたが、この方々に生意気なことを言ってしまう、主任神父さまはじめ、先輩の助任神父さまにも迷惑をかけたのでした。聖歌隊はいつになっても新しいメンバーが加わらず、このままでは先細りしていくばかりでした。そこで奮起を促そうと思い、結論だけ申しますと「わたしはいつまでも皆さんの子守をするつもりはない」と言ったのです。

この発言が炎上しまして聖歌隊から猛抗議を受け、「わたしたちはもうお手伝いしたくありません。指導してくれる司祭を変えてください」とそれはもう大変なことになりました。結局わたしは責任を取って聖歌隊の指導を外され、先輩の助任司祭が指導をすることになります。

この時主任司祭はわたしにこう言って反省を促しました。「あのなあ。60 歳にならないと言えないこともあるんだぞ。言っていることがどれだけ重いことか、考えてものを言いなさい。」最初で最後、当時の主任司祭から叱られた体験でした。

今になって考えると、主任司祭が言いたかったのは「お前が主任司祭を 25 年くらい務めてみないとわからないこともあるんだぞ」そういうことだったと思います。確かに、主任司祭を 25 年務めるころが 60 歳になるころです。そこまでの経験を踏まえてものを言う場合と、経験もないのに言うのとでは、言葉の重みは全く違ってきます。主任司祭の一言は、「狭い戸口」を通り抜けた司祭の、重みのある言葉でした。

どんな時代にも、親の世代よりも子供の世代が高い教育を受けるものです。すると子供は親よりも広い知識を基にして意見することになり

ます。ですが高い教育を受けているだけでは「狭い戸口」を通った人の知恵や言葉にはかなわないのではないのでしょうか。

わたしは母親から、「世の中に絶対ということはない」と教えられました。母は中学までしか教育を受けていません。大学を卒業し、さらに高度な専門教育を受けたわたしとは比較になりません。しかし、「世の中に絶対ということはない」という教えは、厳しい社会をくぐった人だからこそ言える言葉であり、わたしにはとてもありがたい言葉でした。

「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」（13・26）たとえ話の中で家の主人から締め出しを食らった者たちが主人に懸命に食い下がっています。主人はこの人たちの本性を見抜いています。調子のよい時だけ顔を出し、日ごろは主人の思いに背を向けて生きてきたのです。

「お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」（13・27）彼らは「狭い戸口」を避けて日々を送ってきたのです。いざという時に、この「狭い戸口から入る」努力をしたかどうか問われるのです。

たとえばそれは、日々の祈りや、聖書に親しむ努力などです。「ご一緒に祈りをしましたし、聖書講座にも行きました。」それはそうかもしれないかもしれませんが、祈りをしたことがある、聖書講座に行ったことがあるだけでは、「狭い戸口から入る」努力とは言えないのです。

今日も明日も、欠かさずに朝夕祈る。これは並大抵のことではありません。でも誰の目にも止まらないかもしれません。しかし神は、「狭い戸口から入ろうと努力する」この人々を見ておられるのです。

新約聖書は、480 ページの書物です。1 日 1 ページ読むなら、1 年ちょっとで読み終わります。1 日 2 ページ読む日があれば、1 年で読み終わるのです。朝晩の祈りもしない、食前食後の祈りもしない。そんな家庭の皆さんには、食事の前に聖書を 1 ページ読むことを勧めます。

食事は 365 日欠かさずするでしょうから、それに合わせて聖書を 1 ページ読むなら、その家の人々は「狭い戸口から入る努力をする人」です。その家の人々は、「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」と弁解じみたことを言わなくとも、必ず主人の宴に招かれることでしょう。

わたしたちは必ず、「狭い戸口から入る」ことを求められます。狭い戸口の先には、招いてくれた主人と喜びを共にするのです。わたしはどこで、狭い戸口から入ろうと努力するのでしょうか。このミサの間に考えることにしましょう。



年間第 22 主日 (ルカ 14:7-14)

イエスが指し示すいのちの方角に向き直る

「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」(14・11) 神様は日本にいるわたしたちに生き方の模範、道しるべを示してくださいました。ユスト高山右近です。彼の生き方を通して、今週の福音を身近なものとしましょう。

雨がなかなか降らない夏でした。朝ミサに続けてラジオ体操をしていて、たった5分の体操で筋肉痛です。皆さんにもらった湿布が大いに役立っています。6時半から5分間だけ雨が降ってくればラジオ体操を休めるのになあと思っているのはわたしだけでしょいか。

過ぎた週にお休みをいただいて、初めは五島に行ってきました。実家に顔を見せるのと、期日前投票以来の釣りをするためです。魚も油断していたようで、案外簡単にマダイが釣れました。天然マダイです。余談ですが、天然マダイと養殖マダイは鼻の孔を見れば区別がつかます。

広島カープにマジックが点灯しました。いよいよこの日が来ました。問題は、パリーグの相手球団です。パリーグは首位と2位の差がほとんどないので順位の入れ替わりもあるかもしれません。広島と福岡ならば、10月27日(木)に日本シリーズを観に行く予定です。

ですが現在の首位が本当に上がってくるのか疑わしくなってきました。パリーグがどうであれ、セリーグは違います。2位のどこかのチームとこの説教を準備した時点で8ゲーム開いています。今年はぜひ、25年ぶりの奇跡をもたらしてほしいものだと思います。

さて、福音を学ぶために高山右近に目を向けてみたいと思います。日本の教会の長年の願いであった高山右近の列福が、来年2月7日に大阪大司教区で行われることになりました。高山右近を現代人に投げかける意義と価値があると、教会は認めたのです。それはつまり神様もそう思っておられるということです。

ユスト高山右近(以下右近)が生きた16~17世紀初頭は、長く続いた戦乱がようやく収束して国が統一に向かう時代です。人びとは、知恵と才覚さえあれば、誰でも目に見える繁栄や権力、名誉が手に入るという夢をもてました。その気になれば、上を目指せる時代だったのです。

そのような時代に右近はキリスト教の信仰に出会いました。右近は、上を目指す戦国武将たちの世界に生まれ育ったのですが、社会の中で認められる富や権力や名誉が、実ははかない、一時的なものに過ぎないことを見抜きました。右近は、実力派の大名と目される人物でしたが、絶えず上を求める競争から離れて、人間を真に幸福にする信仰の道をあえて選び取ったのです。上を目指す生き方から、あえてへりくだる道を選び取りました。はた目には、右近の生き方は「負け組」と映ったでしょう。

右近は、人の価値は才能や知識、能率・効率、業績によるのではなく、無条件に神から愛されている事実によることを、イエス・キリストの福音から学び取ったのです。実際の右近の生涯は試練の連続であり、追放に

追放を重ねる生活を余儀なくされました。地位も名誉も失い、流浪の生活が続き、ついに祖国を追われても、右近は神だけに愛される幸せを生き抜きます。

現代は相対的価値観に支配され、信念を貫いて生きることが困難な時代です。この現代に向けて右近は、どのような状況に置かれても、神と人への愛を選びの基準にする道を示しました。右近は、おれることなく一つのこと「福音に耳を傾け、神に従う」という生き方を選び続けたのです。

右近の列福の意義をより深く理解すると、日本の教会は、右近があかしたイエス・キリストの福音が確かに信じる価値があり、現代社会に大きな光をもたらすことを力強く訴えていけるはずです。高山右近は、「へりくだる者は高められる」（14・11）の鏡です。誰もが上を目指し、周りを蹴落としてでも上り詰めようとした時代に、イエスが示した生き方を輝かせたのです。

「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」真っ先にイエスの生き方が、ここに示されています。イエスの最後の場面を思い出しましょう。イエスは十字架を背負い、三度倒れました。背負う必要のない十字架、人間が背負うべき罪を背負って、三度ひれ伏したのです。誰にもひれ伏す必要のない方が、みずからへりくだったのです。

そのいちばん低くされたイエスを、父なる神は高めてくださいました。復活し、天に昇って、へりくだる者に用意されている栄光を示してくださいました。イエスは十字架を背負い、繰り返しお倒れになる中で、「貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人」（14・13）を招きました。イエスが担う十字架を代わってあげられない人、お返しのできない人を招いたのです。

多くの人がイエスの姿に失望し、肩を落とす中、イエスの最期に輝きを見た人もいました。百人隊長です。「『本当に、この人は正しい人だった』と言って、神を賛美した。」（ルカ 23・47）「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」（フィリピ 2・8）イエスの生き方の中に輝きを見つけ、百人隊長は聖書に登場する人物となりました。

教会は再び高山右近に光を当てて、へりくだる者の生き方がイエス・キリストと出会うこと、降りて、仕えて生きる右近は今も確かないのちの方角を指し示していると証言しています。わたしたちも高山右近の列福をまたとない機会として、右近の「降りて、仕える生き方」に倣い、現代社会にいのちの方角はこちらですと指し示しましょう。

イエス・キリストが指し示す同じ方向を指さして初めて、わたしたちはキリスト者と呼べるのではないのでしょうか。



年間第 23 主日 (ルカ 14:25-33)

イエスの弟子は、何かをより少なく愛する

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」(14・26) 弟子の条件として示されたこの招きは一瞬ぎょっとするものです。誤解を解いてから、今週の学びを得たいと思います。

ようやく日曜日の「聖書と典礼」がすべて大判になりました。これなら多くの人が手にとって利用してくれるでしょう。これからは「字が小さいから使わない」とは言えなくなりました。わたしなんか目をつぶってでも読めます。この取り組みが、典礼の奉仕により多くの人を参加させるきっかけになればと思います。

しかし費用の負担は頭の痛いところです。3ヶ月に1回請求書が来ます。これまでの小型版での請求が47500円でしたから、一気に7万円以上になると思います。50円のお賽銭を入れている人はぜひ・・・何を言いたいかは汲み取ってください。

ところでお気づきかと思いますが、聖書と典礼の朗読聖書にはすべて振り仮名が振られています。これは、「わたしは漢字が苦手で、小さい文字は読めません」と言って典礼奉仕を断らないための予防線です。

ミサの様子を見ていて、「この人ずっと聖書を読んでいるなあ」と思うことがあります。頼みづらくて、同じ人がずっと引き受けているのだと思いますが、これからはぜひ「聖書と典礼は大判になったし、神父さんもより多くの方が典礼当番をしてほしいと言っているから、引き受けてください」といろんな人に声かけてください。お願いします。

福音朗読に戻りましょう。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」(14・26)「憎む」という言葉がどうしても引っかかると思います。この「憎む」を誤解しないで読む必要があります。

イエスが活動した地域で使われていた言葉は、アラム語と言ってヘブライ語の系統の言葉でした。日本語では「憎む」と訳されていますが、使われていた言葉の特徴を踏まえて考える必要があります。すると、次のようなことが考えられるそうです。

(a) ヘブライ語には比較級がないため、「より少なく愛する」と言う代わりに「憎む」を使うそうです。すると意味は「より少なく愛する」となります。(b) ヘブライ語の「憎む」には「放棄する」とか「脇に置く」の意味があるそうです。両方を考え合わせると、家族や自分の命のために弟子の覚悟が鈍るようなことがあってはならないとの呼びかけととることができます。

「より少なく愛する」という解釈を取るなら、「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえ

ない」(14・27)という招きは、はるかかなたの理想ではなく、生活の身近な場所で実行できる招きとなってきます。家族、自分の命、自分の持ち物など、身近な場所で「イエスの弟子としてついていくために、より少なく愛する」という生き方は可能ではないでしょうか。

同じ時間に、いくつかの用事が重なれば、どれかを優先し、どれかを後回しにしなければなりません。その時「自分の十字架を背負ってついて来る者」となるために、より少なく愛するものが見えてきます。わたしたちは、今の生活の中で、何かをより少なく愛するようにすることで、「自分の十字架を背負ってついて来る者」となるのです。

9月4日、バチカンでマザー・テレサが列聖されます。2003年に列福された時も、死後5年という慣例を飛び越えて列福調査が始まり驚きましたが、今回の列聖も異例の早さでした。わたしが説明するまでもないですが、マザー・テレサはインドのコルカタで死にゆく人々のために生涯をささげ、希望のない人に希望を与えたのでした。

彼女の生き方には、イエスの弟子としての覚悟がすべて込められていました。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」彼女は晩年健康を害してしまいましたが、自分の命よりも見捨てられた人、誰も頼る者のない人を優先したのです。

彼女の有名な言葉があります。「どんな小さいことであっても、大いなる愛を込めておこなうことは、人に喜びを与えます。そして人の心に平和をもたらします。何をするかが問題ではなく、どれほどの愛をそこへ注ぎ込むことができるか。それが重要なのです。」わたしたちはマザー・テレサの言葉に倣って生きるなら、どこにいてもイエスの弟子であり、どんな生き方でも「自分の十字架を背負ってついて来る者」となれるのです。

イエスの弟子として生きるためには、どうしても何かをより少なく愛する必要が出てきます。わたしは、何をより少なく愛してイエスの弟子としての覚悟を示すことができるでしょうか。「まず腰をすえて」考えてみることにしましょう。



年間第 24 主日 (ルカ 15:1-32)

羊を見出した羊飼いと喜びを共にする

年間第 24 主日に選ばれたルカ 15 章は福音記者が最も伝えたい神のいつくしみとあわれみの姿です。「見失った羊」のたとえ、「無くした銀貨」のたとえ、「放蕩息子」のたとえいずれも味わい深い朗読ですが、その中で「見失った羊」のたとえについて取り上げてみたいと思います。

わたしは説教のはじめ、この一週間で起こったことに触れておりますが、どこから話そうかと思うほどこの一週間話したいことがありました。広島カープは優勝（目前）ですし、この前のナイターソフトボールも聞いてちょうだいという気分です。

でも、広島カープからでしょうか。12 球団で最も優勝から遠ざかっていましたが、とうとう優勝しました。プロ野球の話題ではカープファンのわたしはいつも「まないたの鯉」のような心境でしたが、今年はすべてのうっ憤を晴らしてくれました。応援し続けたかいがありました。

もう一つ、先週のナイターソフトもうれしい勝利でした。チームの投打がかみ合って 5 回コールド勝ちしたのですが、その中でわたしは 3 打数 3 安打、1 本は火の出るような 2 塁打をかつ飛ばしました。その晩は司祭館に戻っても火の出るようなヒットの感触が残ってしまして、自分へのご褒美に焼酎のロックを作ったのにいつの間にか手の中でお湯割りに変わってしまいました。ちょっと言いすぎました。ごめんなさい。

さて福音朗読ですが、今年は「見失った羊」のたとえを取り上げてみたいと思います。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。」(15・4) 日常生活で持ち物がなくなったり、割れてしまっ捨てたり、期限が切れて処分したりする生活をしていると、百匹の羊のうち一匹を見失って、九十九匹を野原に残して捜し回るといのはリスクが大きすぎるように思います。

野原に残した九十九匹は、羊飼いがその場を離れば守ってくれる人は誰もいないわけです。それはそれで危険だと思います。もちろん見失った一匹も、主人に見つけてもらうまで命を危険にさらしているのですが、羊の数から言えば、守るべきは九十九匹ではないかと思うのです。

しかし神のなさり方は人間の理解をしばしば超えます。神は常識を覆してでも「見失ったもの」を捜す方なのです。イエスが語ったのはたとえ話ですが、言いたいのは神が人間に対してどのように思っているかです。羊飼いが羊を一匹でも失いたくないと思い、捜し回るのであれば、まして神は、人間を一人でも失いたくないとの思いで捜し回るのでした。

もし羊飼いが、本来とどまっているべき場所から離れてしまった羊を気に留めず、声もかけず捜し回らなかったとしたら、その羊の運命はどうなるのでしょうか。きっと生きていくことはできないでしょう。それはわたしたち人間も同じことです。

わたしたちは何度も罪を犯し、本来いるべき神との親しさから離れ

ます。罪を犯したわたしたちをもし神が気に留めず、声もかけず捜し回らなかったとしたら、わたしたちに今があるのでしょうか。罪を犯した人間は自分の力では罪を赦して神のもとに立ち帰ることはできないのですから、わたしたちはとっくに死んでいたでしょう。

「見失った羊」のたとえを「放蕩息子」のたとえと読み比べながら考えると、もう一つ呼びかけがあるかもしれません。野原に残された九十九匹は、自分たちが羊飼いのもとにいただけでも有り難いことなのだと忘れてはいけないということです。自分たちが羊飼いに守られているのは当然で、水を飲ませてもらい、牧草を食べさせてもらうのは当然だと思っているなら、それは思い違いというものです。

同じように、父なる神のもとにとどまり、そこから一步も離れたことがないという自負がある人は、神の保護のもとに置かれるのは当然であってわたしを養ってくださるのも当然だと言い張るなら、それは思い違いではないでしょうか。父なる神のもとにとどまっていると思う人も、常に感謝の気持ちを忘れてはならないのです。そして仮に本来の場所から離れてしまった人がいても、その人を裁いたり見下したりすることがあってはならないのです。

わたしは週に一度、修道院にミサをしに行きますが、その日は修道院のお世話で夕食をいただけてきます。食事が用意される部屋にはジグソーパズルで作成された大聖堂の絵が飾られています。見事だなあと思うと同時に、このパズルのピースが一つ欠けていたらどういう扱いになるだろうかと考えたのです。

わたしが製作者であったら、どんなに目立たないワンピースであっても、「これでは飾れない」と思うでしょう。置かれるべき場所にすべて置かれて完成だと思えますから、99%問題なくても飾らないと思います。たった一枚のピースがなくて、残りのすべてのピースが埋められていても、製作者にとっては受け入れられないように思うのです。

「見失った羊」のたとえも同じかもしれません。羊飼いにあって、見失った一匹の羊は、羊飼いの日常という一枚の絵を完成させるために、無くてはならないもののなのです。残りの九十九匹も、見失った一匹が戻ってきてようやく日常生活を取り戻せるのです。

それ以上に神は人間を心配してくださいます。ほとんどすべての人が神との親しさの中にとどまっていますが、神から遠ざかった人が一人でもいるなら、その状況は受け入れられないのです。もしその一人が減びてしまうなら、父なる神の悲しみはたとえようもないのです。

わたしたちも、神の思いを知って生活したいと思います。パズルのワンピースが欠けた状態を、わたしが引き起こしているなら、父なる神は毎日胸を痛めていると知りましょう。あるいは、欠けたピースの隣のピースかもしれません。もしそうであるなら、捜し回っている神に協力しましょう。そして見つけ出すなら、教会全体で喜びたいと思います。



年間第 25 主日 (ルカ 16:1-13)

富を使い、天に宝を積む人と出会えるように

「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。」(16・10) わたしたちは何に忠実を尽くすか試されています。今週、天に宝を積む事柄に忠実を尽くす生き方について考えることにしましょう。

わたしが主任司祭になって初めて赴任したのは西彼大島町の太田尾小教区でした。大島造船所という基幹産業があり、大島トマトも有名でした。隣の崎戸町ではダイヤソルトという会社が塩を作っていました。かつては炭鉱の島でしたが、炭鉱閉山後見事に生まれ変わりました。

赴任して間もないころ、わたしは外出しては司祭館に帰れなくなって迷子になっていました。同じ道を帰ってくるだけなのに、最後に教会に上がる道を通り過ぎてしまい、「ここはどこだ？」と、さんざん苦い思いをさせられたのです。

ある日、首回りにカラーを付ける司祭シャツを着て出かけ、例によって帰り道で迷い、教会にたどり着けなくなりました。まだ知り合いもないし、同じ道をぐるぐる回るだけでどうしても戻れませんでした。峠に差し掛かり、車を降りて行先を書いた看板の前に立ち尽くしていると、一人のお父さんが声をかけてくれました。「どうかしましたか？」

「わたしは太田尾教会の神父なのですが、教会の入り口がわかりません。」あとで分かるのですがそのお父さんは太田尾教会の信徒でした。本当はおかしくてたまらなかったのですが、見知らぬ親切な人を演じてこう言ったのです。「すべての道は、百合岳に通じるのですよ。百合岳に行って全体を見渡してごらんなさい。」

言われるまま、島の中でいちばん高い百合岳に向かいました。全体を見渡して、ようやく地図が頭の中に収まりました。わたしが見落として教会に戻れなかった場所も、頂上から眺めると一目瞭然でした。迷子になって焦っていたので、全体が見えてなかったのです。

その時の経験は今も生きています。「すべての道は、一つの場所に通じる。」それが分かれば、道を間違えても目的地にたどり着けるはずです。いったん頂上に行けば、どこを間違ったのか自分で納得できるのです。そしてこの教訓は、人を真理へと導いてくれると思ったのです。

福音朗読に戻りましょう。ある金持ちの主人に重んじられていた不正な管理人は、主人から仕事を奪われようとしていました。彼は小作人が主人に払うべき分に、自分の分け前を上乗せして証文を作成していたようです。証文に油百バトスと書かれていても、管理人を通して実際に主人が受け取っていたのは五十バトスだったのでしょうか。

同じように小麦を納める小作人の百コロスも、そのうちの二十コロスは管理人の取り分を上乗せしていた証文だったと思われます。本来の数字に書き直しても、主人は被害を受けないし、小作人には負担を軽くしてくれた情け深い主人であると思わせることに成功したのです。

管理人は、告げ口をする者の告発で解雇されます。それまでは「主人にお仕えする道」を悪用して、「懷を増やす道」にすり替えていたのです。しかし解雇されるに至り、「すべての道を主人に向ける」この決断をしたのです。管理人が生き残る道は、そこにしかなかったのです。

「主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。」(16・8) 管理人がたどり着いた生き残りの最後の方法は、わたしたちに何かを教えようとしています。わたしたちにとって、「すべての道は神に通じる道」なのです。

もしそうであるなら、どれだけ神に背を向けていても、最後の行き止まりのところで神と向き合うことになります。最後に神と向き合う人生の道ならば、なぜ最後まで背を向ける必要があるのでしょうか。一刻も早く神のほうに向きなおって、歩き始めるべきです。

それぞれの人生ですから、それぞれの好きなように使って結構だと思います。ただし、どのような使い方にせよ、天に宝を積むように工夫することを強く勧めます。あなたの持ち物のうち、いくらかは神の為に使うなら、財産全体が本当に価値あるものとなるでしょう。

友達を作るとき、その人がわたしを思い出して天の父にとりなしてくださるような人を探すように勧めます。わたしが道をそれても、わたしのことを天の父に祈ってくれる友達がいるなら心強いはずです。

わたしの持ち物、わたしが大切にしている友とこれから付き合っていくとき、最終的にどこにつながっていくのかを考えましょう。「すべては神に通じる。」そう思ってあなたの持ち物、出会う友達と接しましょう。もし最終的に神につながらない持ち物、神に向かう友達でないならば、距離を置くこともできます。

わたしたちが大切にすべき相手、忠実を尽くすべき相手は、本当に価値あるものにつながる相手であるべきです。神につながっていく相手を大切に、すべての道が神に通じるよう、生活全体を整えたいと思います。



年間第 26 主日 (ルカ 16:19-31)

わたしが日頃遠ざけているものは何ですか

年間第 26 主日 C 年は「金持ちとラザロ」のたとえが取り上げられました。金持ちはもっとも遠ざけていた出来事を死後に問われました。わたしたちも、日頃何を遠くに追いやっているか問われているのだと思います。

火曜日は修道院のミサの日ですが、先週のミサ依頼は「敬老のお祝いを迎えた姉妹たちのため」でした。祭壇に上がって「本日のミサは敬老の祝いを迎えた姉妹のためです」と発表したのですが、わたしのメガネが合っていないのでしょうか。敬老者と思われるおばあさんは一人もいませんでした。明日にでもメガネ屋さんに行って、相談しようと思っています。

おばあさんつながりでもう一つ。秋分の日（木）に、信徒発見劇の上五島公演 DVD の上映会を行いました。まずまずの参加人数で皆さん喜んでもらえたのですが、一つ残念なことがありました。上映を終えての帰り、一人のおばあさんが玄関で困った様子でした。靴を間違えられて帰れなくなっていたのです。

残っていたのはサンダル一足だけでした。皆さんの中に必ずいるはずです。来るときにはサンダルを履いてきて、帰りはすま～して靴を履いて帰った人。困っている人がいます。解決できることを心から願っています。

福音朗読に戻しましょう。「金持ちとラザロ」のたとえ話です。金持ちは生きていうちに自分の楽しみのためだけに時間とお金を使いましたが、神はそういう生き方のあげくに死んだ金持ちを拒みました。時間にもお金にも余裕があったのですから、時間もない、お金もない貧しい人々に手を差し伸べる必要があったのです。

そうは言っても、若いうちは自分の好きなことにしかお金をかけません。たとえば病院にお金を使うなんてもったいないと思っています。病院に千円払うくらいなら、焼き肉屋で上ロースを飛び越えて特上ロースを食べるほうがましだと思っています。

ところが自分の好きなことだけにお金をかけたツケは必ず返ってくるものです。わたしがそうでした。3年くらい前でしょうか。東京出張中に足の親指の付け根に今まで経験したことのない痛みが走りました。痛風でした。打ち身とか、切り傷の痛みではないのです。骨をボキッと折ったらこれくらい痛いだろうというような痛みでした。

ロキソニンという痛み止めを薬局で買って五島までは辛抱しまして、すぐ病院に飛び込みました。看護師さんが痛風を疑っています。診察した先生も驚いた様子もなく「立派な痛風です。尿酸値を下げる薬を処方しましょう。お大事に」ということでした。ここでようやく、健康のためにお金と時間を使う必要性に迫られたのです。病気の診断が下る前に考えるべきでした。

このように、人はしばしば、自分からいちばん遠い場所の痛みを分かろうとしないのです。わたしはそれまで病気らしい病気もしたことがなかったので、健康に注意するとか、健康のためにお金と時間を使うなどということは最も意識から遠い事柄だったのです。

たとえ話の金持ちにとっても、貧しいラザロの状態は自分から最も遠い生活でした。だれかの家の食卓から落ちる物で腹を満たすとか、ユダヤ人にとって不浄な生き物とされている「犬」が近寄ってきて、できものをなめている。こんなみじめな生活は、金持ちにとっては目の前で起こっていたとしてもいちばん縁遠い場所の出来事だったのです。

いちばん遠い場所で起こっていることを身近に感じない人は、いつまでたっても目の前の欲望に手を出します。ところがいったんいちばん遠い場所の痛みを知ると、お金の使い方、時間の使い方が変わり、社会全体が恩恵を受ける世の中に変わるのです。

「病気などまったく縁遠い」と思っていた人が痛みを知って初めて健康のためにお金と時間を使い、本当の豊かさをしみじみ感じる。たとえ話の金持ちも、いちばん遠い場所にいる貧しい人たちに富を分け与えて初めて、神の祝福を感じる豊かさにあずかれるのです。

イエスのたとえば地上の富にだけ注意を向けているのでしょうか。たとえ話は死後の世界にも及んでいます。そうであるなら、信仰と日常生活についても、目の前のことだけしか見ない生き方をせず、永遠の幸せにつながる生き方に気を配り、永遠の幸せにつながるはずのものを遠ざけたり追いやったりしていないか、考えさせるのです。

多くの人にとって、信仰は日常生活の中でいちばん遠ざけられている事柄かもしれません。一年に一度お墓参りをしてそれで終わりとか、年の初めに手を合わせて幸せを願うのが関の山だとか、そういう人も多いかもしれません。わたしたちの中にも、クリスマスにかろうじてミサに来て終わりという人がいるのかもしれませんが。

信仰と、それを支える祈り。これらは慌ただしい生活のいちばん遠い場所に追いやられている部分かもしれません。しかしその場所の大切さを知るようになると、お金の使い方、時間の使い方に変化が生まれ、本当の幸せを追い求める人に変われるのです。わたしの祈りを必要としている人を身近に感じることができるようになり、諸聖人の交わりが理解できる人になります。神に何かをおささげすることに意味と価値を感じ、時間とお金を使える人に変わっていくのです。

いちばん遠くに追いやっているものにも気を配る人が、本当の幸せにたどり着ける人です。健康寿命もそうでしょう。カトリック信者としては、信仰に根差した生活を身近に考えてこそ、真の幸せを味わうのです。自分の視界に置きたくない事柄、目を背けている事柄をもう一度よく考えてみましょう。神はこれまでわたしが目を背けてきたことを重大な事柄として最後に問う可能性があるのです。



年間第 27 主日 (ルカ 17:5-10)

神がまいてくださった信仰により頼む

「わたしどもの信仰を増してください」(17・5) 弟子たちはなぜ、このような願いをしたのでしょうか。そこから出発して、イエスが言う「信仰」がわたしたちに備わっているのか、考えてみたいと思います。

司祭団ソフトボール大会に参加してきました。4 チーム対抗で、長崎市内チーム、五島チーム、佐世保・平戸チーム、そしてお隣の韓国テグから1 チームやって来ていました。聞けば長崎教区とテグ教区は姉妹教区の覚書を交わしているそうです。そこで司教さま同士で話が進み、大会に参加させてほしいということになったということのようです。

試合の結果は、午前中に長崎チームと佐世保・平戸チームが1 試合おこない、五島チームと韓国テグチームが1 試合おこないました。佐世保・平戸チームは長崎チームに最終回の2 アウトまでリードしていたのですが、若手の司祭に逆転3 ランホームランを打たれて負けてしまいました。逆転のランナーはたしか山内ケイスケという神父さまでした。

午後からは第1 試合に勝った長崎チームと韓国テグチーム、負け同士の平戸・佐世保チームと五島チームの試合でした。長崎チームは昼ご飯、韓国テグチームに缶ビールをしつこく勧めて飲ませたのですが、試合は韓国テグチームが勝利し、今年の優勝チームとなりました。わが佐世保・平戸チームは午後の試合も負けて最下位でした。

わたし個人の成績ですが、第1 試合はそこそこ貢献しまして、2 回打席が来て2 回とも塁に出てホームに帰りました。守備でも失点につながるエラーもなくこなしました。しかし午後の試合バットは空を切り、守備も乱れ散々でした。

このあと教区報に記事を書くのですが、どんなふうを書くか頭を痛めています。「来年は韓国に優勝旗を取り戻しに行く」と書こうと思うのですが、向こうが優勝旗の領有権を主張して譲らなかったらどうしようかと心配しております。実際は心配無用でしょうが。

福音朗読に戻りましょう。弟子たちが「わたしどもの信仰を増してください」と言った直前の箇所が関わっています。次のような言葉でした。「一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」(17・4)

イエスの言葉を聞いた使徒たちは、「今のわたしたちの信仰では七回赦してあげるのは難しい」と感じたのでしょうか。そこで信仰を増し加えてほしいと考えたのではないのでしょうか。ところがイエスが示そうとする信仰は、使徒たちの考えている信仰の延長線上にはないものでした。

「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」(17・6) この違いは何なのでしょう。わたしたちにも関わってくる問題なので、押さえておきましょう。

考える材料を示したいと思います。わたしたちには練習や努力でた

どり着けるものと、それらではどうしても追い付かないものがあるのではないのでしょうか。たとえばプロ野球の大谷選手は、今年ピッチャーとして 10 勝し、バッターとしてホームランを 22 本打ちました。

ほとんどのプロ野球選手は、練習や努力を惜しまなければ、ピッチャーとして 10 勝することはできるでしょう。あるいはバッターとしてホームラン 22 本打つことは可能でしょう。しかしそれを同時に達成するのは、特別な才能であって、努力や練習では追い付かないのではないのでしょうか。何かそこには、天から与えられたものがあるのだと思います。

使徒たちが考える「信仰」と、イエスが言う「信仰」にも、似たような違いがあるのではないのでしょうか。使徒たちが描いていたのは、努力や経験によって増し加わる部分で、信仰のある一面だと思っています。

しかし根本的には信仰は「神から与えられるもの」ではないのでしょうか。「天から与えられる信仰」は、わたしたちが努力や経験では増し加えることのできないものであって、たとえそれがからし種一粒ほどでも、あっと驚くわざをおこなうものなのです。

ちなみに、「天から与えられる信仰」もさまざまあるのかもしれませんが。「からし種一粒ほど」のものもあれば、「十タラントン、五タラントン、一タラントン」といった違いも考えられますし、「多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」(ルカ 12・48)ということからも、違いがあると考えられます。

最終的に「天から与えられる信仰」は、誰もが持っているものなのではないのでしょうか。持っていると考えたいです。何年前でしょうか。上五島にお年寄りの神父さまが赴任してきて、上五島地区司祭団の仲間入りをしました。わたしたちは内心「平均年齢が上がるなあ」とか「ソフトボールの戦力がダウンした」などと勝手なことを言っていたのです。

しかしよくよく考えれば、70 歳を過ぎてから転勤して新しい教会に根付くというのは、それこそ「桑の木」に海に根を下ろせと言われてその通りに実行するくらい難しいと思ったのです。経験を積み、年齢を重ねて大ベテランになれば、山から海に住まいを変えるのは簡単になるのでしょうか。現実はその反対のはずです。わたしはその大先輩に改めて尊敬の念を持ったのでした。

天から与えられる信仰に、わたしたちは信頼を置く必要があると思います。それは人によっては「からし種一粒ほどの信仰」かもしれませんが。それでも、わたしたちの努力や経験で積み重ねたものにまさるのです。神が与えた信仰は、あっと驚くわざをわたしたちに行わせます。神により頼むことで、神が与えてくださった信仰は力を発揮します。

わたしができると思うかどうかにより頼むのではなく、神の全能により頼む。こうしてわたしたちは神が与えてくださる信仰を世に示すことができるのです。



年間第 28 主日 (ルカ 17:11-19)

あなたのすべてを知ってくださる方がいます

年間第 28 主日 C 年の福音朗読は「重い皮膚病を患っている十人の人をいやす」という物語でした。6 年前の説教ですが、内容が面白かったのであらためて取り上げて、今週の学びを得たいと思います。

間違い電話は、よくある話ですが、わたしは過去に間違い電話の人とお友達になったことがあります。デートして食事をしたりとか、そういう付き合いではなくて、間違い電話のあとも、しばらく電話友達になってあげた、という程度です。

深夜に、電話が掛かってきました。主任司祭を始め、その教会には 4 人の司祭がいて、わたしはいちばん若い司祭だったので、先輩司祭よりも先に電話を取る必要がありました。深夜に電話がかかっても、まずわたしが電話を取るわけです。

電話は女の子からで、中学卒業後高校に行っていない子でした。本人はてっきり、自分の彼氏に電話をかけているつもりだったらしく、「もしもし」と言ったらいきなりまくし立ててきました。日頃あまり話を聞いてもらえないのか、よくまあ間違えている相手にこれだけ話せるなあと、しばらく感心して聞いていたのです。

「あのね、電話間違ってるけど。」すると、その女の子はびっくりして、すぐ謝りました。わたしは面白かったものですから、「大変だね。良かったら続きの話、聞くよ」と言ったのです。2 時間くらいは話を聞いていました。

話を聞いてもらって、嬉しかったのか、また電話していいかと言うものですから、あーいいよって、返事をしたのです。まだ若かったので、深夜の電話を受けても次の日の仕事に響いたりはしない時代でした。10 回くらいは続いたでしょうか。その後は安心して、ピタッと電話はやめました。

電話の相手をしていて、こんなことを思ったのです。どんな人でも、自分がここにいるということを、必死になって知らせたい、知ってもらいたい、分かってくれる人がいてほしい。人は自然に、自分を分かってくれる人を求めるんだなあ。そんなことを感じました。

福音朗読ですが、重い皮膚病を患っている十人の人が、イエスに憐れみを求めます。律法の規定によると、重い皮膚病と診断された人は、社会から切り離され、礼拝にも参加できず、共同体の交わりに加わることができませんでした。家族とも離れ離れでした。健康な人が重い皮膚病の人のそばをたまたま通るときは、重い皮膚病の人たちは大声で「わたしは汚れた者です。わたしは汚れた者です」と叫んで、知らせなければならなかったのです。

こうした律法の規定は、重い皮膚病の人をさらに追い詰めていただろうと思います。誰もが、自分を分かかってほしい、自分を知ってほしいと思うのに、当時のユダヤ社会は、自分たち病気の人を避けるように、関わりを持たないようにと仕向けていたのです。

そこへ、イエスが通りかかりました。本来なら、「自分たちを避けて通ってください」と大声で叫ばなければなりませんでした。なんと「イエスさま、わたしを憐れんでください」と叫んだのです。自分を知ってほしい、自分を分かってほしいと、大声で叫びました。

この人々は、どこかで、イエスの噂を耳にしていたのかもしれませんが。自分たちを分かってくれるのは、この人しかいない。だから、必死になって、自分のことを訴えかけたのでしょう。

イエスは彼らの訴えに耳を傾けました。イエスは、すべての人が、たとえ社会から切り離されている人でも、自分を知ってほしい、自分のことを分かってほしいと思っていると十分理解していたのです。イエスは人間の心の奥底からの願いを知るお方なのです。

イエスは何も特別な動作はしませんでした。奇跡が起こり、重い皮膚病はいやされました。問題はここからですが、サマリア人だったとされていますが、十人のうち一人だけ、イエスのもとにかけより、感謝を捧げたのです。

わたしはこう考えました。最初はイエスに自分のことを知ってほしいと十人とも願ったのですが、自分の置かれた状況を理解できる人はイエスしかいないと感じたのは一人のサマリア人だけだったのではないのでしょうか。残る九人はユダヤ人でした。ユダヤ人は、ユダヤ人社会に戻ることで、迎えられる可能性があります。

ところがサマリア人は、ユダヤ人と敵対関係にありましたので、たとえ健康を取り戻しても、社会的には孤立してしまう可能性があったのです。ほかに何も頼るものがない。そういう中で自分を知ってくださった唯一のお方に、感謝しに来たのではないのでしょうか。

ここからわたしたちが学びたいことは、「イエスだけが、わたしの拠り所です。」そんな気持ちが、わたしたちの信仰にあるのでしょうか、ということです。信仰は持っているけれども、拠り所はほかにもあって、イエスだけを拠り所に行っているわけではない。それがわたしたちの現実の生活ではないのでしょうか。

人は、見られたくない部分は人に隠そうとします。それは家族に対しても、一緒に生活している人に対しても同じでしょう。そんな中で、わたしの良い点も悪い点も、すべてを打ち明けて拠り所になれる。そんな相手はどれだけ探しても見つかるものではありません。すべてを知ってもらえることができるのは、イエスのほかにいないからです。

感謝しに来たサマリア人は、イエスを自分の唯一の拠り所、すべてを感謝できる唯一の相手として理解しました。わたしたちも、日頃受けているもの、良いものも悪いものもすべてを感謝できる。イエスに対して、あらためてそのような信仰を呼び起こすことができるよう、このミサの中で恵みと力を願いましょう。



年間第 29 主日 (ルカ 18:1-8)

気を落とさずに絶えず祈り続けるなら

「人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

(18・8) イエスは信仰が一時の熱狂で終わってしまい、人の子の再臨の時に絶えてしまわないか心配しておられます。地上に、わたしたちの教区、小教区に、イエスが期待するような信仰が見られるでしょうか。

広島に行ってきました。「白浜司教様に面会して翌朝は司教様とミサをささげてくる。ついでに野球観戦もしてくる」と先週繰上げミサの中学生に話すと「どっちがついでだか・・・」と言われましたが、真っ先に司教館で白浜司教様に面会してから野球観戦に行き、翌朝も司教様とミサをささげたのだから、わたしの主張に間違いはありません。

マツダスタジアムでは広島教区のH神父様のご厚意で、6人掛けのテーブル席を押さえてもらっていました。招待されていたのはわたしと仙台教区のK神父様、横浜教区に派遣されている仙台教区のW神父様、それと司教館で働くMさんとIさんの6人で、主審のプレイボールの号令とともにテーブル席も生ビールのプレイボールがかかり、ゲームセットまで飲み続けていました。わたしと広島教区のお三方が熱心なカープファンです。ただ9回の田中の一発の時、わたしは隣のW神父様とおしゃべりしていて、せっかく球場に来ていたのに見逃してしまいました。

翌朝は司教館のチャペルで司教様と朝7時から一緒にミサをおささげしました。司教館は幟町教会の敷地にあるので、同じ時間に聖堂でもミサがささげられていました。ほかの神父様はそちらに出ていたのかもしれないかもしれません。わたしがチャペルに行きますと、わたしのほか誰もいませんでした。純粹に二人きりで、ミサをささげたのです。

わたしは司教様とミサをささげながら、この司教様が自分とは違うものを見てミサをささげていると感じました。わたしの目には、おそらく八畳くらいの、誰もいない空っぽの小さなチャペルしか見えていませんでしたが、司教様の目にはきっと広島教区民すべてが見えていたのだと思います。一緒にささげているミサでありながら、わたしと司教様とでは取り組む姿勢に天と地の開きがある。そう認めざるを得ませんでした。本当に貴重な体験をさせてもらいました。白浜司教様が福者になるようなことがあれば、体験したことを喜んで証言したいと思います。

福音に戻りましょう。イエスは「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」(18・1)と考えておられます。たとえ話の中で、やもめが裁判官にひっきりなしにやって来て、「相手を裁いて、わたしを守ってください」と願っています。

登場人物の置かれている立場をおさらいすると、やもめは夫を亡くして社会的に非常に弱い立場に置かれている女性です。裁判官は、一般的な揉め事を仲裁するために立てられた「にわか裁判官」でしょう。揉め事は例えば金持ちとの金銭トラブルで、金持ちはわいろを裁判官に渡して、もみ消してほしいと頼んでいるかもしれません。日常ありがち

な、弱い者が泣く目に遭うという構図なのでしょう。

やもめは正しい裁きを求めてひっきりなしにやってきます。「うるさくてかなわない」とすら言っています。「さんざんな目に遭わせる」という場面は、元の言葉の意味を汲むと、「目の下をこぶしで狙ってアザを付ける」という意味合いだそうです。おちおち寝られず、目の下にクマができていた様子を想像すると滑稽でもあります。

弟子たちが、「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」と言われているのは、これくらいの圧力、これほどの圧倒的な熱量を指しているわけです。わたしたちは日頃、188 福者の列聖を願い、また高山右近の列聖を願っています。わたしたちの祈りは、「うるさくてかなわない」「さんざんな目に遭わせる」と思わせるほどの圧倒的な熱量があるだろうかと考えてしまいます。桑の木が山から海に根を下ろすというのも、通常考えられないようなことさえ引き起こす熱意にほかなりません。この熱意が、わたしたちには欠けているかもしれません。

振り返って、白浜司教様の日を始めるミサでの祈りを考えてみました。もしわたしがあの日ご一緒しなかったら、たった一人でミサをささげていたのかもしれませんが。けれどもお話ししたように、わたしがそばにしようがいまいが、司教様のささげているミサからは広島教区民が二重三重に取り囲んでいるような熱意を感じたのです。司教様のミサの奉献文の祈りは、広島全教区民をイエス・キリストを通して御父におささげしていることがひしひしと伝わる祈りだったのです。

わたしはどうだろうかと思いました。一人でミサをささげることとはほとんどありませんし、白浜司教様のような環境に置かれたら、心が折れて一人ではミサをしなくなるかもしれません。そんな気を落としそうになる環境にありながら、黙々と、高い志でミサをささげている姿を拝見して、大いに勇気づけられ、慰められました。

白浜司教様が日々こなさないといけないことは分刻みに手帳に書き込まれていました。しかしどんなに忙しくても、気を落とさずに絶えず祈ることができるか。たった一人で、教区民のため、小教区のため、ミサをささげ続けることができるか。これは別の問題だと思いました。

「人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」広島教区は幸せだと思います。少なくとも一人、白浜司教様が気を落とさずに絶えず祈り続け、人の子が来るときに顔を上げることができるからです。

わたしたち田平小教区には、こんな信徒が見いだされるでしょうか。誰の目に留まらなくとも、たとえどれだけの人気が落ちて祈ることをやめてしまっても、絶えず祈り続けてくれる人がいるのでしょうか。イエス・キリストの再臨の時、恐れずに顔を上げる人がわたしたちの小教区に与えられますように。ミサの中で願い求めましょう。



年間第 30 主日 (ルカ 18:9-14)

わたしたちを義としてくださるのは神

年間第 30 主日を迎えました。「30 主日」と聞くと、「あーそろそろ年間の主日も終わりだな。次に待降節がやってくるな」と意識できると素晴らしいと思います。今週与えられた「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえから、学びを得ることにしましょう。

皆さんは自転車のパンク修理をしたことがあるでしょうか。わたしは、今は亡くなった父から修理の仕方を一度だけ教わって、それ以来自分でパンクのたびに修理をしていました。最近では自転車にも乗らないのでパンク修理がどうなっているのか知りませんが、わたしが小学生のころは、タイヤからチューブを引き出し空気を入れながら水を張ったたらいにつけ、泡が出る様子で穴を突き止め、修理に取りかかっていた。

自転車店で買い求めたパンク修理キットを使い、穴の開いたチューブの周辺をやすりこすり、接着剤をチューブ、張り合わせるゴム両方に塗って張り合わせ、十分に乾いたらもう一度水を張ったたらいに入れて空気の漏れがないかを確認、最後にタイヤの中に戻します。ちょっと面倒ではありますが、男の子にとってはこれら一連の作業が、一人前に自転車を乗り回せる証でもありました。

この自転車のパンク修理、意外に思われるかもしれませんが今週の福音朗読を読み解くのに役に立つのではないかと考えています。パンク修理のポイントは2つで、先ず破れを見つけること、そして破れを外から塞ぐことです。

さて福音朗読ですが、神殿で祈る二人は、言わば「パンクした自転車に乗っている人」です。そしてどちらの自転車のパンクが修理を終えて帰ったかという、ファリサイ派の人ではなく、徴税人だったということです。

二人の祈りを比べましょう。ファリサイ派の人の祈りは、自転車のタイヤがパンクしていることに気づかないで祈っているような祈りです。「わたしはほかの人たちのようなものではなく、ましてやここにいる徴税人のような者でもないことを感謝します。」さらに自分の自転車がパンクしていることを認めようとせず、空気入れで空気を入れ続けています。「わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。」

(18・12) 祈りの言葉にどれだけ自分の犠牲を詰め込んでも、タイヤのチューブが破れていれば意味はありません。

しかし徴税人は、自分の自転車はパンクしており、修理が必要なことを知っていて、神に憐れみを乞い求めるのです。「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」人間の目からも明らかですが、破れを認め、修理を乞い求める人こそ、助けの手を差し伸べてもらえる人なのです。

タイヤのチューブに破れがあれば、どれだけ空気を入れてもすべて抜けてしまいます。中からチューブを膨らませても、結局無駄なことです。破れを見つけ、破れを認めて外から塞いでもらわなければ、永遠に

その自転車のパンクは直らないのです。

ファリサイ派の人が取った態度は、まさにこの中から空気を詰めようとする行為でした。むしろ自分の破れに気づき、認め、その破れを外から塞いでもらうことを願うべきだったのです。そうすれば破れが直り、並の人では到底できない週に二度の断食とか全収入の十分の一のささげものも、神の義に叶ったことでしょう。

いっぽうの徴税人は、自分の欠けた所と正直に向き合っていました。後ろ指さされるような稼業をしていたのですから、自分の破れは火を見るよりも明らかでした。そこで彼は、自分の破れを外から塞いでもらえるように神の憐れみにすがったのです。

神はいつも、人間の破れを覆い塞いでくださる方です。神は人間を、天使よりやや劣るものとして造られました。天使は破れが生じませんが、人間は破れが生じる者としてお造りになったのです。神は創り方を知らなかったのではなく、神の憐れみによって、時々生じる破れを覆い塞いでもらいながら生きる者として人間をお造りになったのです。

わたしの知る限り、自転車のパンク修理は中からはおこないません。中から空気をどれだけ入れ続けても、外から破れを塞がない限り永遠に終わりが来ないのです。人間には必ず何かしらの破れがあるのです。それを自分の祈りや英雄的な努力でどれだけ中から詰め込んで修理しようとしても、その努力は永遠に終わらないのです。ただ一つ、自分の破れを認め、神の憐れみで破れを覆い塞いでもらう。これ以外に、自分を直してもらう方法はないのです。

わたしたちはどうでしょうか。わたしたちの祈りの家である教会に来た時、わたしはどんな祈りをしているでしょうか。周りを見回して、ほかの人のような者でないことを感謝しますとどこかで自分を納得させていないでしょうか。あるいは自分の祈りで破れを埋め尽くそうと考えて、かえって空気入れを使って入れた空気が、破れから噴き出していないでしょうか。

イエスが示したたとえば、わたしたちにも示されたたとえばだと考えるべきです。わたしたちにも破れがあります。人によっては針の孔ほどで、勢いよく空気が抜けていないために気づかないかもしれません。けれどもイエスは、たとえばゆるしの秘跡であなたが立ち寄るなら、「空気が減っています」と指摘してくれるでしょう。ぜひそのわずかの孔を、自分のおこないで埋めようと思わず、神の憐れみによって直してもらう道を選んでほしいのです。

「言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。」イエスの答えは今も昔も変わりません。わたしも、神の憐れみといつくしみにより頼んで、破れを直してもらいましょう。目に見えない破れであればなおさら、神に指摘してもらわなければ見落としてしまいます。ゆるしの秘跡、聖体拝領など、神の憐れみはわたしたちを義としてくださるのです。心を開いて、神の手当てに自分を委ねることにしましょう。



年間第 31 主日 (ルカ 19:1-10)

失われたものを捜して救うためにできることをする

年間第 31 主日 C 年は「徴税人ザアカイ」の物語です。「この人は徴税人の頭で、金持ちであった。」(19・2) 少し嫌味を感じる登場の仕方をしてしています。その彼が、イエスと出会うことになります。たくさんの人がイエスの前を通り過ぎ、出会うことなく去っていく中で、ザアカイは確実に主との出会いの機会を捉えました。出会うことなく去っていく人々には何が足りないのでしょうか。ザアカイには出会うことのできる何が備わっていたのでしょうか。

徴税人ザアカイと言いますと、わたしには思い出される人がいます。長崎教区の補佐司教から福岡教区の司教となった松永久次郎司教様です。わたしが福岡の大神学院にいた時、特別講話だったか、黙想会指導だったか、よく覚えませんがお話をしていただきました。

実際の講話は、あまりの優秀さに雲の上の人だと感じました。一つ例を挙げると、司教様はローマの神学院を卒業してからギリシャ語をたった1年で習得したそうです。そんな話を聞かされると、わたしたちは「努力が足りず申し訳ありません」としか返事のしようがありませんでした。それでもユーモアを感じさせる話もありました。それは松永司教様が司祭叙階の恵みを受けた時に選んだ聖句についての話でした。

皆さんもよくご存知かと思いますが、松永司教様は背の低い方でした。ご本人はどう思われていたか知りませんが、ローマで司祭に叙階された際の記念カードに、ラテン語で次のように記したそうです。

<<Zacchaeus, festinans descende, nam hodie in domo tua oportet me manere>>.これはイエスがザアカイに言われたことばです。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」(19・5) 背の低いザアカイに自分をなぞらえて、イエスが声をかけ、わたしを召し出してくださった。神の不思議な計画を、思い切った聖句の使い方に残そうと思われたのでしょうか。

ひょっとすると、松永司教様は、ご自分がのちに司教に叙階されることも見据えて、この聖句を選んだのかもしれませんが。神は、背の低いわたしを取り上げて、教区の牧者としてくださる。その姿も見据えてのことだとしたら、ものすごい先見の明だと思います。

福音書に戻りましょう。ザアカイには、イエスと出会う何かが備わっていたはずですが。何だったのでしょうか。イエスの最後のことばに答えがあります。「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」(19・10) ザアカイはイエスにとって失われたもの、捜して救うものだったのです。

ザアカイは、はじめ「イエスがどんな人か見ようとした」(19・3) のですが、彼が望めば人々を横に押しやって、一対一でイエスの前に立つこともできたでしょう。彼は人々に嫌われる仕事をしていたとは言え、「頭(かしら)」であったわけですし、金持ちでもあったので、人々を

横に追いやることは簡単だったでしょう。

しかし彼は、いじちく桑の木に登ってイエスを眺めることを選びました。つまりザアカイは、イエスとそれほどかわりを深めようとは思っていませんでした。イエスにもそんなつもりはないだろう、きっとそう思っていたはずでした。ところがイエスは、ザアカイに会って、話を聞き、食事を共にする気持ちでいっぱいだったのです。

「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」ただ木に登っているだけでは、イエスの目には留まらなかったかもしれません。ザアカイも、たとえ自分が木に登っても、イエスの目には留まらないだろうと思いながら眺めたかもしれません。けれども「失われたものを捜して救うために来た」イエスは、敏感にザアカイの存在に気づいたのです。

ところで「失われたもの」の立場にある人は、イエスと出会うと必ず救われるのでしょうか。わたしは、イエスが出会おうとされるときに心を開いて耳を傾ける人には、救いが与えられると思います。しかし、イエスが捜し求めて出会おうとされても、心を開かず、耳を貸そうとしないなら、その人に救いは訪れないと思います。

ザアカイは、イエスが捜し出してくれたことを深く心に刻み付けます。彼は 180 度向きを変え、「失われたもの」から「捜してもらい、救われた者」として生きる決心をしたのです。「主よ、わたしは財産の半分以上を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」（19・8）

しかし周りにいた人々はザアカイを認めようとしません。罪人が救われるはずがないと決めてかかっています。それはわたしたちがつい陥ってしまう考えでもあります。「あの人は変わらない。」たしかに自分一人では、誰も過ちから立ち帰り、まともな生活に戻れないかもしれません。けれどもイエスが働いてくださったのなら、変わるかもしれないのです。イエスが捜し出してくださったことを繰り返し思い出し、歩み続けるなら、人間の努力を超える力が人を導くのではないのでしょうか。

11 月から地区集会に伺います。わたしも、捜し求めている人がいます。誰にも相談できないでいる人です。家族に心配をかけたくないと相談できずにいる人、子どもに叱られるから言えないと悩んでいるお年寄りの方です。その人たちを捜し求め、解決策を考えたいと思っています。

わたしは、イエスが捜し出そうとしている人でしょうか。あるいはそのような人と知り合いではないのでしょうか。イエスがあなたを捜し当てた時、「わたしはあなたの勧めに耳を傾けます。生き方を自分中心から、キリスト中心に向け直します」と答えることができるのでしょうか。

あるいはイエスが捜し求めている人を知っているなら、「イエスよ、どうかあの人を早く捜し当ててください。わたしたちでなく、あなたのことばで立ち直らせてください」と祈るべきです。失われている人が一人でも多くイエスのもとに導かれ、救われて、神の国が広がっていきますように。このミサの中で願ひましょう。



年間第 32 主日 (ルカ 20:27-38)

滅びるいのちに生きる者でなく

年間第 32 主日 C 年の福音朗読は、復活を否定するサドカイ派の人々との問答です。わたしたちキリスト者にとって復活の信仰はなくてはならないものですが、当時のユダヤ人にとっては、復活を信じる決定的な出来事を持ち合わせていませんでした。復活したイエスをよりどころとするわたしたちとは違っていたわけです。

先週木曜日、文化の日に福岡の大神学院で行われた神学院祭に子どもたちを 8 人連れて行きました。広島教区の新しい司教様、白浜司教様が参加者のため、召命の実りのために神学院のグラウンドで野外ミサを司式してくださいました。司教様は説教の中で自分が神学校に入るきっかけとなった出来事をお話してくださいましたが、その時の説教は心を揺さぶられる説教でした。

白浜司教様は中学 2 年から長崎の小神学校に編入しました。上五島新魚目町の小学校を卒業した時、神学校に行かないかと進めてくれる人は誰もいなかったそうです。中学校は地元の中学校に進み、バレー部で部活動をしていましたが、同級生の中に一人、部活動を断った友達がいたそうです。

中学校に入ったら部活動で汗を流すのが当たり前と考えていた白浜少年は、なぜ彼が部活に入らないのか知りたくて、部活が休みだったある日、彼の家に遊びに行きました。すると彼は、学校から帰るとすぐに家が飼っていた山羊を連れ帰り、薪で風呂を沸かし、炊飯器でご飯を炊いて共働きの両親の帰りを待っていました。しかもその作業を一日も欠かさず、毎日続けていたのです。

ところが同級生は、高熱にうなされる病気になってしまいました。上五島では治療できる病院がないため、本土に移されましたが、懸命な看病も報われず、13 歳でこの世を去ってしまいました。白浜少年はいのちのはかなさに衝撃を受け、同級生の分も生きるため、そして後悔しない生き方をするため、中学 2 年生から神学校に編入したそうです。

白浜司教様は説教中何度も声が詰まってしまいました。その様子にわたしは思わずもらい泣きをしました。わたしは白浜司教様の中学 1 年生の時の同級生のことを思うのです。彼はどうなるのだろうか。もし本日朗読された福音書のサドカイ派の人々が考えるように復活などないと言うのなら、彼が黙々と果たした両親を助ける奉仕は誰が報いてくれるのでしょうか。

わたしは、13 歳で亡くなった同級生も含め、善人も悪人もいっしょくたになってどこかに置かれているとはとても思えません。神が十分に報いてくださり、復活して、喜びの宴でいつまでも神とともに住む。そういう姿を信じたいです。白浜司教様は、自分が道をそれないために、あの同級生は天国からいつもわたしを見守っていてくださると信じていると言いました。きっとそうなのだと思います。

もちろん、当時のユダヤ人の疑問にはきちんと答えなければなりません。サドカイ派の人々が持ち出した難問は、復活後の人間の姿を、今の姿を物差しにして考えたために誤解していたのです。

この世にあって人が自分の名を残していくためには子孫が与えられなければなりません。そのため、子孫を残さずに家系を絶やすことは決して認められなかった。そこで今回のような問題が起こってしまいました。

「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。」(20・34-36) 家計を土台にした人間関係ではなくなり、神とわたしの関係が何より大切にされる状態に移されるのです。

このことを決定的に明らかにしたのがイエス・キリストです。復活についての問題は、人類に先だって最初に復活されたイエス・キリストの示しを待つほかはなく、イエス・キリストに耳を傾ける以外に答えを見つけることはできないのです。アブラハム、イサク、ヤコブやモーセも、復活されたイエス・キリストが生かしてくださるのです。

わたしたちの復活の信仰を人に自信を持って語るために、わたしたちにはよりどころがあるでしょう。司祭・修道者は復活の信仰を人に語るよりどころになると思います。

司祭・修道者はこの世に名を残しません。それでいいのか？と問われるなら、「次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない」と答えることができます。今この世に会ってすでに、復活にあずかる者として生きている人なのです。司祭・修道者は復活を信じて生きる人のよりどころだと思います。

もしわたしたちの復活が夢物語だとしたら、名を残さない司祭・修道者はこの世でいちばんみじめな生き方です。しかし事實は違います。復活はイエスが約束してくださったのでわたしたちの希望のみなもとです。この世に死んで、神のいのちに生きるキリスト者の生き方は、必ず報われる生き方です。わたしたちはもっと力強く、証する必要があると思います。

復活を信じるわたしたちは、本当の意味で生きている生き方を選びました。滅びるいのちに生きるのではなく、復活して永遠に神の喜びにあずかる生き方に生まれ変わリませんか。今週わたしたちが持ち帰り、伝えるべき言葉です。



年間第 33 主日 (ルカ 21:5-19)

終末へのわたしたちの準備は今の生き方そのもの

「だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。」

(21・14) イエスは弟子たちがだれかの前に引き出される時を見据えて、弁明の準備ではなくイエスへの信頼こそが弟子たちを守ると教えます。わたしたちもイエスの呼びかけを自分のものとしましょう。

亡くなったわたしの父は数々の武勇伝を持っていますが、その中でもわたしが感心した話は、エホバの証人が自宅にやってきた時の話です。わたしが休暇で戻った時に、「こんなことがあった」といって話してくれました。

エホバの証人の人たちは父の家にやって来て、教えられたとおりの手順で父に話しかけてきました。父が家にいたということは、雨の日か、牛に与える草を切る道具の手入れをしていたのでしょうか。エホバの証人の人たちは、父を農家のおじさんに過ぎないと思っていたかもしれません。

しばらく話を聞いていましたが、しつこいので最後に「失せろ」と一喝しました。するとエホバの証人たちはひとたまりもなく退散したそうです。父が「失せろ」と言ったのだと話す様子は、場面を想像するだけでも傑作でした。この話を聞きながら、わたしは父親をあらためて尊敬したのです。

エホバの証人が活動していることはいろいろなうわさで耳にしていたかもしれませんが、その人たちはどういうことをしていて、どういう風に接すればよいのか、前もってわたしに聞くこともできたでしょう。けれどもいざその場面に立たされてみて、父は人間のどんな言葉や知恵にも頼らず、イエスが授けてくださる言葉に信頼を置いたのです。

聖書の次の言葉を思い出しました。「あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。」(マタイ 7・23) さすがに「失せろ」という聖書の言葉はありませんが、イエスはわたしの父に、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、授けてくれたのだと思っています。

だれでもそうかもしれませんが、弁の立つ人を前にすると、つい自分も言い負かそうとしがちです。言い負かそうとするとき、どうしても自分の言葉を探してきて、対抗しようとするわけです。

イエスはそうであってはいけないと言います。相手に思い直させ、恥じ入らせる言葉はイエスが授けてくださる。特にわたしたちの信仰を惑わせ、信仰に根差した生活を脅かす人を退けてくださるのは、わたしがひねり出した言葉ではなくて、イエスが授けてくださる言葉、知恵なのです。

今週の福音は、神殿の崩壊の予告と、終末の徴について考えさせています。社会を惑わしたり、わたしたちが信じている信仰を脅かす出来事はいつか必ず起こるわけですが、どんな不安な出来事であっても、わ

たしたちはイエスに信頼してしっかり立つ必要があります。

イエスが、終末を予感させる徴について触れるのはなぜでしょうか。たとえば親が、臨終を前にして子供たちを集め、「わたしはもう時間がない。これから言うことをよく聞きなさい」と呼びかける場面を例に考えてみましょう。いよいよ旅立とうとする父あるいは母は、子供たちを不安がらせ、脅えさせるためにそう言うのでしょうか。

そうではないと思います。今はどうしてもお別れをしなければならないので忍耐が必要ですが、その忍耐は、旅立っていく両親が子供たちに永遠の命への希望を持たせる道となるのです。別れを述べる父母の前で崩れ落ちることなく、希望のうちに立っていられるとしたら、その抛り所はイエス・キリストに違いありません。この世のどんなものにすがっても、父母との別れに気を落とさず、立っていられることなどできないからです。

イエスもそうです。しばらくするとイエスを信じる弟子たちを置いて、受難と復活を通して御父のもとに帰らなければなりません。今週朗読しているのはルカ 21 章ですが、22 章になるとイエスを殺す計画が持ち上がり、過ぎ越しの食事を弟子たちと共にし、物語は最後の場面へと進んでいくのです。

イエスが終末について語るのは脅えを抱かせるためではありません。さまざまな徴の中でもイエスに信頼して立っている人は、最後には復活のいのちを得る。試練の中にも惑わされることなくイエスを信じて生きることが確かな道となるのです。

それでも準備をしておけば安心なのではないかと思うかもしれません。子供たちが父母を見送るとき、葬送の挨拶を前もって準備するのでしょうか。きっと、直後に考えるのであって、限られた時間の中でも何かしら言葉を与えられるのではないのでしょうか。

イエスは「だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい」と言います。わたしたちはイエスに抛り所を置いて立っている者ですから、イエスがおっしゃる通りにしましょう。むしろわたしたちが毎日イエスを抛り所として生きることが、立派な準備なのです。すべての出来事を、イエスに信頼を置いて生きる中で位置づけする。終末を迎えるにあたってこれ以上の準備はないのだと思います。

わたしは、世界がひっくり返るような出来事を見るとき、惑わされずに立っていられるのでしょうか。すべての出来事を、イエスに信頼を置いて生きる中で位置づけしてきた人生であれば、その日その時を揺らぐことなく迎えることができるでしょう。わたしたちは終末の日を頭の隅に置きながら、イエス・キリストを判断の物差しにして今を生きる必要があります。



王であるキリスト (ルカ 23:35-43)

イエスはわたしたちの王であると証してきたか

王であるキリストの祭日を迎えました。典礼暦年に沿って歩んできた信仰の歩みを振り返りましょう。イエスがわたしたちの王であると認めてこの一年生きてきたでしょうか。イエスがわたしたちの王であると、この一年の歩みの中で宣言してきたでしょうか。

教会の典礼暦は、今週の「王であるキリスト」が年間の最後の週です。来週からは待降節第一主日、新しい典礼暦年が始まります。教会の典礼暦はA年B年C年三年周期になっています。今年はC年でした。次の待降節からA年が始まります。

このA年B年C年の違いは、ミサの典礼での朗読の違いです。A年はおもにマタイ福音書を使います。同じようにB年はマルコ福音書、C年はルカ福音書が選ばれます。今年はC年でしたから、ルカ福音書で典礼を進めていたわけです。来週からはA年に移行しまして、マタイ福音書をおもに典礼で使うことになります。

そこで、少し早いですが、皆さんにクリスマスプレゼントを差し上げたいと思います。以前文庫本で印刷した説教集です。ある小教区で司祭館を新築する機会に恵まれ、その引き出物として文庫本の説教集を用意しました。浜串教会からの引っ越し荷物の中に、なぜかA年の説教集が大量に出土しまして、これはどうしたものかと思案していたのです。

よく考えると次の田平教会では8ヶ月もすればA年が始まります。そうかここで配ればちょっとしたプレゼントになるなあと思ったのです。赴任してすぐに配ることもできましたが、恩着せがましくこの時期に配ることにしました。日曜日に都合が悪くてミサに参加できなかったり、病気で寝込んだり、入院していたり、そういう時の補いとして、あてはまる主日の説教を読んで、日曜日の補いとしてください。ちなみに説教集に出てくる具体的な話は、伊王島・馬込教会での出来事です。

さて福音に戻りましょう。イエスの十字架上の最後の場面です。ここにイエスをあざける三通りの人々が登場します。まず議員たちです。民衆がイエスの周りを取り囲み、恐らくその外で、議員たちがあざけています。彼らは自分たちこそ義人であると自負し、犯罪人として処刑されていくイエスの最期を見守る気もなさそうです。イエスを知ることになってから、ついに最期まで、彼らはイエスに無関心でした。

次に兵士たちです。彼らは「イエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら」侮辱しました。兵士たちは罪の中にある弱い人間でしたが、イエスに近寄る知恵は持っていたのです。しかしイエスが本当は誰なのか知ろうとしなかったし、知ることもできませんでした。

最後に同じように十字架にかけられた犯罪人の一人です。彼は死に値する犯罪人でした。自分が近づくことのできる人は犯罪人仲間しか考えつかなかったでしょう。彼は間近で、イエスのことば、しぐさを見ることができましたが、イエスに心を開くことはできませんでした。

ルカはこの三通りの人々を、遠くに離れている人々、近寄ってくる人々、いちばん近くで目撃する人々という順番で登場させます。ルカはこの三通りの人々が、イエスを知ろうと思い、イエスに心を開くことがなければ、距離的にどれほど近づいたとしても、イエスを信じることはできないと、視覚に訴えながら表そうとしているのです。

しかし十字架にかけられていた「もう一人の方」は、イエスが王であり、これから御国に帰られるのだと悟ったのです。この犯罪人はほかの三通りの人々と違う何かに気づいたから心を開くことができたのでしょうか。何に気づいたのでしょうか。

わたしは、「十字架から降りないイエス」を見て、大切なことを理解したのだと思います。実は議員たちも、兵士たちも、犯罪人もイエスが十字架から降りていないのは見ているはずなのです。しかしこの人たちにはイエスが「降りることができないでいる」と映っていたのですが、もう一人の犯罪人は、「この方は降りることができないのではない。あえて降りないのだ」と気づいたのです。

イエスは最後まで、罪人をあわれみ、みずから罪人の中に飛び込み、救いを告げる方でした。弱い人、泣いている人、見捨てられた人の友でした。この十字架上の場面でも、その態度は変わらなかった。犯した罪のために言い渡された刑罰として十字架にはりつけにされている二人の犯罪人に、イエスは十字架をあえて降りないことで近づき、友となられたのです。「もう一人の方」と書き記されたその犯罪人は、自分を友として受け入れようとされるイエスに、最期の場面で心を開いたのです。

「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」（23・42）ひょっとしたら、わたしはこのお方に愛を示してもらったのではないか。そう感じて、犯罪人は「わたしを思い出して」とイエスに語りかけたのです。犯罪人の読み通り、イエスはこの人をも愛し、これ以上ない希望の言葉をかけてくださったのです。

「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（23・43）イエスは十字架から降りないことで、罪あるすべての人の王となりました。わたしたちもこのイエスによって救われました。

わたしたちはこの一年、ときには罪の中にありました。そのたびに罪を悔やみ、告白し、十字架上のイエスを見上げて「わたしを思い出してください」と言ってきたのでしょうか。だれかを教会に案内した時、わたしたちは十字架をあえて降りなかったあのお方に救われたと信じていますと、証を立てたのでしょうか。直接語る機会がなくても、いつでも同じ信仰を証できる用意をもってこの一年過ごしてきたのでしょうか。

新しい典礼暦年を間近に控えて、ますます救い主イエス・キリストを待ち望む人になりましょう。「わたしたちの価値は、どれだけイエス・キリストに結ばれているかにかかっています」と堂々と言い表せる人になれるよう、王であるキリストに今日のミサの中で力を願いましょう。



待降節第 1 主日 (マタイ 24:37-44)

小さな好機も逃さず用意に充てる

A年の待降節が巡ってきました。マタイ福音書を手にも、これからの新しい典礼暦年を過ごしていきたいと思います。マタイは本来救われるはずのユダヤ人に対して呼びかけようと福音書を書き記しました。洗礼を受けたわたしたちが本来救われるはずの新しい民だとすれば、似たような思いでマタイ福音書の呼びかけに耳を傾けることができるはずです。

皆さんの手元に、文庫本の説教集「取って食べなさいA年」は届いたでしょうか。ありがたいと思ってくれるのはうれしいですが、説教集は読むものであって、家庭祭壇に大切に飾って置いていたらダメです。常に読んで、学びの足しにしてください。

ちなみに、わたしの説教集は3冊セットで、B年とC年がほかにあります。ただしこの残りの2冊は、引っ越しの荷物を隅から隅まで探してかき集めて、ようやく30セット見つかっただけで、あとはおしまいです。今のところ、皆さんにお配りする分はありません。この残り少ない説教集は、成人式を迎えるかたにプレゼントで配ろうと思っています。

あらためて説教集を確かめると、朗読されている福音書の箇所も、それぞれの日曜日の日付も、ほぼ同じのようです。これからどうしても説教が思いつかないときは、文庫本の説教集を一字一句間違えずに読み上げようと思っています。

気の早い話ですが、来年の待降節、再来年の待降節の朗読箇所と日曜日の日付を調べてみました。季節感は多少違いますが、朗読はぴったり合っています。ひょっとしてこれは、あと3年は寝て暮らせるということかなあと一人ほくそ笑んでいます。

ちょっと違う話ですが、瀬戸山の風7月号の自分の原稿を読み返す機会があって、読み返して愕然としました。「今月と来月の2回に分けて、これこれの話をしてみたいと思います」と書いてあるのです。しかし実際は、8月号で全く別の内容を書いていたのです。これは間違いなく認知症です。「光の園」か、前任地の「福見の園」あたりに、順番待ちを申し込もうと思っています。

「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来からである。」(24・44) 待降節は、主がおいでになるのを待つ季節です。わたしたちは主を迎えなければならないのですが、その心構えをどこに求めたらよいでしょうか。

考える一つの方法として、わたしたちが主と必ず会うことになるその時を想像することにしましょう。わたしたちが主と必ず会う時は二度やってきます。一度目はこの人生を終えた時、もう一度はイエスが栄光を帯びて再び来られる再臨の時です。

二度目の再臨の時は、わたしたちには想像もつかないわけですが、一度目、この人生を終えた時に主と必ず会う、その場面は想像することができます。わたしも50歳ですから、明日何が起こるかわからない。そ

うなると、「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」という呼びかけは、他人事ではなくなるわけです。

では何を用意しておくかということですが、わたしは、ルカ福音書の「不正な管理人」のたとえを思い出します。「そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。」（ルカ 16・4）何かの形で、わたしのことを弁護してくれる人、わたしに有利な証言をしてくれる人を見つけておけば、この人生を全うして最初に主である神と出会うとき安心だと思います。

世間的な言い方ですが、誰かに恩を売っておけば、その人のおかげでわたしは救われるかもしれません。そういうわけで、説教集もタダで配りましたし、今月の「瀬戸山の風」に書きましたが、目の不自由な方のためにわたしの記事を録音して渡すことにしました。あるいはさまざまな原稿依頼も、ほとんど断らずに書く。そうしておく、わたしは誰かの証言のおかげで、天国の隅に置いてもらえるかもしれません。

皆さんは、それぞれの最初の出会い、神と向き合う第一の時までに、何をやるのでしょうか。わたしと同じで誰かに恩を売って、彼らに証言してもらおうと願うなら、子供たち孫たちに恩を売っておくのが手取り早いと思います。「生きている間に、わたしにこんな思い出を残してくれたなあ。」そういう形で神に証言してもらおう出来事をやるのは、わたしは賢い人生の過ごし方だと思います。

失礼を承知で申し上げますが、ここにおられる三分の二の方々は、わたしよりも歳がいます。ということはつまり、「用意をしておかなければ、明日何が起こるかわからない」のです。具体的に何を記憶として受け継がせてあげるのでしょうか。

まずはお一人お一人が受けたことを思い出してください。クリスマスの期間中、皆さんは馬小屋に手を引かれて行き、親子で共に幼子イエスに祈ったはずです。「あー、そう言えば馬小屋でいっしょに祈ったなあ。」それは確実に、あなたが神の前に立たされる時に有利な証言となるでしょう。

またかつては、クリスマスも復活祭も、夜のミサに行けば朝は行かなくても良いなどと、そんな都合のいい解釈はしなかったと思います。クリスマスの夜半のミサに行った人も、もう一度翌朝の早朝か日中のミサに行って、幼子イエス様にご挨拶に行ったはずです。それを忠実に、わが子に、自分の孫に、伝えるのです。子や孫たちがあなたを思い出するとき、「そう言えば馬小屋に連れて行ってくれたなあ」と思い出す。それがあなたに有利な証言となり、人の子の到来の時、顔を上げて迎えることができるのではないのでしょうか。

「人の子は思いがけない時に来る」のです。わたしたちは悠長にしている暇はないのです。あなたが用意できたはずの時間を無駄にすれば、もはやそのチャンスは二度と巡ってこないかもしれません。目を覚まして、いま用意しましょう。人の子の到来を喜び迎えることができるように、どんな小さな機会も逃さず、用意の時に結び付けていきましょう。



待降節第 2 主日 (マタイ 3:1-12)

イエスに向き直るかどうか、一刻を争う

待降節第 2 主日を迎えました。洗礼者ヨハネが登場します。ヨハネは事態が切迫していると感じて人々に悔い改めの洗礼を促しています。事態は一刻を争う。その緊迫した呼びかけに、わたしたちも耳を傾け、必要な行動は何か、考えてみましょう。

かんころもちが浜串教会のご婦人から送ってきました。どんな意味合いのかんころもちか、お分かりでない方もいらっしゃると思いますから、ちょっといきさつをお話しします。11 月 15 日に前任地の浜串教会で教会献堂五十周年記念ミサが行われまして、記念ミサの説教を頼まれて参加してきました。

ミサの時間は午前 10 時半だったのですが、9 時半には浜串教会に入りまして、誰か懐かしい人はいないかと思い、ウロウロしていたわけです。聖堂に入りますと、懐かしいご婦人方がまとまって座っていました。

祭壇から降りて行って近づきますと、その中に司祭館のすぐわきの空き地でよくかんころを作っていた方が見えたのです。「そうか、そろそろかんころを作る時期だなあ」と思って声をかけようと近づきますと、「神父様はどちらの神父様ですか？」と言うではありませんか。

わたしは声を失いまして、半年前まで浜串にいたのに、「どなたです？」はないだろうと思いました。わたしはこう言いました。「この前までいた中田神父だよ。どなたですかはあんまりだわ。かんころもそろそろ作り始める頃でしょ。田平教会にかんころを 2 本送ってちょうだい。それで今の無礼は勘弁してやるから（笑）」この一件で、わたしは浜串教会への未練がきれいさっぱりなくなりました。

そのご婦人が、さっそくかんころを送ってくれたわけです。2 本ではなくて 5 本入っていました。すぐにお礼の葉書を書きました。何人かにおすそ分けして、味わって食べております。犬も歩けばかんころに当たる。思い切って言うてみるものだと思います。

かんころの届いた日からさかのぼって考えてみました。11 月 15 日にかんころ 2 本で勘弁してやると言ってから、1 週間くらいで届いています。芋を洗って、薄皮をむいてスライスし、いったん茹でて干し、日光と寒風にさらし、もう一度蒸して練り上げて成型する。それが 1 週間で 1 本ずつ袋詰めされて送られてきました。

おそらくすぐにとりかかって送ってくれたのでしょう。わたしが冗談半分に言ったことでも、ご婦人は一刻を争うと受け止め、行動を起こしたということです。わたしもこのご婦人が一刻を争って仕上げてくれたことをねぎらって、また送ってねと書きました。

福音朗読に戻りましょう。洗礼者ヨハネの活動が取り上げられています。待降節第 2 主日はいつも洗礼者ヨハネを取り上げますが、マタイ福音書が描く洗礼者ヨハネの活動は、まさに一刻を争うことが強調されています。いくつか言葉を拾ってみましょう。

「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。」

(3・7) 「斧は既に木の根元に置かれている。」 (3・10) 「手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」 (3・12) 厳しい言葉が並んでいます。すぐに結果を出しなさいと、叫んでいるのです。

ではどんな結果を、洗礼者ヨハネは求めているのでしょうか。今週の朗読で具体的な招きをしているのは一つだけです。洗礼です。ルカ福音書が伝える洗礼者ヨハネの活動の場面では、それぞれの人に合った具体的な行動が示されていました（「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」(ルカ 3・11) など）が、マタイはそれらを省略しています。事態は一刻を争うのであり、究極の結果は洗礼を受けることだと言っているのです。

洗礼を受けるとは、生活の物差しを自分に置く生き方から、神が喜ぶかどうかの物差しで生きる人に 180 度変わりますという意思表示です。神が指し示す方向に今すぐ生き方を変えますという決意の表れです。一つ、神様の喜ぶ生き方を選び、またしばらくしたらもう一つ、ではなく、今すぐに、全面的に向き直るべきだと決断を迫っているのです。

ヨハネが授けた洗礼は、「後から来る方」にすっかり向きを変える心の準備の洗礼でした。「後から来る方」イエスは、「聖霊と火」で洗礼を授け、洗礼を受けた人の生活をすべて、すっかり神の喜ぶ方向に向け直すことを求める方なのです。「後から来る方」イエスを喜んで迎えるために、当時の人々はヨハネから悔い改めの洗礼を受けました。

わたしたちはどうでしょうか。ここにいるほとんどの皆さんはすでに洗礼を受けています。では、洗礼者ヨハネの呼びかけは届いているでしょうか。一刻も早く、自分が中心の生き方からイエスが中心の生き方に向き直って、日々歩いていると言い切れるでしょうか。

どうやったら教会の求めに答え、なおかつ現在の生活も両立できるだろうか。そのような葛藤や悩みを経験しておられるでしょうか。日曜日は部活だから、日曜日仕事だから、ミサには行かない。ミサにどうやったら行けるだろうかの悩みがない。悩みや葛藤が抜け落ちている。こうした生活は本当に受けた洗礼の恵みに生涯忠実でありたいと願っていることになるでしょうか。

洗礼を受けたことで、その次の秘跡の恵みが開かれます。大人の信者になる堅信、聖体、罪のゆるし、病者の塗油などです。またある人は婚姻の秘跡にあずかり、ある人は叙階の秘跡にあずかります。人生のあらゆる場面を、教会を通して受ける神の恵みに合わせていく。「悔い改めにふさわしい実を結べ」とは、この覚悟を求めているのだと思います。

事態は一刻を争います。気が向いたら聖体拝領します、告白します、暇があれば結婚式を教会でします、ではないのです。今すぐに、わたしはイエスの喜びとなる生活に向き直りますと、ヨハネの招きを自分のものとしましょう。これからご降誕までの日々を、大切に過ごしていけるよう、ミサの中で恵みを願いましょう。



待降節第 3 主日 (マタイ 11:2-11)

貧しい人は福音を告げ知らされている

待降節もすでに 2 週間進み、第 3 主日を迎えました。救い主を迎える準備を、外面でも、内面でも急ぐことにしましょう。内面的には、ゆるしの秘跡を受けたり、久しく教会に通うことができないでいる人を訪ねたりして、温かい心を自分の中に持つように努めましょう。

先週話したかと思いますが、イスラエル巡礼に行くことにしました。11 月締切の申し込みを済ませてから、今か今かと旅行が成立しましたという返事を待っておりました。その返事が金曜日に来まして、5 名という実に少人数ですが、7 日間聖書の舞台を巡ってきたいと思います。

5 人の顔ぶれはちょっとユニークです。カトリックの司祭であるわたしが 1 人、3 人の牧師、それと旅行会社の社長です。ミサはどうなるのか、それだけが心配でしたが、少なくとも主日のミサだけは、山上の説教の教会を押さえていただいているそうです。あとはひょっとすると、宿泊する自分の部屋でミサをささげることになるかもしれません。

旅行会社の野口社長とは、かなり前に知り合いました。島本大司教様が青年たちを巡礼に連れて行きたいと希望されて、その青年の同行司祭として付いて行ったのがきっかけでした。その後わたしの両親に「一度は聖地巡礼に行ってみないか」と勧めて旅費を用意してあげて参加した巡礼でも、野口社長が世話してくれました。これで 3 度目です。

ミサのことだけが心配と言いましたが、金曜日の電話での返事を聞いてちょっとビビっております。「神父さんは福岡空港から、牧師さんは関西空港から、わたしは成田空港から出発しますから、まずはソウルで落ち合いましょう。ではよろしく」と言われたのです。福岡で落ち合うならまだしも、ソウルで落ち合いましょうと簡単に言われてもなあと、尻込みしてしまいました。これで英語の勉強に加えて、ハングルの勉強も必要になりました。

福音朗読に入りましょう。「もはや一刻の猶予もない」と群衆に救い主を迎える準備を促した洗礼者ヨハネにとって、キリストが「来るべき方」であるかどうか、何よりも気にしていたことでした。洗礼者ヨハネは許されない結婚を諫めたことでヘロデの怒りを買って、囚われの身となっていました。弟子を通じて、イエスの言葉だけを頼りに、来るべき方であるかどうかを考える必要があったのです。

イエスは遣わされてきた洗礼者ヨハネの弟子たちに、次のように答えました。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」

(11・4-6)

ところで、このイエスの言葉をマタイ福音書から拾っていくと、「目の見えない人のいやし」が 9 章と 20 章にあり、「足の不自由な人のいや

し」が 15 章と 21 章に見られ、「重い皮膚病の人の清め」が 8 章で取り上げられます。「耳の聞こえない人のいやし」は直接は見つかりませんが、15 章ではその他多くの病人がイエスのそばに連れてこられ、彼らをいやしたとあります。「死者の生き返り」については 9 章の「ヤイロの娘」が当てはまりそうです。つまり、洗礼者ヨハネの弟子たちは、イエスの力あるわざを一度に全部見ていないのかもしれませんが。

それでも、仮にそのうちの一つを見ただけでも、彼らは洗礼者ヨハネに告げることができたでしょう。「あの方こそ、『来るべき方』です」と。それほど、イエスがおこなっていた力あるわざは、洗礼者ヨハネの弟子たちを納得させる十分な力を持っていたのでした。

21 世紀に住むわたしたちはどうでしょうか。「目の見えない人が見えるようになった。足の不自由な人が歩けるようになった。さあ皆さん、一人残らず教会に来て、イエス・キリストを信じてください。」そういう時代なのでしょうか。残念ながら、そのような呼びかけはできないかもしれません。ではわたしたちには、誰かを教会に招き、神の呼びかけを生きる道しるべにする仲間を増やすきっかけを持たないのでしょうか。

わたしは、奇跡は起こらなくても、教会にはまだ、人々を招き入れるだけの力あるわざを持っていると思っています。「目の見えない人が見える」これは、何も肉体的なことに限りません。

何を判断の基準にすればよいか見えてない人は、もし適切な判断の物差しを与えられたらすべてが新しく見えてくるはずです。教会には、キリストを判断の基準に生きる人たちが集まっています。わたしたちがそれを示すなら、ある人は見えなかったものが見えるようになるのです。

何らかの失敗をして人生に挫折し、一步も足を前に出せずにいる人がいるかもしれません。そのような人に、イエスはどんな過ちからでも、立ち直るために一緒に歩いてくださる。ゆるしの恵みを与えて、立ち上がって歩き出す力を与えてくださいますよと、わたしたちが導いてあげるなら、一步を出せなかった人が歩き出すかもしれません。

もはや人生に何の望みもなく、死んだようにしている人もきっといるでしょう。その人たちに、イエスはパンを分け与えてくださいます。死んで復活したキリストを信じてくれるなら、あなたにも復活のキリストがいのちのパンを与えてくださいますよと、導くことができます。すると、文字通り死んでいたようなその人が、生き返るかもしれません。

皆さんの座っている周りを見てください。教会から遠のいて、もはや温める人のいなくなった席が空いていないでしょうか。その席にかつて座っていた人は、教会の敷居が高くなって、あるいは教会に嫌気がさして、来なくなったのでしょうか。そんな人にわたしたちは働きかける責務があります。洗礼者ヨハネの弟子たちに倣って、「田平教会は、福音が告げ知らされているよ」と、知らせに行くべきです。いつ行きますか。今でしょ。



待降節第 4 主日 (マタイ 1:18-24)

神は我々と共におられると声を上げよう

待降節第 4 主日、ご降誕まで 1 週間と迫ってきました。ヨセフの取った行動から、これから 1 週間の過ごし方のヒントをいただくことにしましょう。

皆さんは夢を見ることがあるでしょうか。夢を見た時、夢から何かを感じるでしょうか。わたしは、夢を解いてくれる人がいたらぜひ話を聞いてみたいと思っています。ヨセフは夢を見て、しかも夢の中できちんと解説もしてもらって、目が覚めたらどんな行動を取るべきかを示してもらいました。うらやましいです。

わたしは時々うなされる夢を見ることがあります。しかし、ヨセフのように解説してもらったことはありません。わたしが夢でうなされるのは決まっていくつかの条件に当てはまる時です。一つは、夜中の 2 時とか 3 時とか、本当に遅い時間に寝て夢を見ると決まってうなされます。

そしてその夢はさまざまなバリエーションがありますが、どれも同じテーマです。それは「急いでいるのに間に合わない、必死に探すけれども見つからない」この繰り返しです。入祭の歌が流れてきてミサが始まったのに、祭服が見つからずに 5 分経っても 10 分経っても入堂できないとか、仲間と旅行に出かけるために空港に来たけれども、いくら探しても航空券が見つからないとか、さまざまなバリエーションで同じテーマの夢を見るのです。これはいったい何を意味しているのでしょうか。主の天使が教えてくれたらいいのになあと思います。

さてヨセフも夢を見ました。ヨセフは思い悩んでいました。マリアとひそかに縁を切ろうとまで思っていたのです。それはきっと、マリアの心をまだヨセフは知らなかったからです。マリアは、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカ 1・38)と答えた女性です。神の望みのままにわが身を差し出す人であることができたなら、あのように思い悩むこともなかったでしょう。

ヨセフは正しい人でした。ヨセフもまた、神の望みのままにわが身を差し出すことのできる人でした。実は二人は一緒になる前から、同じ思い、同じ理想、同じ価値観を持っていたのです。

しかし、当時は結婚するまで一緒になることは考えられない時代だったので、マリアの思いを知ることでもできず、一人で思い悩むことになりました。そこへ主の天使が現れて、「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」と声をかけたのです。マリアの思いも、ヨセフの思いも理解している存在が二人を仲介してくれたのです。

ヨセフは夢の中で、マリアが自分と同じく神の前に正しい人であることを知ります。主の天使のさまざまな説明がヨセフに勇気を与えてくれますが、わたしはマタイ福音記者が証言しているように、「インマヌエル」「神は我々と共におられる」この理解がヨセフを決断させたので

はないかと思うのです。

ヨセフもまた、「神は我々と共におられる」と常々信じていたことでしょう。それはマリアも同じ思いでした。人間にすぎない自分たちには理解を超えるけれども、出来事の向こうには「神は我々と共におられる」との神の思いが働いている。そうであるなら受け入れよう。マリアにとっても、ヨセフにとっても、それは同じだったのです。

「それなら、わたしの思いと同じだ。」ヨセフの腹は決まりました。自分も、マリアも、「神は我々と共におられる」と確信している。同じ思い、同じ価値観を持っているのだから、きっとどんな困難も乗り越えていける。主の天使が夢に現れたことで、一人で思い悩んでいたら永遠に解決できなかった疑問が解けたのだと思います。

わたしたちも、ヨセフの取った行動をこの一週間思い巡らしたいのです。神は今、わたしたちに何をしようとしておられるのでしょうか。答えは福音朗読で示されました。「神は我々と共におられる」そのことを証明しようとしておられるのです。

社会はいまだに、正しい人が正しい報いを受けにくい状況にあります。上手に動いた人がいい思いをしたり、裏で不正を行っていても、運よく見つからなかったとか追及されなかったと思いがっている人がいます。一人思い悩んで泣いている人、正しい訴えが取り上げられずに絶望しかけている人がいる。そんな中で、神は行動を起こしてくださり、「神は我々と共におられる」と声を上げてくださったのです。

そうであれば、眠りから覚めたヨセフが妻マリアを迎え入れたように、わたしたちも行動を起こす必要があります。わたしたちは現代にあって、「神は我々と共におられる」と、声を上げる人なのです。声を上げることが難しいと感じるなら、忠実に教会の務めを果たすことで、「神は我々と共におられます。わたしたちはその神の導きを優先します」と、態度で表しましょう。

キリスト者が一人残らず「神は我々と共におられる」と言葉や態度で証するとき、まもなく与えられる神の御子はわたしたちにとって喜びとなり、勇気と力を得る源となるでしょう。そして、「あなたたちの信じる神は、わたしたちにとっても共にいてくださるのでしょうか」と尋ねる人に、自信をもって「そうです」と伝えることができるようになるはずです。

「神は我々と共におられる。」わたしたちは間もなく、幼子イエスを通してそのことを確認します。わたしたちの心に、イエス様をお迎えする部屋を整えて、残りわずかとなった日々を大切に過ごしてまいりましょう。



主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

この夜は民全体に与えられる大きな喜び

主の降誕おめでとうございます。中田神父にとっては、初めて田平教会で迎えるご降誕です。今日の福音朗読から、「見失った一匹の羊にも届く大きな喜び」という見方で考えてみたいと思います。

今年のクリスマス、わたしは初めてある人々に、「力が足りず申し訳ない」「ご降誕のミサにあずからせることができず、本当に面目ない」と思いました。わたしたちの小教区に限りませんが、それぞれの小教区には、行きたくてもご降誕のミサにあずかれない人、あずかれなかった人がいるわけです。

たとえば、わたしはこちらに来て 25 人近い人のお見舞いをしています。この方々は、残念ながらご降誕のミサにあずかることができません。12 月のお見舞いをしながら、一人ひとりに「ご降誕は今のこの場所で迎えることになると思うけれども、お祈りしていてね」と声をかけました。

しかし、気分は晴れませんでした。「お祈りしていてね」なんて、慰めにならないと思ったのです。せめてご降誕のミサにはあずかりたい。そう思っている人に「がまんしてね」と言っているのですから。気の利いた言葉も思い浮かばず、本当に心苦しかったです。

さらに、ご降誕まで生きられず、旅立っていった人たちもいました。特に直前に亡くなった人には、ご聖体も授けてあげられず、「ご降誕はお祈りしていてね」と言っただけの、力が及ばなかった悔しさから、わたしは唇をくんで帰ってきたのです。

ほかにも、わたしの知らないところで今日の日を迎え、一人で心をこの聖堂に向けている人がいるかもしれません。ひとことで言うなら力が及ばなかった。本当にそう思いながら、今年のご降誕を迎えたのです。

福音朗読から、ある部分を比べて考えてみたいと思います。皇帝アウグストゥスは、全領土の住民に、登録せよと勅令を下しました。これに対し神が遣わされた天使は、民全体に与えられる大きな喜びを告げました。どちらも、自分の力が及ぶすべての人を対象にしています。しかし登録せよとの勅令は不安と恐怖しか与えませんが、主の天使の知らせは民全体に大きな喜びをもたらしたのです。

さらに、皇帝の勅令は全領土の住民に及びましたが、恐らくそれでも人数のうちに数えられていない人はいたと思います。たとえば羊飼いは、住まいを転々としていたわけですから、本来登録すべき自分の町や村などなかったでしょう。彼らはきっと数のうちに入っていなかったのです。また重い病気の人々、人々から遠ざけられて暮らしている人々も、数のうちに入っていなかったと思うのです。

主の天使の知らせは違っていました。おそらく人口調査を命じられた人々が人数に含めてなかった羊飼いに、喜びの知らせは届いたのです。想像をたくましくするなら、重い病気の人、人々から遠ざけられて暮らしている人々にも、大きな喜びが告げ知らされたのです。中田神父の力

は及びませんでした。御子を与えてくださった神のいつくしみの手は、及ばない場所などないのです。今この時にも、民全体に与えられる大きな喜びが告げ知らされているのです。

わたしたちのまわりではどうでしょうか。「民全体に与えられる大きな喜び」は、隅々にまで届けられているのでしょうか。中田神父の力だけではどうしても及ばない場所があります。どうしても把握できない人たちがいます。もし皆さんが、だれか泣いている人、数えてもらっていない人を知っていて、今日のこの喜びを届けに行ってくれたら、2千年前の出来事は、今この時にも実現するのです。皆さんの手を、皆さんの足を、喜びの知らせを届ける手に、届ける足にしてほしいのです。

しかし中には、どう伝えてよいかわからない人もいるかもしれません。そんな方に、一つの道具を紹介します。わたしは必要があって、田平教会でのミサの様子を毎週録音して残しています。わたしが関わっている目の不自由な人にミサの録音を届けるためです。もちろんこの夜半のミサも録音してCDに残しています。もし、伝え方がわからないという人がいれば、今日のこの夜半のミサの録音は役に立つと思います。わたしに声をかけてください。

この世は全領土の住民を把握しようとしします。しかし、把握はしても告げ知らせるものは責任と義務です。せいぜいよくて権利です。神は違います。神はご自分の民全体に、救い主がお生まれになったと告げてくださいました。誰も気にかけてくれない人にも、忘れられ、泣いている人にも、大きな喜びを告げてくださいました。

そこでわたしたちも、その知らせを届けるために一役買ひましょう。この大きな喜びの知らせが、完全に民全体に届くまで。このミサにあずかれなくても、わたしたちにはあの人喜びの知らせを届けに来てくれるから大丈夫。そんな、神の望みが隅々にまでいきわたる神の国の完成のときまで。



主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

今日の洗礼の恵みに日々生きていく

あらためて主の降誕おめでとうございます。主の降誕日中のミサは、ヨハネ福音書の冒頭が必ず福音朗読に選ばれます。今年は大人の方の入信の秘跡（洗礼・堅信）がこの後に控えています。そこで秘跡の恵みを思い浮かべながら学びを得たいと思います。

朗読から次の箇所を取り上げたいと思います。「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」

（1・12）「言（ことば）」と表されているのはわたしたちのために人となってくださったイエス・キリスト、昨晚から馬小屋で飼い葉桶に寝かされている乳飲み子として人類に与えられた救い主のことです。神が、人間の救いのために、民全体に与えられる大きな喜びとして御子を世に与えてくださいました。ここにいるわたしたちは、そのことを信じて、こうして集い、祝っているのです。

しかし、もしここにいる誰かが、「今年もクリスマスにミサに来ました。では来年のクリスマスまでさようなら。また会いましょう」と言うなら、その人はクリスマスの一瞬、イエス・キリストを受け入れただけで、毎日曜日、毎瞬間、イエス・キリストに導かれて生きる道を選んでいるとは言えないと思います。

先ほどの引用箇所でヨハネ福音記者が言いたいのは、一瞬イエス・キリストを受け入れるだけでなく、今日も明日も、イエス・キリストがわたしを神の子としてくださる、神の子として導いてくださると信じ続ける必要性を強調しているのです。

さて今日は、入信の秘跡を受けるために長い準備をしてこられた方がその時を待っています。洗礼・堅信の秘跡は、言ってみれば今日一日の出来事です。しかし、神の恵みによって生きる生活は、今日から日々積み重なっていくものなのです。洗礼によって原罪と自罪のすべてが赦された。赦されて神の子となっただけでなく、今日から、わたしを変えてくださったイエス・キリストに感謝して過ごす日々が始まるのです。

入信の秘跡を終えている皆さんも、今日洗礼を受ける方を見守りながら考えましょう。わたしたちは、今日の入信者よりも一日の長があるものとして、日々イエス・キリストの恵みと導きに信頼して歩み続けます。その約束を、今日の入信者と共に神におさげします。こうしてわたしたちは、互いに喜び合い、神の恵みを感謝し合い、神の子となる資格を日々新しくしていくのです。

ではこれから、入信の秘跡である洗礼と堅信の秘跡に移りたいと思います。洗礼を受けてからは、ここにいる皆さんが兄弟姉妹です。分からないことは教えてください。困ったことは助けてください。信頼して、神にご自身をお委ねしましょう。